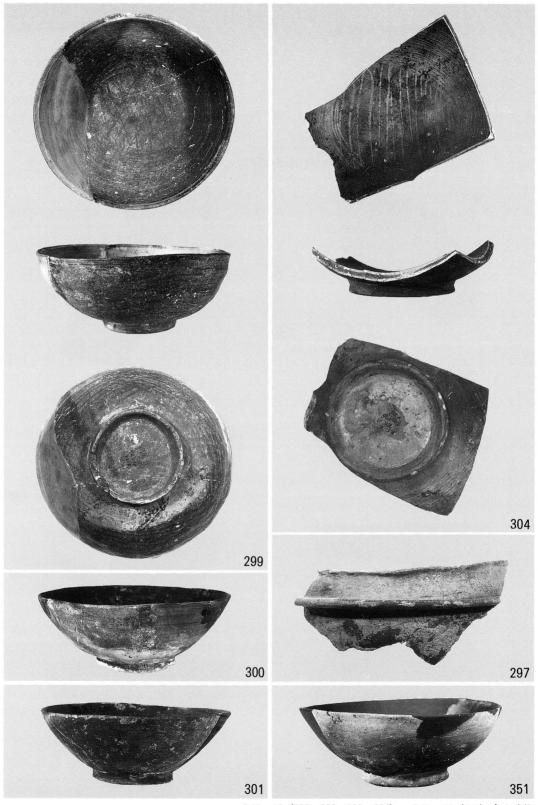
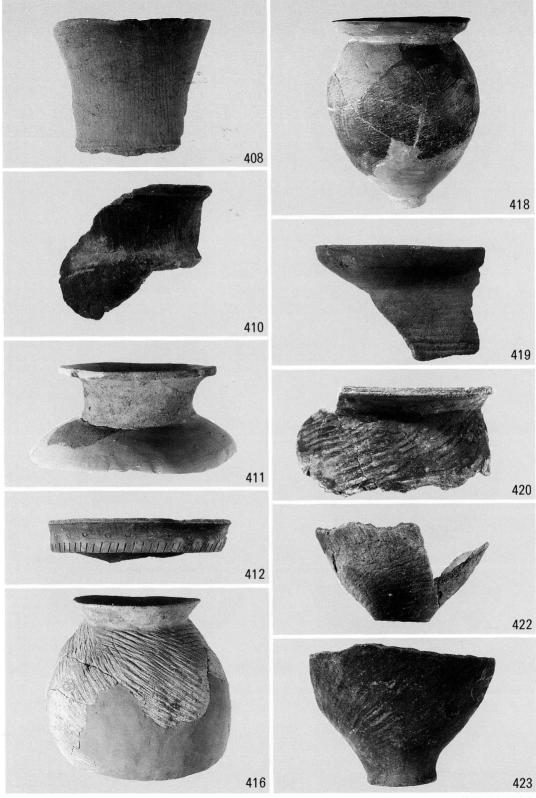


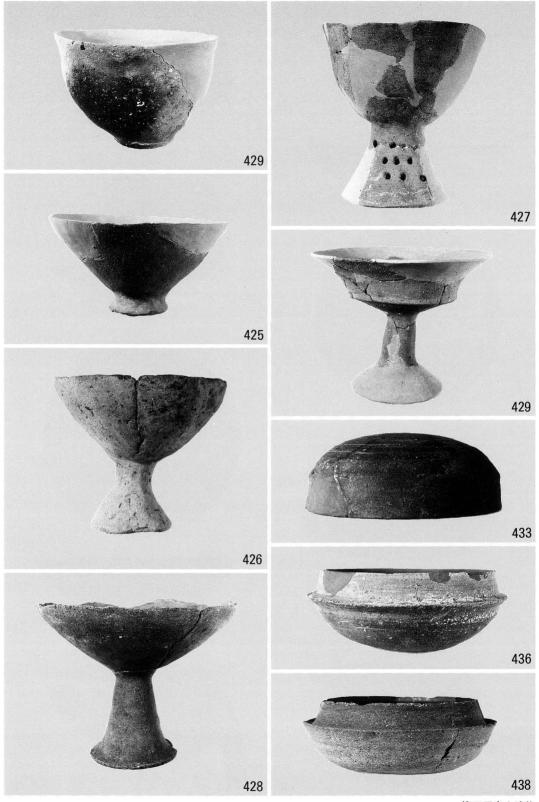
SE-9 (219・222・225・232) ・SK-10出土遺物



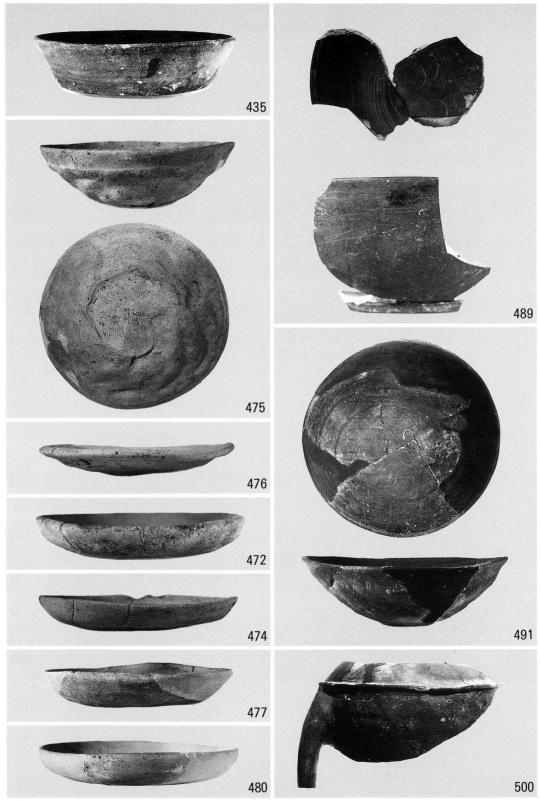
SK-10 (297・299~301・304) ・SD-11 (351) 出土遺物



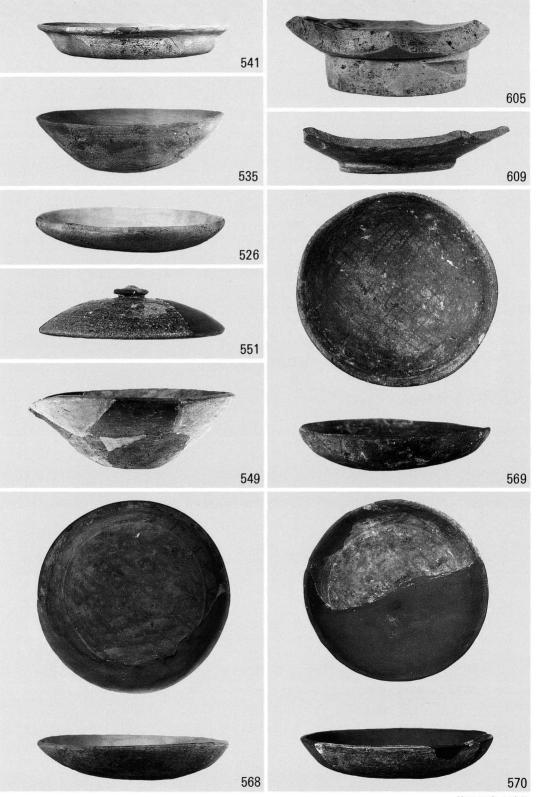
第IV 層出土遺物



第IV 層出土遺物



第IV 層出土遺物



第Ⅲ層出土遺物

II 老原遺跡(第2次調查) 発掘調査概要報告

- 1. 本書は、八尾市東老原1丁目11番地・16番地他で実施した関西電力株式会社の架空送電線 鉄塔新設に伴う老原遺跡(第2次)発掘調査の概要報告である。
- 1. 本調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力株式会社から委託を受けて実施したものである。
- 1. 現地調査は原田昌則・成海佳子を担当者として、昭和60年8月19日から9月10日まで実施した。
- 1. 内業整理・本書作成業務は、現地調査終了後実施し、昭和62年3月31日をもって終了した。 本書作成に係る業務は主に成海が行ったが、遺物写真撮影は原田が担当した。
- 1. 本文は、第1章・第2章・第5章を原田、第3章・第4章を成海が執筆した。
- 1. 現地調査・内業整理参加者は下記のとうりである。

相松隆・麻田優・上辻よしえ・太田修司・岡崎英雄・柏本幸寿・亀村ゆかり・角 肇・大黒 静子・中川暁・長野琢磨・南艸良彦・益本浩・松岡利行・松村一・山内千恵子・横山妙子・ 吉原早智子・和田孝(以上五十音順)

本 文 目 次

第1章	調査に至る経過	155
第2章	地理•歷史的環境	157
第3章	調查概要	162
第	1節 調査方法と経過	162
第	2節 基本層序	162
第	3 節 検出遺構	165
	• 第 1 調査区······	166
	• 第 2 調査区······	170
	• 第 3 調査区······	173
第4章	出土遺物観察表	198
第5章	まとめ	245
	挿 図 目 次	
第1図		
第2図		
第3図		
第 4 図		
第 5 図		
第6図		
第7図		
第8図	S E — 1 平断面図	170
第9図	SE一1・SD一1・SD—2・第2調査区包含層出土遺物実測図	171
第10図	第 2 調査区平面図	172
第11図	SE-2平断面図	173

図版四	S E — 2			図版九	S K — 2 出土遺	t 物 1		
	S K — 3							
図版三	第3調査区全景			図版八	SE-2 · SE	二3出土遺物		
	SE-1							
図版二	第2調查区全景			図版七	S K一1出土遺	物		
	S K-1				SK-2土器集	積		
図版一	第1調査区全景			図版六	SK-2 • SK	X-5 • S E-2		
		図	版	目	次			
第30図	第3調查区平面図…		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •				197	
第29図	第3調查区包含層出土遺物実測図3							
第28図	第3調查区包含層出土遺物実測図2							
第27図	第3調查区包含層出土遺物実測図1							
第26図	SP-2・SP-4・SP-5 出土遺物実測図							
第25図	S K-6・S K-7 出土遺物実測図							
第24図	S K-6 平断面図							
第23図	S K-3・S K-4・S K-5 出土遺物実測図							
第22図	SK-3平断面図…							
第21図	SK-2出土遺物実							
第20図	SK— 2 出土遺物実測図 4							
第19図	SK一2出土遺物実測図3							
第18図	S K-2 出土遺物実測図 2 ·····							
第17図	SK-2出土遺物実	測図1…					182	
第16図	SK-2平断面図…						180	
第15図	SE-3出土遺物実	測図					178	
第14図	SE-3平断面図…						177	
第13図	SE-2出土遺物実	測図 2 …					175	
第12図	SE-2出土遺物実	測図 1 …					174	

同上 断面

図版一一 SK-2出土遺物3

図版一三 SK-3 · SK-4 · SP-2

第3調查区包含層出土遺物1

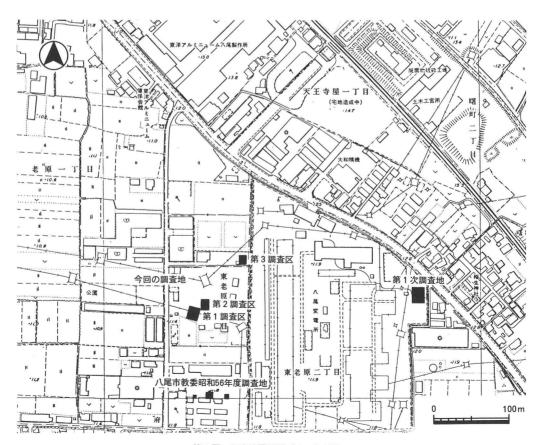
図版一二 SK-2出土遺物 4

図版一四 第3調査区包含層出土遺物2

第1章 調査に至る経過

老原遺跡は、八尾市南西部の老原1丁目・東老原1丁目に所在しており、地形的には長瀬川 左岸の沖積地にあたる。

当地域が遺跡として認識される以前は、かつて奈良時代後期に比定される軒丸瓦の出土を見た老原1丁目の通称「五条の宮」付近を中心として、寺院に関連した遺構が存在していたものと考えられていた。ところが、昭和56年に東老原1丁目で八尾市教育委員会が関西電力株式会社社宅建設に先立って実施した発掘調査では、古墳時代後期と鎌倉時代前期に比定される二時期の遺構が検出され、老原遺跡が複合遺跡の性格を帯びた遺跡であることが判明した。さらに配和60年に当調査研究会が東老原2丁目の関西電力株式会社八尾変電所内で実施した発掘調査(第1次調査)でも、鎌倉時代に比定される水田遺構を検出している。



第1図 調査地周辺図(1:5,000)

このような情勢下、関西電力株式会社から、八尾市東老原1丁目11番地・16番地他に架空送電線鉄塔4基を新設する旨の計画書が八尾市教育委員会に提出された。これら一連の計画書を受けた八尾市教育委員会は、当該地が遺跡推定範囲であるため、八尾市文化財保存に係わる事務取扱い要綱に基づき、試掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通告した。昭和60年7月11日に、八尾市教育委員会が架空送電鉄塔新設予定地4箇所で試掘調査を実施した結果、3箇所から平安時代末期に比定される遺物の出土が確認された。以上の結果から、基礎工事によって遺構が破壊されることが予想される3箇所については、記録保存に必要な資料を作成する目的で、事前に発掘調査を実施することが、八尾市教育委員会・関西電力株式会社の二者間で了解された。

発掘調査は、当調査研究会が主体となって実施することが、八尾市教育委員会・関西電力株式会社・当調査研究会の三者間で決定され、契約締結後、現地調査に着手した。調査期間は昭和60年8月19日から9月10日で、調査面積は542㎡を測る。

- 註1 八尾市史編纂委員会 『八尾市史』1958
- 註2 (財)八尾市文化財調査研究会 「老原遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』:(財)八尾市文化財調査研究会報告2 1983
- 註3 (財)八尾市文化財調査研究会 「老原遺跡(第1次調査)」『昭和59年度事業概要報告』:(財) 八尾市文化財調査研究会報告7 1985

第2章 地理·歷史的環境

八尾市の位置する河内平野南部周辺の地形は、東部に生駒山地とその裾から西側に広がる複合扇状地、南部は羽曳野丘陵、西部は上町台地から成る。さらに平野部を流れる河川には、大和盆地の水を集めて、生駒山地と松岳山丘陵間を流下する大和川がある。大和川は河内平野と融合する藤井寺市船橋付近で河南盆地を北流する石川と合流していた。宝永元年(1704)に付け替えられた新大和川はこの合流点から西流しているが、古大和川はこの地点で流路を北西に変え、さらに八尾市二俣付近で玉串川と長瀬川に分流して河内平野内を流下していた。このほか、生駒西麓部に恩智川、玉串川と長瀬川の間には楠根川、さらに南部には大乗川・東除川・西除川の水を集めて西流する平野川が存在していた。河内平野はこれらの諸河川の永年に亘たる沖積作用により形成されてきた。このように河内平野南部は、地形的に多様な様相を示す地域であったばかりでなく、古墳時代以降は大和と難波をつなぐ中継点として政治・経済的にも卓越した地域であったと言えよう。したがって、各時期の遺跡立地もそれぞれの時勢に対応して推移してきたことが窺える。今回の調査地である老原遺跡が位置する八尾市老原1丁目・東老原1丁目一帯は八尾市の南部に当たり、前述した水系で区別すれば長瀬川・平野川に挟まれた低平地に当たる。以下、周辺遺跡を時期ごとに概観してみる。

縄文時代草創期においても自然環境にはさほど変化がなかったようである。この時期の遺物は長原遺跡・桑津遺跡から有舌尖頭器が単独で出土しているのみで、明確な集落は検出されていない。続く早期の遺跡は生駒西麓に集中する傾向で、神並遺跡・大県遺跡で押形文土器が出土している。縄文時代前期の河内平野の環境は、温暖化に伴う海進現象が顕著で、海岸線が内陸奥部に及んでいたものと推定されている。この時期の遺跡は前代に比してやや低位置に移動したようで、海進のピークに符合した現象として受けとれる。この時期の遺跡には、北白川下層2式に比定される爪形文土器が出土した国府遺跡・恩智遺跡が挙げられる。中期の河内平野

の環境は、河内湾の海水面の低下時期にあたる。遺跡の立地は、前代の海進によって河口部に 形成された扇状地や砂州上にある。この時期には、前期に出現している国府遺跡・恩智遺跡 が継続して営まれているほか、馬場川遺跡・縄手遺跡が出現する。なお、出土した土器は初頭 註11 註12 から中葉にかけては瀬戸内地方の縄文時代中期を代表する船元式が分布し、後葉にかけても瀬 戸内地方の里木II式が出土する他、中期末には関東系の加曽利E式の影響を受けた新しい土器 型式として星田式が成立している。後期になると、さらに生駒西麓に芝ケ丘遺跡・日下遺跡・ 鬼塚遺跡・大県遺跡が出現するほか、羽曳野丘陵末端には林遺跡、河内低平地に位置する八尾 註16 南遺跡でも遺物が出土している。土器の主流は前半においては中期と同様瀬戸内系(中津式・ 福田KII式)や関東系(加曽利E式)が占める反面、馬場川O式に代表される地方派生型式の 土器も出現している。晩期の遺跡は後期から継続するものが多いが、新たに船橋遺跡・長原遺 跡が出現している。船橋遺跡出土の土器を指標とする船橋式土器は北九州地方を中心とする夜 臼式土器・板付式土器に共通した特長を示すもので、後出の型式と考えられる長原式土器と共 に稲作導入期の動向を知るうえで重要な鍵を握る土器と言えよう。

弥生時代になると稲作の導入に伴って遺跡の立地にも変化が認められ、平野部の低湿地帯に も集落が営まれ始めるようになる。前期の遺跡は平野部に鬼虎川遺跡・山賀遺跡・美園遺跡・ 亀井遺跡・田井中遺跡、山麓部に鬼塚遺跡・恩智遺跡、羽曳野丘陵北端から河内低平地にかけ ては瓜破遺跡・瓜破北遺跡・長原遺跡・八尾南遺跡・船橋遺跡・国府遺跡がある。中期になる と、新たに平野部に瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・東郷遺跡・木の本遺跡・東弓削 註24 註25 註26 註27 遺跡・弓削遺跡・久宝寺遺跡・加美遺跡・本郷遺跡・川北遺跡、山麓部に山畑遺跡・善根寺遺 註31 註32 註33 註35 註34 跡・西ノ辻遺跡・縄手遺跡・水越遺跡、上町台地部に桑津遺跡・山之内遺跡が出現している。 註36 註37 この時期平野部の遺跡は、河内潟・湖の陸地化に伴なって集落規模が一段と拡大している。こ れらの集落が大型化する背景としては、前期から培われてきた個別の農業共同体が、核となる 集落に統括されることにより労働力の集中を可能にし、その結果として基礎的生産力を増大さ せたことが一番の成因であったものと考えられる。したがって、瓜生堂遺跡・加美遺跡で検出 されたこの時期の大型弥生墳丘墓も、これらの農耕社会を基盤として成立した地縁的階級社会 の結合体の長を中心とした人々を埋葬した墓として捉えることができる。しかし、後期になる と平野部で新たに成法寺遺跡、小阪合遺跡・中田遺跡・北鳥池遺跡が出現する程度で、既存集 註40 註41 註42 落は規模を縮小する傾向が顕著である。一方、生駒西麓では、岩滝山遺跡・高尾山遺跡・平野 山遺跡などの高地性集落が成立している。

続く古墳時代前期(庄内式期・布留式期)の集落位置は、基本的には前代と同様であったと 考えられる。この時期の集落は、西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・萱振 B遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・八尾南遺跡・瓜破北遺跡・久宝寺遺跡・

亀井遺跡・加美遺跡がある。これらの遺跡は、特に圧内式期末から布留式期にかけて盛行する ことが指摘でき、集落内における積極的な開発の動向は、来るべき古墳浩営前夜の社会情勢を 暗示している。前期古墳としては、牛駒西麓に西ノ山古墳・花岡山古墳、玉手山丘陵に玉手山 古墳、松岳山丘陵に松岳山古墳がある他、平野部では塚ノ本古墳・美園古墳・萱振1号墳が存 在している。古墳時代中期になると平野部は大規模な洪水にあうこともなく比較的安定した環 境であったようで、集落位置も前代に符合した傾向である。平野南部に位置する長原遺跡では、 この時期に大規模な古墳群が存在する他、亀井遺跡・友井東遺跡・巨摩遺跡・八尾南遺跡でも 古墳が造営されている。周辺では、生駒西麓に心合寺山古墳が築造されている他、羽曳野丘陵 では古市古墳群の造営が開始される。しかし、古墳時代後期前半になると長原古墳群では古墳 の造営を停止しており、平野部ではこれ以降山賀遺跡・萱振B遺跡で中葉に比定される古墳が 確認されている程度である。生駒西麓部では、後期初頭に東高野街道ぞいに鏡塚古墳・郡川西 塚古墳・郡川東塚古墳が、中葉には愛宕塚古墳が築造されている。さらにこの時期生駒西麓の 山麓部では、横穴式石室を主体部とする古墳が増加する傾向で、特に平野部での古墳築造が減 少する前葉末から後葉にかけては爆発的に造墓が進んだようで山畑古墳群・高安古墳群・平尾 山古墳群・平野大県古墳群・生津横尾古墳群・太平寺古墳群・安堂古墳群・高井田横穴群・青 谷古墳群・本堂古墳群・雁多尾畑古墳群が成立している。この時期の平野部の遺跡は、生駒西 麓部における古墳増加の現象とは反比例して減少する傾向があったようで、特に中葉以降は集 落が激減しており、移動を余儀なくされた大きな政治的変動を考えざるを得ない。7世紀に入 ると古墳造営は平尾山古墳群・高安古墳群の一部で継続することが認められる以外は、高安山 古墳群やイノムラキ古墳に代表されるように、立地や主体部の形状変化等の多様な様相を呈す る終末期古墳の出現を見る。古墳の造営も終焉を迎えると古墳造営に奔走した氏族は、新たに 寺院建立に力を注ぐようになる。八尾市域では渋川廃寺・西郡廃寺・龍華寺・弓削寺・心合寺 廃寺・高麗寺・五条宮廃寺が建立造営され、柏原市域では一早く船橋廃寺が建立されるほか、 生駒西麓の扇状台地には南北に連なって「河内六大寺」と称される知識寺・山下寺・大里寺・ 三宅寺・家原寺・鳥坂寺、大和川の南には原山廃寺・片山廃寺・五十村廃寺・田辺廃寺・円明 廃寺・河内国分寺・国分尼寺が建立されている。これらの寺院のほか、奈良時代の後期には八 尾市八尾木付近に由義宮が設置されるなど、政治的にも重要な役割を果たした地域として認識 されている。

飛鳥・奈良時代の集落は、太子堂遺跡・久宝寺遺跡・弓削遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・成 註49 法寺遺跡・萱振 A遺跡・長原遺跡・船橋遺跡で検出されている。平安時代に入ると平野部の地 形は現在に近い景観を呈していたようである。当遺跡周辺では、特に中期以降の開発がさかん であったようで、条里区画に合致した集落が長原遺跡・木の本遺跡で確認されている。平安時 代後期から鎌倉時代にかけて、当遺跡付近は石清水八幡宮が管理する志紀庄園の一部であったようである。この時期に当遺跡で新たに集落が開発されるほか、八尾南遺跡・木の本遺跡・津堂遺跡で集落が営まれている。しかし、鎌倉時代後期以降は当遺跡付近では、顕著な遺構が検出されておらず、固定化する近世集落に重複した形で推移した可能性が考えられよう。江戸時代中期の宝永元年(1704)にはこの地域の一大画期である大和川の付け替えがあり、これ以降綿花の栽培が活発に実施され「河内木綿」が生みだされている。

- 註1 梶山彦太郎・市原実 「大阪平野の発達史-C14年代データからみた」『地質学論集』 7 1972
- 註2 (財)大阪市文化財協会 『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』一大阪市高速電気軌道第2号線延長工事 に伴う発掘調査報告書— 1982
- 註3 (財)大阪市文化財協会 『瓜破遺跡』-大阪市土木局施工の大阪市平野区瓜破6丁目側道舗装 新設工事に伴う遺跡発掘調査報告書- 1983
- 註4 八尾南遺跡調査会 『八尾南遺跡』-大阪市高速電気軌道第2号線建設事業に伴う発掘調査報告 書- 1981
- 註 5 浜田耕作 「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第 2 冊 1918
- 註 6 大阪府教育委員会 『昭和60年度はさみ山遺跡発掘調査概要』 羽曳野丘陵北縁上遺跡群の調査 1986.3
- 註7 大阪市立博物館・(財) 大阪市文化財協会 「桑津遺跡」『私たちの考古学発掘された大阪』: 財団法人大阪市文化財協会設立5周年記念 1984
- 註8 下村晴文 「神並遺跡出土の押型文土器」『紀要 I』(財)東大阪市文化財協会 1985
- 註 9 柏原市教育委員会 『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1982年度』:柏原市文化財報告1982-II
- 註10 瓜生堂遺跡調査会 『恩智遺跡 I・Ⅱ・Ⅲ』1980・1981
- 註11 東大阪市教育委員会 『馬場川遺跡調査概報Ⅲ』1975
- 註12 縄手遺跡調査会 『縄手遺跡 I』1971
- 註13 東大阪市教育委員会 『文化財要覧Ⅱ』1973
- 註14 東大阪市教育委員会 『日下遺跡発掘調査概要-第11・12次調査-』1985
- 註15 大阪府立花園高等学校地歴部 「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』1970
- 註16 大阪府教育委員会 『国府遺跡発掘調査概要・Ⅷ』—藤井寺市国府、惣社、林、沢田、道明寺所在 1973
- 註17 平安学園考古クラブ 『船橋 Ⅰ・Ⅱ』1958・1962
- 註18 (財)大阪市文化財協会 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』— (仮称)大阪市立第8養 護学校建設に伴う発掘調査報告書— 1983
- 註19 大阪市文化財協会 『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3』 一遺物編 1984
- 註20 (財)大阪文化財センター 『山賀 (その3)』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化 財発掘調査概要報告書 1984
- 註21 (財)大阪文化財センター 『美園』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 概要報告書 1985
- 註22 (財)大阪文化財センター 『亀井』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 概要報告書 1983
- 註23 八尾市教育委員会『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』1983
- 註24 (財) 大阪文化財センター 『瓜生堂』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調

- 査概要報告書 19
- 註25 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理〜吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1981
- 註26 (財)大阪文化財センター 『若江北』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調 査概要報告書 1983
- 註27 八尾市文化財調査研究会 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980-1981年度』:(財)八尾市文 化財調査研究報告2 1983
- 註28 前掲註27
- 註29 八尾市教育委員会 『東弓削遺跡』1976
- 註30 (財)八尾市文化財調査研究会 「弓削遺跡(第1次調査)」『昭和59年度事業概要報告』:(財) 八尾市文化財調査研究会報告7 1985
- 註31 大阪府教育委員会 「久宝寺遺跡南地区(その2)における発掘調査成果」『大阪府下埋蔵文化 財担当者研究会(第12回)資料』1985
- 註32 古代を考える会 「加美遺跡の検討」『古代を考える43』1986
- 註33 1980年11月~1981年1月にかけて大阪府教育委員会が発掘調査を実施した。
- 註34 大阪府教育委員会 『川北遺跡発掘調査概要·I』1982
- 註35 藤井直正・都出比呂志 『原始・古代の枚岡』東大阪考古学研究会 1967
- 註36 前掲註35
- 註37 小林行雄 「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡 I 地点の土器」「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡 E・ F・D・H 地点の土器」『弥生土器集成』 本編 2 1958
- 註38 (財)八尾市文化財調査研究会 「水越遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和56・57年度』:(財)八尾市文化財調査研究会報告3 1983
- 註39 大阪市教育委員会・(財) 大阪市文化財協会 『大阪市立大学河海工学出水理実験場建替えに伴
- う 山之内遺跡発掘調査現地説明会資料』1986
- 註40 (財)八尾市文化財調査研究会 『成法寺遺跡』1983
- 註41 (財) 八尾市文化財調査研究会 「小阪合遺跡 (第3次調査)」『昭和58年度事業概要報告』: (財) 八尾市文化財調査研究会報告 5 1984
- 註42 八尾市教育委員会 『中田遺跡』1975
- 註43 大阪府立花園高等学校地歴部 『河内古代遺跡の研究』1970
- 註44 萩田昭次・北野保 『東大阪市岩滝山遺跡の調査』大阪府農林部 1971
- 註45 藤野勝彌 「河内鷹ノ巣山遺跡」『考古学』第11巻 第3号 1940
- 註46 瀬川芳則 「第二章第三節5(6)山腹・山上の遺跡」『大阪府史』第一巻 1978
- 註47 大阪府文化財センター 『友井東(その1)』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査概要報告書 1984
- 註48 広瀬雅信 「萱振遺跡調査速報」『八尾市文化財紀要 I』八尾市教育委員会 1984
- 註49 (財)八尾市文化財調査研究会「太子堂遺跡」『昭和58年度事業概要報告』:(財)八尾市文化 財調査研究会報告5 1984

第3章 調查概要

第1節 調査方法と経過

3 基の鉄塔構築予定地に合わせて 3 箇所の調査区を設定し、南から第 1 調査区 (5号鉄塔-14.3×17.8m)・第 2 調査区 (4号鉄塔-11.4×14.4m)・第 3 調査区 (2号鉄塔-9.44×12.4m)と付称し、順次調査を進めた。掘削に際してはいわゆるオープンカット工法で行い、八尾市教育委員会の指示に基づき、現地表下1.1~1.2m(標高10.1m)前後に存在する平安時代末期~鎌倉時代の遺物包含層上面までの各層を機械掘削によって除去し、以下の厚さ0.15~0.3mを測る遺物包含層は人力によって慎重に掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、各調査区で、平安時代末期~鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。なお、内業整理および報告書作成業務は現地調査終了後に着手し、昭和62年 3月31日をもって完了した。

調査地の地区割については、既設の60号鉄塔脚の南東角を基準点とし、その点から磁北に則して南へ90m・北へ50m延長させて南北の基準線とした。東西については、基準点から東西に60mずつ延長させ、調査対象地全域を覆う東西120m・南北140mの範囲を大地区として捉えた。さらに、この大地区の中を10m四方の小地区に区画した。各地区を区画する10mごとのラインは、東西は北端を起点として数字(1~14)で表わし、南北は西端を起点としてアルファベット(A~L)で表わした。各地区の表示については、一区画の南東隅で交差する2線を用い、A1~L14地区とした。第1調査区はC9・C10・D8・D9・D10・E8・E9・E10地区に、第2調査区はE8・F7・F8・F9・G7・G8地区に、第3調査区はK1・K2・K3・L1・L2・L3地区にあたる。

第2節 基本層序

各調査区内の土層堆積はほぼ一定しており、その中から各調査区で普遍的に認められた7層 を選び、基本層序とした。

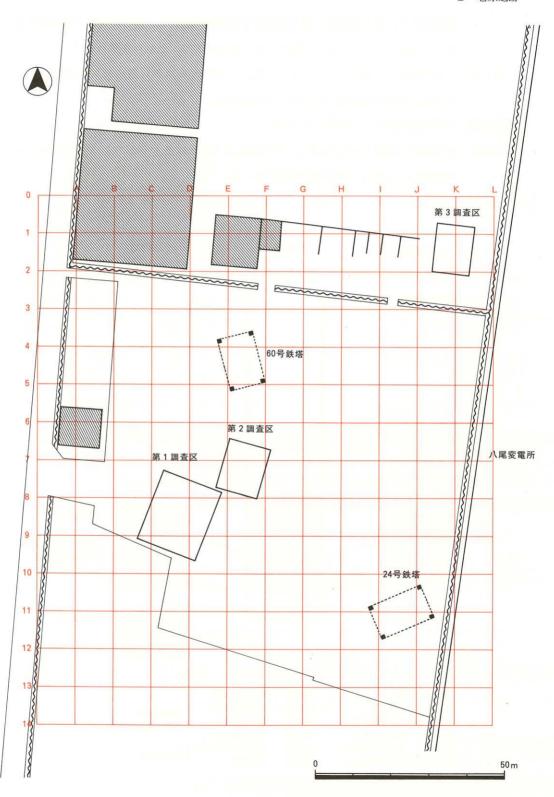
第0層:盛土 層厚0.6~0.9m 現地表面の標高は11.2~11.3mを測る。

第 I 層: 旧耕土 層厚0.15~0.2 m

第Ⅱ層:緑灰色~茶褐色砂質土 層厚0.1~0.5 m 第1調査区南西部では茶灰色、第1調査区北東部および第2調査区では緑灰色、第3調査区では上部が淡茶褐色・下部が茶褐色を呈する。

第Ⅲ層:緑褐色粘質土 層厚0~0.2m 第3調査区南西部のみで確認した土層である。

第Ⅳ層:淡褐色粘質土・淡灰色砂質土 層厚0~0.4m 平安時代末期~鎌倉時代の遺物包



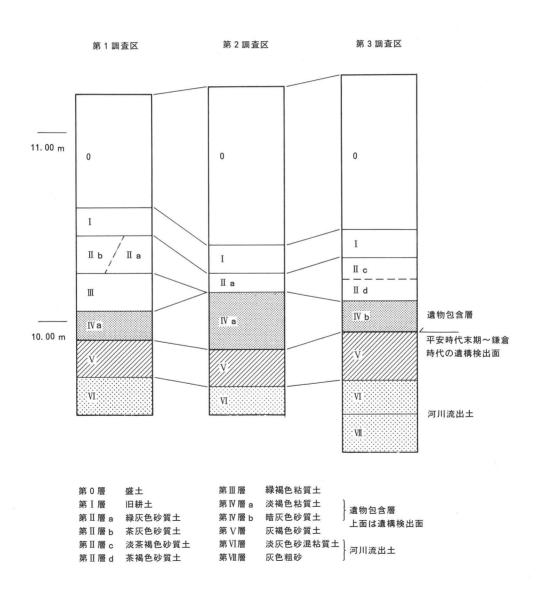
第2図 調査区設定図および地区割図

含層である。第1調査区・第2調査区では淡褐色粘質土、第3調査区では淡灰色砂質土が堆積している。第1調査区・第3調査区では、とぎれる部分が認められる。

第 V層: 灰褐色砂質土 層厚0.2~0.3 m 上面が平安時代末期から鎌倉時代の遺構検出面である。上面の標高は、9.5~10.0 mを測る。

第 VI 層:淡灰色砂混粘土 層厚0.3~0.4 m

第四層:灰色粗砂 層厚0~0.3 m以上 河川流出土で湧水は多大である。第3調査区のみで確認した土層で、井戸の湧水層にあたる。



第3図 基本層序模式図

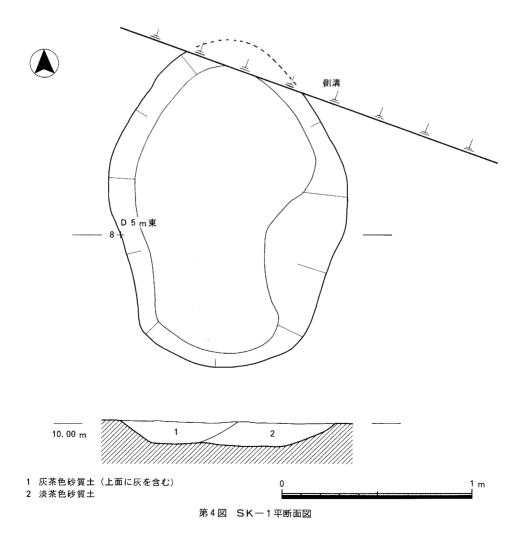
第3節 検出遺構・出土遺物

第1調査区では、近代から現代に至る井戸・撹乱等によって遺構面の削平されている部分があったが、第V層灰褐色砂質土上面で、平安時代末期の土坑1基を検出することができた。当調査地の遺構検出面は現地表下1.2m・標高10.0m前後である。

第2調査区でも、現地表下1.3 m・標高9.8~10.0 mに存在する第V層灰褐色砂質土上面で、 鎌倉時代の井戸1基の他に南北に平行して伸びる5条の溝を検出した。

さらに第3調査区でも、現地表下1.3 m・標高9.8~10.0 mに存在する第V層灰褐色砂質土 上面で、鎌倉時代の井戸2基・土坑6基・小穴5個が検出され、それに伴って多量の遺物が出 土している。

以下、各調査区ごとに、検出遺構および出土遺物についての概要を記す。なお、出土遺物の 法量・形態・調整等の詳細については、第4節出土遺物観察表を参照されたい。



— 165 —

・第1調査区

調査対象地の南西部に位置する調査区で、東西14.3 m・南北17.8 mの規模を測る。調査面積は254.54 ㎡、調査期間は昭和60年8月19日から8月28日までである。当調査区では前述のように遺構面の削平されている部分があったが、第V層灰褐色砂質土上面で、平安時代末期の土坑1基(SK-1)を検出した。

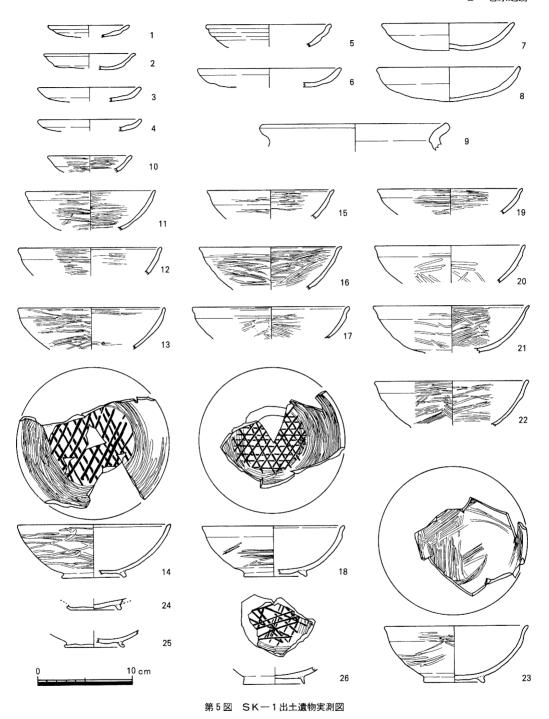
土坑

SK-1

調査区北東隅近くで検出した土坑で、上面の形状は南北に長い楕円形を呈し、検出部の長径 1.62 m・短径1.25 mを測る。土坑の北端は調査区外へ至るが、調査区北壁ではその掘形を確認していないことから、側溝付近が北端であると考えられる。断面の形状は浅い皿形を呈し、深さ0.13 mを測り、坑底は平坦である。内部には、灰茶色砂質土と淡茶色砂質土が堆積している。このうち、灰茶色砂質土の上面には灰が含まれており、この層の内部から12世紀初頭に比定される瓦器椀・小皿、土師器小皿・中皿・羽釜等が比較的まとまって出土している。

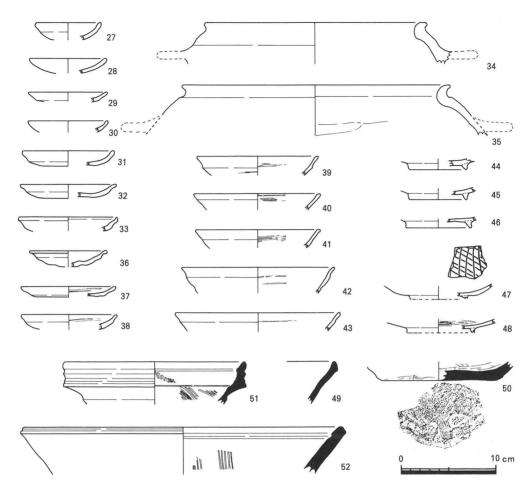
出土遺物の内訳は、土師器小皿19・土師器中皿 5・土師器羽釜 2・瓦器椀33・瓦器小皿 1 である。そのうち図示したものは、第 5 図 1 \sim 26 \circ 26 \circ 26 \circ 27 \circ 30 \circ 30 \circ 40 \circ 40 \circ 50 \circ 50 \circ 50 \circ 60 \circ 60

土師器小皿には、口縁部を2段ョコナデして端部をつまみ出すもの(1・2)と、浅めの器 形で口縁端部を丸くおさめるもの(3・4)の2種がある。このうち(2)にのみ燈心油痕が 認められる。土師器中皿には、小皿同様2段ヨコナデによって口縁端部をつまみ出すもの(5)、 浅めで端部を丸くおさめるもの(6)、深みがあり直線的な口縁部の(7・8)がある。このう ち(7・8)の両面には煤が付着しており、器表面の損傷が著しい。土師器羽釜(9)は比較 的小型で、口縁部は体部から「く」の字形に屈曲するもので、12世紀代におさまるものである。 瓦器小皿は(10) 1点のみが出土した。内外の口縁部には、比較的密なヘラミガキが施され ている。瓦器椀(11~26)は、概ね丸みのある深い体部を持つ。口縁部の形態には、体部から 器肉を減じて尖りぎみに終るもの(11・12)、体部から丸いカーブで連続するもの(13・14)、 体部との境に稜を持ってわずかに外反するもの(15~23)がある。高台には、断面逆台形のも の(14・18・24・25)と逆三角形のもの(23・26)があるが、(26)を除いて比較的重厚でしっ かりした作りで、丁寧なョコナデで仕上げられている。遺存状態の良好なものを観察する限り では、外面のヘラミガキはやや乱雑に施されてはいるものの、何方向かに分割されて施されて いる部分が認められる。内面体部のヘラミガキは、一様に密なものを横方向あるいは円弧状に 施している。見込みのヘラミガキには、格子状のもの(14)、格子の上に平行線あるいはジグ ザグ線を重ねるもの(18・26)、乱方向ではあるが、体部のヘラミガキとは分化して施すもの (23) がある。



包含層出土遺物

出土遺物の内訳は、土師器小皿21・土師器中皿5・土師器羽釜20・須恵器鉢4・瓦器椀73・ 瓦器小皿9・瓦質土器羽釜2・備前焼すり鉢1・丹波焼すり鉢1であるが、いずれも小破片で 良好な遺存状態を示すものは少い。そのうち図示したものは、第6図27~52の26点である。

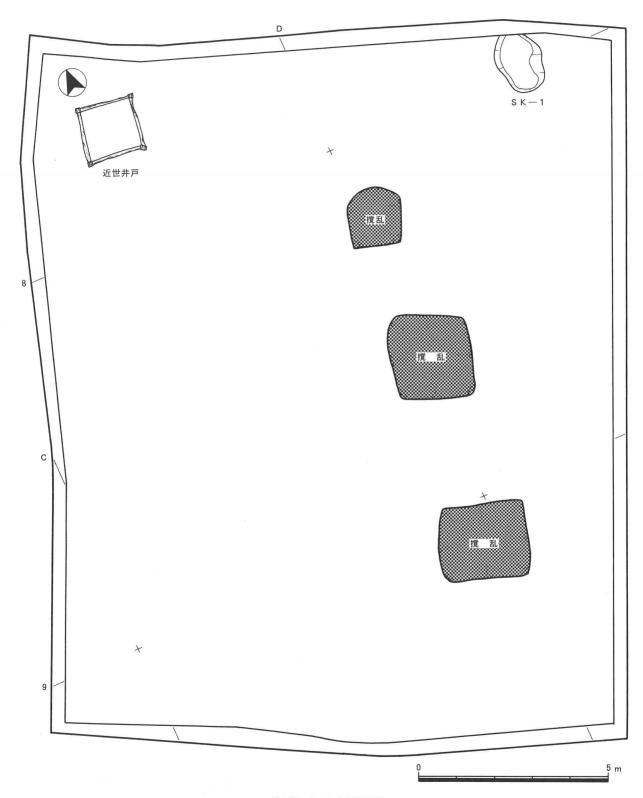


第6回 第1調査区包含層出土遺物実測図

土師器小皿には、半球形を呈するもの(27・28)と浅い器形のもの(29~33)がある。口縁端部は丸く終る(27・28・31)、尖って終る(29)、外へつまみ出される(32)、面を持つ(33)がある。土師器羽釜(34・35)の口縁部は、体部から丸く屈曲して直立ぎみとなる。

瓦器小皿にはやや深い(36)と浅めの(37・38)がある。(36)は外面に指おさえの窪みを残し、ヘラミガキはまったく認められない。(37・38)の肉面にはヘラミガキがわずかに認められる。瓦器椀(39~48)は外面にヘラミガキが施されないもので、内面のヘラミガキは粗い。高台は断面逆三角形で垂直に付き、やや重厚なもの(44~46)と低平なもの(47・48)がある。見込みのヘラミガキは(47)が斜格子、(48)は体部から続く乱方向である。

その他に、須恵器ねり鉢(49・50)、備前焼すり鉢(51)、丹波焼すり鉢(52)がある。須恵器ねり鉢(49)の口縁部にはいわゆる重ね焼痕があり、(50)の底部には回転糸切り痕が認められる。備前焼すり鉢(51)のすり目は著しく傾いており、丹波焼すり鉢(52)とともに、16世紀代に含まれるものであろう。



第7図 第1調査区平面図

• 第 2 調 香区

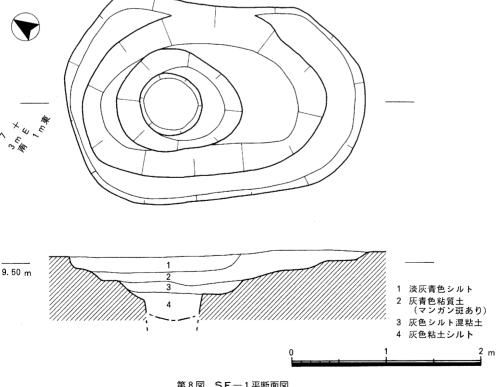
第1調査区の北東に隣接する調査区で、東西11.5m・南北14.5mの規模を測る。調査面積は 166.75 m、調査期間は昭和60年8月26日から9月3日までである。調査の結果、第V層灰褐色 砂質+上面で、鎌倉時代の井戸1基(SE-1)、溝5条(SD-1~SD-5)を検出した。

井戸

SE-1

調査区南西部で検出した。掘形上面の形状は、北西一南東に長い楕円形を呈し、長径3.2 m・ 短径2.1mの規模を測る。断面の形状はすり鉢形を呈し、複数の段を有する。南東部の肩は、 北西部に比してなだらかに下っている。井戸側は掘形の北西寄りに置かれていたものと考えら れるが、井戸側の規模・構造等は不明である。内部には、上方から、淡灰青色シルト・灰青色 粘質土・灰色シルト混粘土・灰色シルトが堆積するが、湧水が著しく、検出面より0.7m程度 で掘削を中止した。

出土遺物の内訳は、土師器皿7・土師器羽釜2・瓦器椀12・瓦質土器すり鉢1と少量で、遺 存状態も良くない。そのうち図示したものは、第9図53~55の3点である。瓦器椀(53~55) は13世紀代のもので、ヘラミガキは外面には施されず、内面にのみ数条認められる程度である。



第8図 SE-1平断面図

溝

SD-1

調査区東端を南北に伸びる溝で、幅0.2~0.5 m・深さ0.05~0.1 mを測る。内部堆積土は 灰褐色~灰緑褐色粘質土で、上面に黄灰色シルトが部分的に堆積する。内部からは、瓦器椀 (57) の他、土師器・須恵器の小破片が各1点ずつ出土している。

SD-2

SD-1の西側を1.0 m前後の間隔で平行して伸びる。規模・内部堆積土はSD-1同様である。内部からは、瓦器椀(56)の他、土師器の小破片が2点出土している。

SD-3

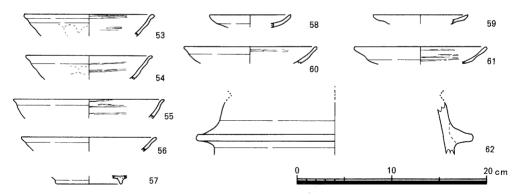
SD-2の西側を $0.8\sim1.3$ mの間隔で平行して伸びる。規模・内部堆積土はSD-1・SD-2同様である。

SD-4

SD-3の西側を1.3m前後の間隔で平行して伸びる。規模・内部堆積土は $SD-1\sim SD-3$ と同様であるが、北端から10m付近で西へ屈曲し、幅 $0.4\sim0.6$ mに広がる。

SD-5

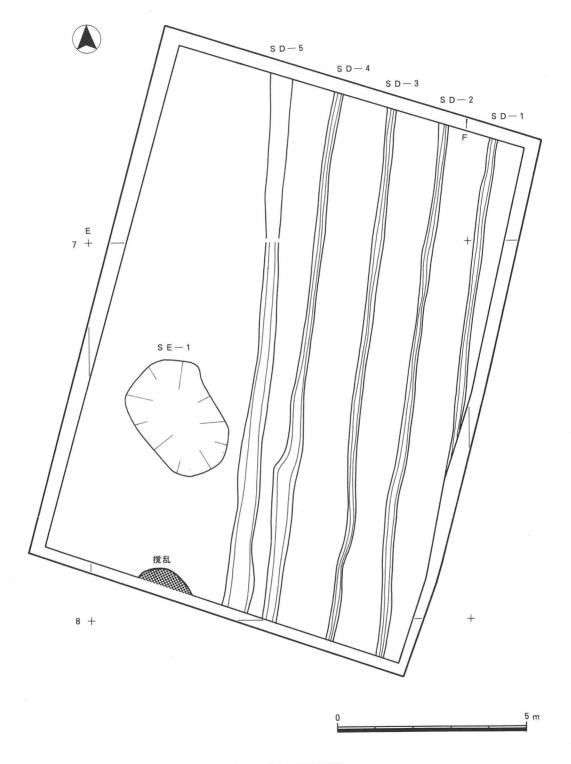
SD-4 の西側を $0.3\sim0.9$ mの間隔で平行して伸びる。幅 $0.4\sim0.8$ m・深さ $0.4\sim0.6$ mを測る。内部堆積土は青灰色砂混粘土で、溝底には砂粒を多く含む。内部からは、土師器・瓦器・瓦質土器の小破片がわずかに出土している。



第9図 SE-1 (53~55)・SD-1 (57)・SD-2 (56)・第2調査区包含層 (58~62) 出土遺物実測図

包含層出土遺物

出土遺物の内訳は、土師器皿 6・土師器羽釜 5・瓦器椀 6・瓦質土器ねり鉢 1 とごく少量である。そのうち図示したものは、第 9 図58~62の 5 点で、いずれも磨耗をうけた小破片である。瓦器椀(60・61)は、ともに外面のヘラミガキは認められず、内面にのみ横方向あるいは渦巻状に粗雑なものが施されている。



第10図 第2調査区平面図

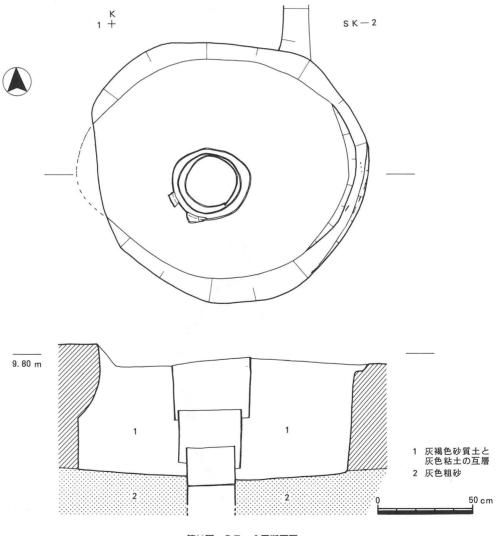
• 第 3 調査区

調査対象地の北東隅に位置する調査区で、東西9.5 m・南北12.5 mの規模を測る。調査面積は118.75 ㎡、調査期間は昭和60年8月29日から9月10日までである。調査の結果、第V層灰褐色砂質土上面で、鎌倉時代の井戸2基(SE-1・SE-2)、土坑6基(SK-2~SK-7)、小穴5個(SP-1~SP-5)を検出した。

井戸

SE-2

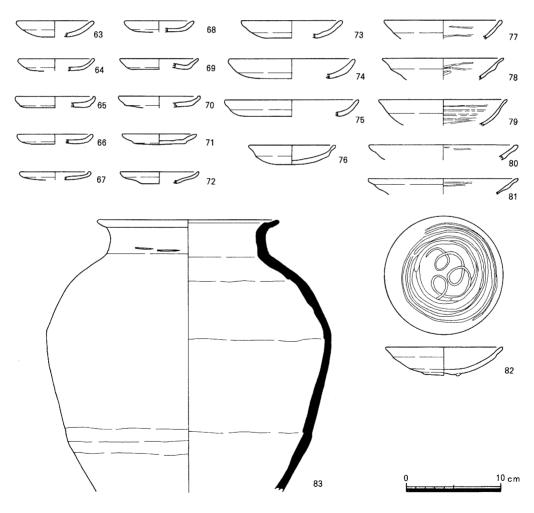
調査区北部中央で検出した。土坑SK-2の西端を削平して構築されている。掘形上面の形状は円形を呈し、径1.4m前後を測る。肩は直線的に下り、深さ0.6mで湧水層である灰色粗



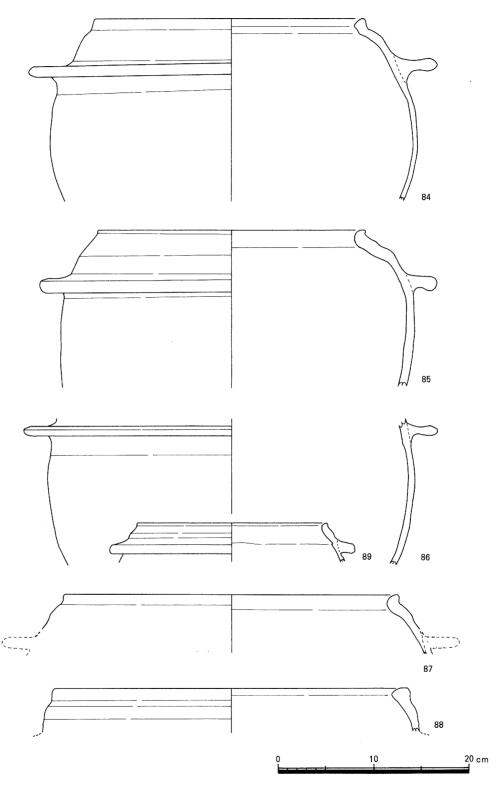
第11図 SE一2平断面図

砂に達する。掘形の中央部には、曲物を使用した井戸側が位置している。曲物は径0.25~0.4 m・高さ0.3 m前後を測るもので、径の小さいものから順に4段積み上げられている。掘形と井戸側の間は、灰褐色砂質土と灰色粘土の互層で充填されている。なお、井戸検出時には、曲物の上部に伏せた形態の土師器羽釜(84)の破片があったことや、井戸内部からも全周する土師器羽釜(85)や口縁部を打ち欠いた土師器羽釜(86)が出土していることから、曲物のさらに上に羽釜を何段が積み上げて上部施設としていたものと考えられる。井戸内部には、上方から暗灰色~褐色粘土(0.3 m)・灰色砂混粘質土(0.3 m)の2層が堆積しており、ここから13世紀以降の土器類が比較的まとまった状態で出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿27・土師器中皿10・土師器羽釜 7 ・瓦器椀22・瓦器小皿 1 ・ 瓦質土器 2 ・陶器壷 1 である。そのうち図示したものは、第12・13図63~89の27点である。



第12図 SE-2出土遺物実測図1



第13図 SE一2出土遺物実測図2

土師器小皿 (63~72) のうち (63) のみ深めで丸みのある器形であるが、他はすべて浅く底部が広い平坦面を持つ。なかでも (67) は粘土円板の端をわずかに巻き込んで口縁部とするもので、器高0.85cmときわめて浅い。(70) とともに外面底部にはヘラケズリの痕跡を残す。また、(71・72) は、強いヨコナデによって底部と口縁部の境に顕著な段を持つ。(64) の内面には煤が付着していることから、燈明皿として使用されていたものと推定される。土師器中皿 (73~75) はすべて小破片である。いずれも浅い器形で、(75) の底部は広い平坦面となるようである。

瓦器小皿(76)は丸みのある底部から稜を持って外反する口縁部に至るもので、内面には渦巻状のヘラミガキが認められる。瓦器椀(77~82)は外面にヘラミガキが施されなくなる段階のものである。(82)は退化した粘土紐状の高台・見込みに施された連結輪状のヘラミガキ等の特徴から14世紀代に下り得る資料と考えられ、(77~82)より新しい要素を持つ。

常滑焼の壷と考えられる(83)はわずかに内傾する頸部から上外方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至るもので、11世紀代の常滑焼壷の特徴を備えている。

土師器羽釜 (84~88) のうち、(84) は前述のように最上段の曲物のさらに上部に倒立していたもので、井戸の上部施設として使用されていたものである。(85・86) も (84) とともに全周していることから上部施設に用いられたものと考えられるが、井戸内部に落ち込んだ状態で検出したため、明確ではない。すべて鍔以下に煤が付着している。(87・88) は小破片のため、井戸使用時に落ち込んだものであろう。これらの口縁部は体部から短く立ち上がり、玉縁状を呈するもので、13世紀代の所産である。

瓦質土器羽釜(89) は短く厚い鍔が下がりぎみに付くもので、口縁端部から鍔上面にかけて 3 段のョコナデで仕上げられている。

SE-3

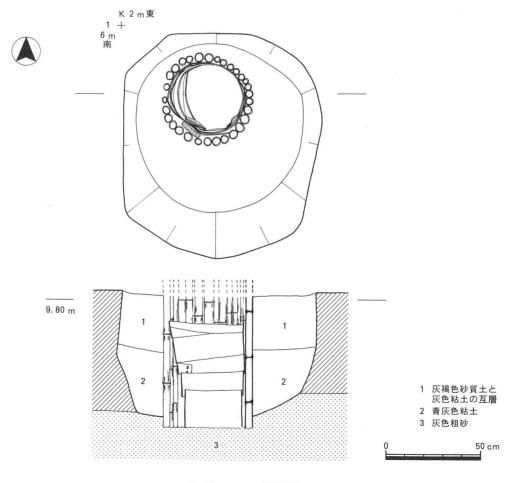
調査区東部中央で検出した。掘形上面の形状は楕円形を呈し、東西1.0 m、南北1.2 mを測る。断面の形状は逆台形を呈し、深さ0.65 mで湧水層である灰色粗砂に達する。井戸側は曲物を使用しており、掘形北部中央に位置している。曲物は径0.12~0.25 m・高さ0.13~0.25 mを測るもので、径の小さいものから順に3段積み上げている。最上段の曲物は、検出面より0.15 m程度低いため、さらに上方にも曲物・羽釜等を積み上げていた可能性がある。掘形と井戸側の間は、上半は灰褐色砂質土と灰色粘土の互層、下半は青灰色粘土で充塡されている。一方、井戸内部には、上方から灰色粘土(0.3 m)・灰色シルト(0.1~0.15 m)の2層が堆積しており、井戸底には川原石が敷きつめられ、水の浄化を捉している。

この井戸側に使用されている曲物は破損が著しく、補修のあとが認められる。南西部では曲物の底板を割った板材(最大幅 $12 \text{ cm} \cdot \text{厚}$ さ $1 \text{ cm} \cdot \text{長}$ さ25 cm)を、1 段めと 2 段めの曲物の隙間

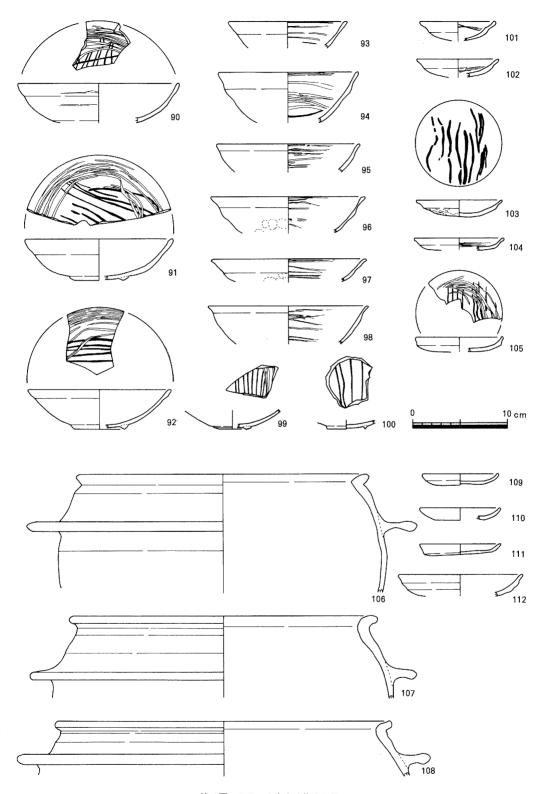
に内側から差し込んでいる。同位置の曲物の外側にも、枘穴のある板材(幅 $12\,\mathrm{cm}$ ・厚さ $3\,\mathrm{cm}$ ・長さ $60\,\mathrm{cm}$)を井戸底に達するまで押し込んで、曲物のゆるみを抑えている。さらに破損が進んだためか、曲物の周囲には竹(径 $3\sim5\,\mathrm{cm}$ ・長さ $70\,\mathrm{cm}$)を隙間なく井戸底にまで打ち込んで、より強固な補修を行っている。この曲物の外側を一周する竹の輪郭は、井戸掘形検出時にすでに認められていたことから、かなり上方から打ち込まれていたものと推定される。

出土遺物の内訳は、土師器小皿12・土師器中皿4・土師器羽釜14・瓦器椀55・瓦器小皿7である。そのうち図示したものは、第15図90~112の23点である。

瓦器椀 ($90\sim100$) は外面に指おさえの窪みをわずかに残し、軽いナデによる調整で仕上げている。(90) にのみ外面のヘラミガキがわずかに認められる。内面のヘラミガキは ($90\sim92$ ・94) が比較的密、他はやや粗略化されている。見込みのヘラミガキは、(90) が斜格子状に施されている可能性があるが、($91\cdot92\cdot94\cdot99\cdot100$) は平行線状に施されている。高台はすべて粗略なつくりで低く、とくに (100) はきわめて低平である。瓦器小皿 ($101\sim105$) には、



第14図 SE-3平断面図



第15図 SE一3出土遺物実測図

底部がやや深く丸みをもつもの(101~103)と、底部が広い平坦面で浅い器形を呈するもの(104・105)がある。いずれも瓦器椀同様外面にヘラミガキは認められず、ナデによる調整で仕上げられているが、(103)のみ外面底部に指おさえの圧痕を顕著に残す。内面のヘラミガキは、体部から口縁部にかけて円弧状に施すもの(101・102)、全体に粗雑な平行線状に施すもの(103)、口縁部にのみ密な横方向に施するもの(104)、口縁部にやや粗雑な横方向・見込みに平行線状に施するもの(105)があり、変化に富んでいる。

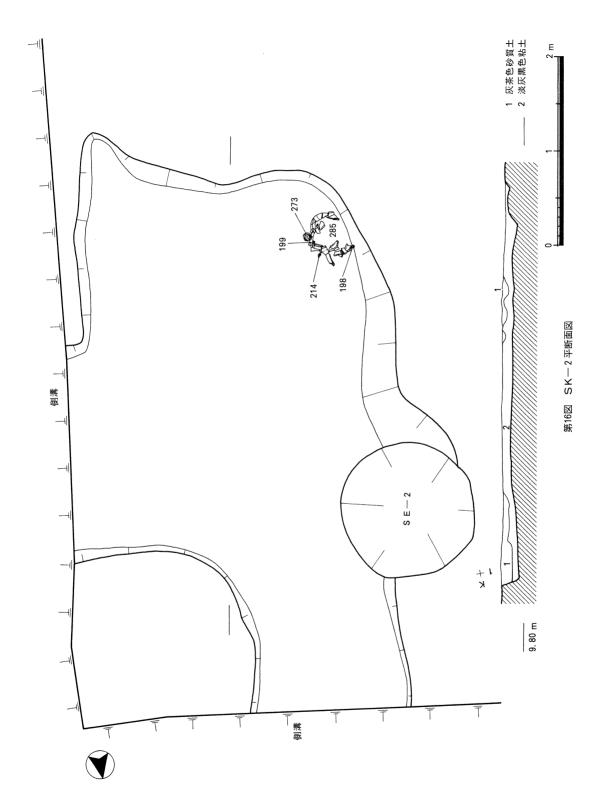
土師器羽釜(106~108)は内傾する頸部から「く」の字形に屈曲する短い口縁部に至るもので、図示していない口縁部のみの小破片もすべてこの形態である。(106)は鍔以下に煤付着、(107)は鍔以下および内面全体に煤・炭化物が厚く付着しているが、(108)には煤の付着は認められない。土師器小皿(109~111)はいずれも浅い器形を呈するが、(109・110)は底部から丸く立ち上がり、(111)は平坦な底部から直線的に立ち上がって口縁部に至る。(109)のみに燈心油痕が認められる。土師器中皿(112)は小型でやや深みのある器形を呈するもので、口縁部はゆるい2段ョコナデによって仕上げられており、端部は器肉を減じて尖りぎみに終る。

土坑

SK-2

調査区北東部で検出した。北部・東部は調査区外に至るために全容は不明であるが、検出部で東西3.6 m・南北5.5 mの範囲に広がる不定形の土坑である。北西部には、井戸SE-2がSK-2を切って構築されている。また、北東隅には径約2 m程度で弧状に廻る粗砂の堆積が認められたが、SK-2 との関係等の詳細は不明である。SK-2 の深さは0.1~0.2 m と浅く、坑底はほぼ平坦である。内部にはおもに淡灰黒色粘土が堆積するが、灰茶色砂質土が部分的に上層に堆積しており、前者から12世紀後半~13世紀に至る種々の遺物が多量に出土している。なお、SK-2 の南西隅では、正立した状態の土師器羽釜(285)を主として、瓦器椀(198・199・214)と瓦器小皿(273)からなる土器集積が検出されたことから、SK-2 を厨房遺構とも考えられようが、竃や炭・灰の堆積を検出していないため、遺構の性格は判然としない。出土遺物の内訳は、土師器小皿206・土師器中皿69・土師器羽釜33・瓦器椀305・瓦器小皿27・須恵器甕2・須恵器小型坏1・瓦質土器羽釜21・瓦質土器甕1・白磁碗1・陶器器種不明1である。このうち図示したものは、第17~21図113~288の176点である。

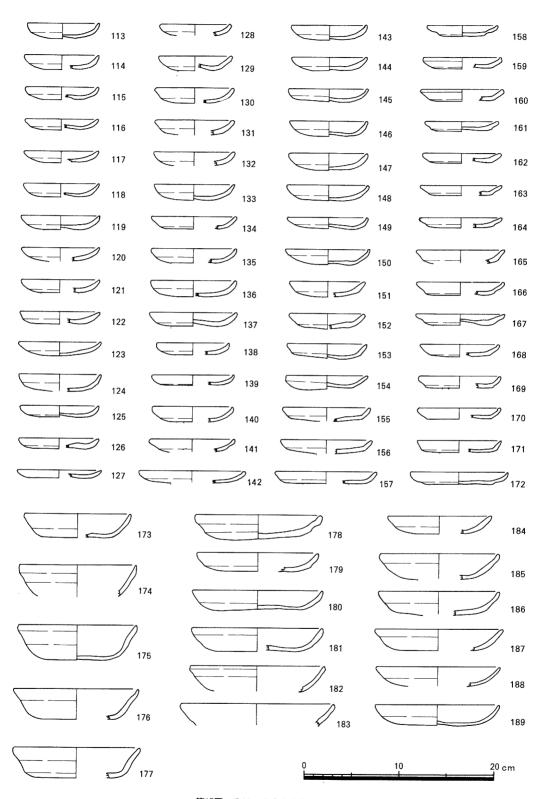
土師器小皿(113~172)には、概ね以下の3種類の形態がある。(113~150)の形態は、底部から丸く屈曲して口縁部に至るもので、最も多くの量を占める。これらの中には、やや深いもの(113·124·132·135·136)や、きわめて浅いもの(116·117·126·127·139)などがある。口縁端部の形態には、器肉を減じて尖りぎみに終るもの(113~127)、丸く終るもの(128~137)、内に巻き込むように丸く終るもの(138~150)がある。(151~157)の形態は、ヨコナデによっ



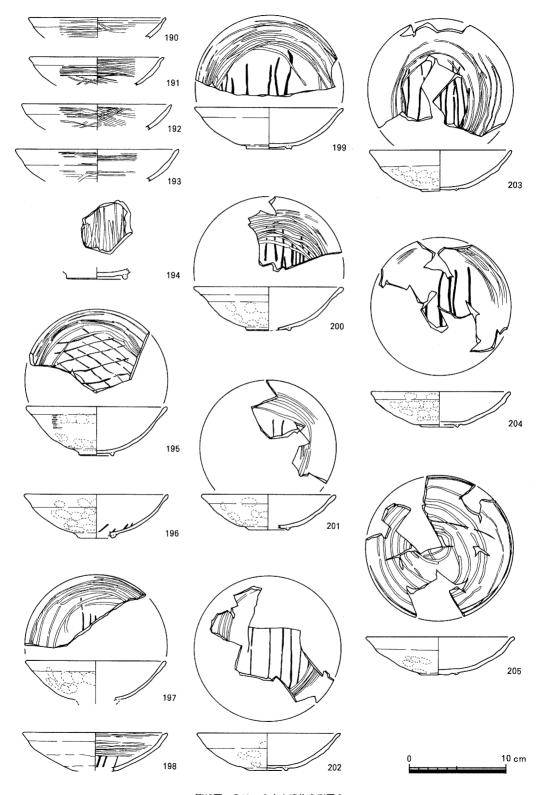
て底部と口縁部との境に鈍い稜を持つもので、底部・口縁部とも一様に直線的に伸びる。(158 ~172) の形態は、強いヨコナデによって底部と口縁部の境の稜が鋭くなるもの、あるいは段 を呈するものである。これらの口縁端部の形態には、つまみ上げて面を持つもの(158~160)、 外上方へつまみ出されるもの(161~165)、内上方へつまみ上げられるもの(166・167)、内 に巻き込むように終るもの(168~170)、器肉を減じて尖るもの(171・172)などがあり、 変化に富む。なお、口径10cm以上を測る大型のもの(142・157・172)が各形態に認められる。 また、燎心油痕は6点(145・150・153・154・156・165)に認められ、図示したうちの1割を占め る。土師器中皿(173~189)の形態には、深いもの(173~177)と浅いもの(178~189) がある。前者は平坦な底部から丸く屈曲した後直線的に伸びる長い口縁部に至るもので、前代 の坏の系譜を引くものであろう。(174・175)の口縁端部は著しくつまみ上げられ、丸みのあ る面となる。後者には、器肉が厚く粗雑なもの(178~183)と、薄手で丁寧なもの(184~ 189) がある。(181) の外面底部・(187) の内面・(188) の外面口縁部には煤が付着している。 瓦器椀(190~259)のうち(190~194)は、外面ヘラミガキ・丁寧に貼り付けられた高台・ 装飾を意識しない見込みのヘラミガキ等が認められ、他の瓦器椀に比して古い要素を持つもの である。他はすべて外面にヘラミガキを施さず、指おさえの窪みを残し、内面のヘラミガキも 一様に粗い。口縁部の形態には、先太となって丸く終るもの(195~202他)が多くを占める が、外反ぎみとなるもの(203~205他)もある。高台は(195・196・199・251)が断面台形を 呈する比較的丁寧なつくりであるが、他は形骸化が進んでおり、(205)の底部は高台下端より 下がっており、高台の役目を果たしていない。見込みのヘラミガキには、斜格子状(195・253)、 ジグザグ状(251・252)が若干見られるが、ほとんどが平行線状に施されている。(205)は内 面底部から口縁部に向かって渦巻状のヘラミガキが施されるもので、1点のみを確認していた にすぎないが、小破片の中にも渦巻状ヘラミガキを有するものは含まれているものと考えられ る。底部から体部下半のみを残す(251)は、内面ヘラミガキの前にハケ状工具によるナデ調 整が行われている。瓦器小皿(260~274)には浅めの器形が多く見られるが、なかでも(263 ~265) は平坦で広い底部を持ち、きわめて浅い。また、(273) は丸みのある深い底部を持つ。 外面にヘラミガキが施されているものは(272)のみで、(266~268)の外面底部には指おさ えの窪みが顕著に残る。内面のヘラミガキは、(260・263)が見込みに格子状、(262)が口縁部 に見込みから続く平行線状と密な横方向、(266)が見込みにジグザグ状、(272)の口縁部にや や粗い横方向、(267~271・273・274) には数条が認められる程度である。これらの瓦器椀・瓦 器小皿のうち、椀(198・199・214)・小皿(273)は、前述のように土師器羽釜(285)とまと

須恵器甕 (275·276) は大型のもので、(275) は口縁端部をつまみ上げて凹面となり、

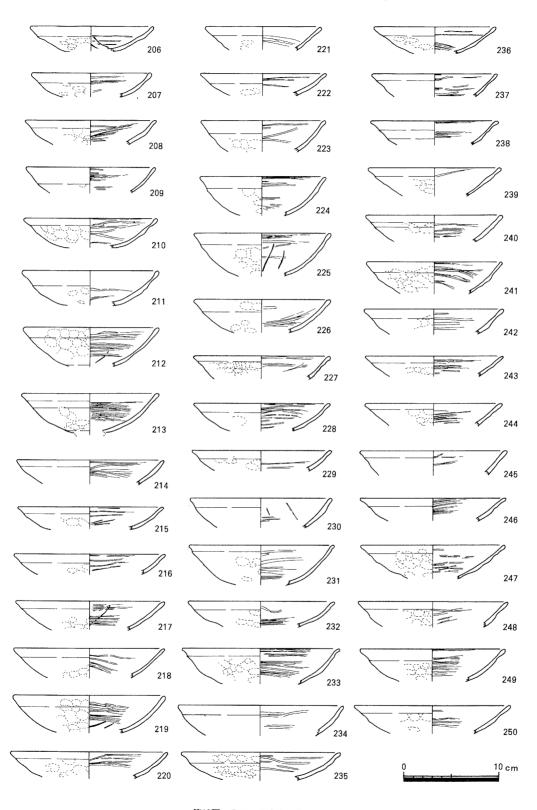
まって出土したものである。



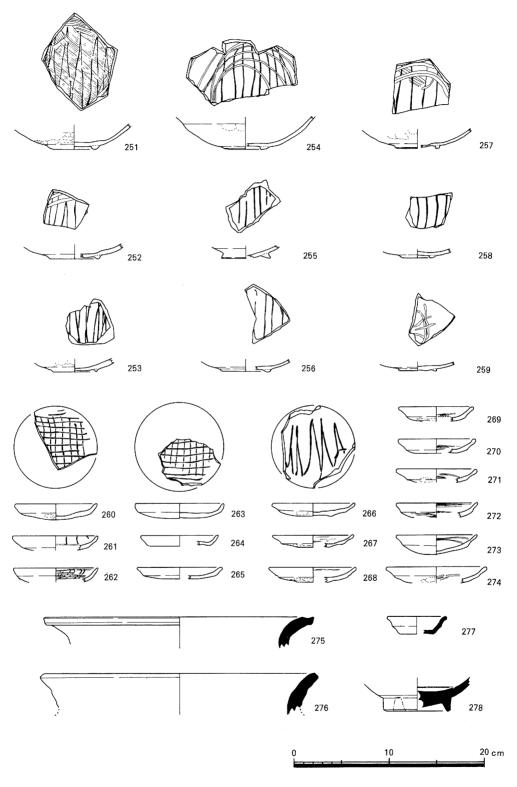
第17図 SK—2出土遺物実測図1



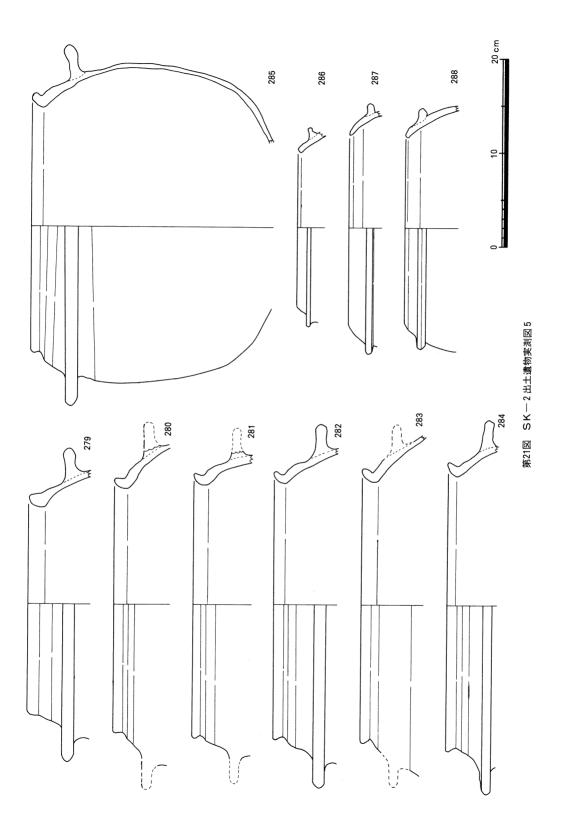
第18図 SK—2出土遺物実測図2



第19図 SK-2出土遺物実測図3



第20図 SK-2出土遺物実測図4



(276) は外傾する面を持つ。(275) の内面には灰かぶりが認められる。須恵器小型坏(277) は底部に回転糸切り痕を残すもので、外面口縁部には自然釉がかかる。

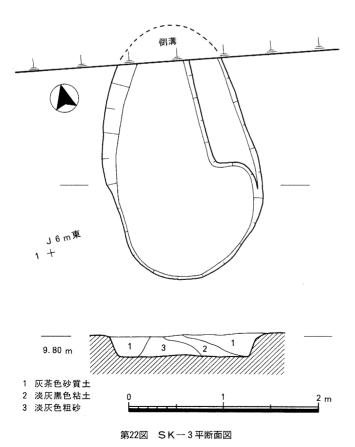
白磁碗(278)は高台内の削り込みが浅く、見込みの沈線は幅広で、浅く鈍い。釉は不透明で薄く、高台脇から高台内にかけて釉なだれが認められる。磁胎はやや粗く、黒色粒を多く含む。

土師器羽釜(279~285)の口縁部の形態には、内傾する頸部から「く」の字形に屈曲して口縁部が長めに伸びるもの(283・284)と、直立するもの(279)が認められるが、他は短い口縁部で両者の中間的な形態を呈している。(285)の鍔以下は、ヘラケズリの後ナデで仕上げている。すべて鍔以下には煤が厚く付着している。

瓦質土器羽釜(286~288)の形態はすべて内湾する口頸部に短い鍔が付くもので、端部の形態には内傾する面を持つ(286-288)と丸く終る(287)がある。いずれも鍔以下には煤が付着する。

SK-3

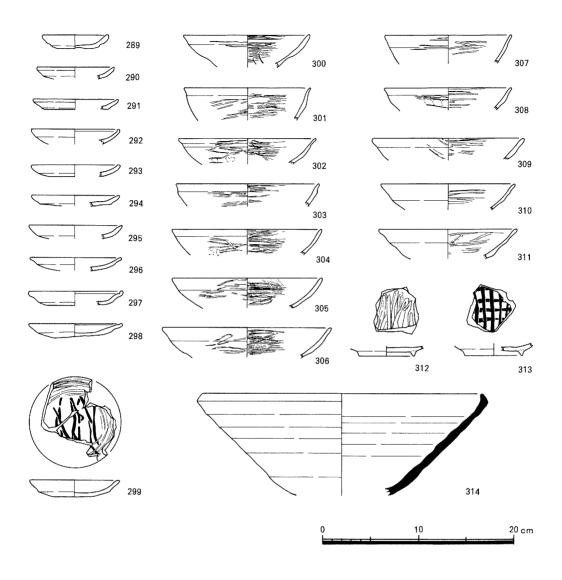
調査区北西隅近くで検出した土坑で、上面の形状は南北に長い楕円形を呈し、検出部の長径 2.3 m・短径1.6 mを測る。土坑の北端は調査区外へ至るが、調査区北壁ではその掘形を確認していないことから、側溝付近が北端であると考えられる。断面の形状は概ね台形を呈するが、

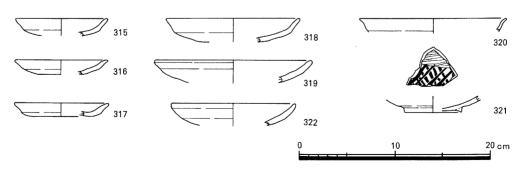


北東部の肩は2段の掘形を有する。深さは0.25 mを測り、 坑底は平坦である。内部堆積 土は、灰茶色砂質土・淡灰黒 色粘土・淡灰色粗砂の3層からなる。遺物は、主に淡灰色 黒色粘土から比較的多量に出 土している。

出土遺物の内訳は、土師器 小皿24・土師器中皿11・土師 器羽釜5・須恵器ねり鉢1・ 瓦器椀59・瓦器小皿1で、他 に常滑焼甕と考えられる体部 の破片が3片認められた。こ のうち図示したものは、第23 図289~314の26点である。

土師器小皿 (289~298) のうち、(289~291・294)





: 第23図 SK-3(289~314)・SK-4(315~321)・SK-5(322) 出土遺物実測図

は浅い器形を呈するもので、底部と口縁部の境に鋭い稜が廻り、(290・291)の口縁端部は面を持つ。他の形態は浅い半球形を呈しており、丸く終るもの(293・295・296)、丸みのある面を持つもの(292)、巻き込むように丸く終るもの(298)がある。(297)は体部から2段に屈曲した後口縁部を巻き込んで終るもので、古い要素を残している。

瓦器小皿(299)は丸みのある浅い底部から外反する口縁部に至るもので、内面口縁部に密な横方向のヘラミガキ、見込みに粗雑なジグザグ状のヘラミガキを施す。瓦器椀(300~313)には、外面にヘラミガキを施して内面に密なヘラミガキを施すもの(300・303・304)、外面にヘラミガキを施すが内面のヘラミガキは粗いもの(301・302・305~308)、外面ヘラミガキを施さないもの(309~311)がある。このうち(300・302)には、見込みから続く平行線状のヘラミガキが認められる。また、(305・306)の内面には、ヘラミガキを施す前にハケ状工具によるナデ調整がなされている。(311)の内面ヘラミガキは渦巻状の可能性がある。(312・313)の高台は比較的丁寧にナデられ、見込みのヘラミガキは、(312)がジグザグ状、(313)が格子状である。須恵器ねり鉢(314)は、底部から丸く立ち上がり、斜上方へ伸びる体部から内傾する口縁部に至るもので、端部は尖り、外傾する面を持つ。

SK-4

調査区南東部、井戸SE-3の南部で検出した。上面の形状は台形に近く、東辺0.4m・他の3辺は0.9m前後を測る。断面の形状は浅い皿形で、深さ0.2~0.25mを測る。内部堆積土は上層の灰茶色砂質土と下層の淡灰黒色粘土からなり、両層から土師器・瓦器等の細片が少量出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿 4・土師器中皿 4・羽釜 1・瓦器椀 2 で、そのうち図示した ものは、第23図315~321の 7 点である。

土師器小皿 (315~317)・土師器中皿 (318・319)・瓦器椀 (320・321) はいずれも小破片で遺存状態も良好ではない。瓦器椀 (321) は、見込みに格子状のヘラミガキ、内面体部に密な横方向のヘラミガキが施されているもので、高台は低いものの比較的しっかりした作りで、丁寧なナデによって貼り付けられている。

SK-5

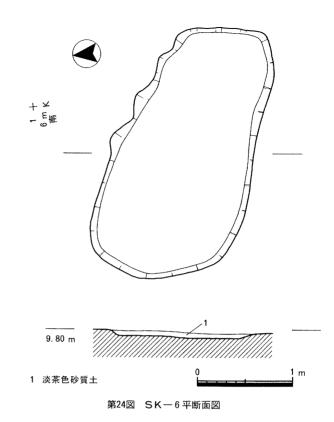
調査区のほぼ中央部で検出した土坑である。上面の形状は東西に長い楕円形を呈しており、 長径1.2m・短径1.1mを測る。断面の形状は浅い皿形で、深さは0.15mを測る。内部堆積土 は、上層の灰茶色砂質土と下層の淡灰黒色粘土からなり、両層から遺物がごくわずかに出土し た程度である。

出土遺物の内訳は、土師器中皿 2・瓦器椀 1 で、そのうち図示したものは、第23図322の土師器中皿 1 点のみである。

SK-6

調査区南東部で検出した土坑で、土坑 SK-4の西に位置する。上面の形状は東西に長い楕円形を呈し、長径2.8 m・短径1.4 mを測る。断面の形状はきわめて浅い皿形を呈し、深さは0.06 mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土のみで、内部から土師器・須恵器・瓦器等と小破片が比較的多量に出土している。

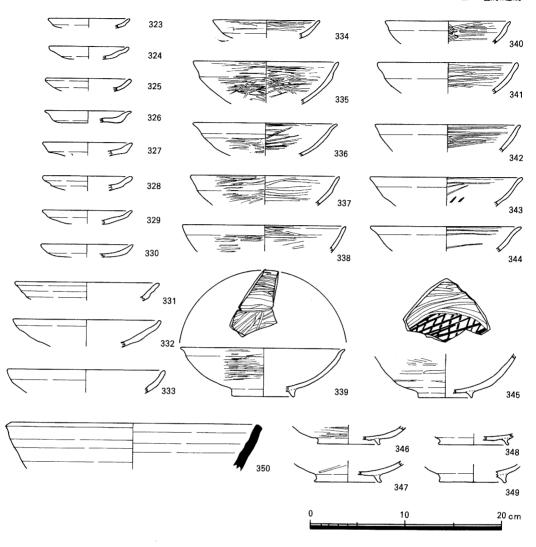
出土遺物の内訳は、土師器小皿 25・土師器中皿14・須恵器壷1・ 須恵器ねり鉢1・瓦器椀31・瓦器 小皿1で、そのうち図示したもの は第25図323~350の28点である。

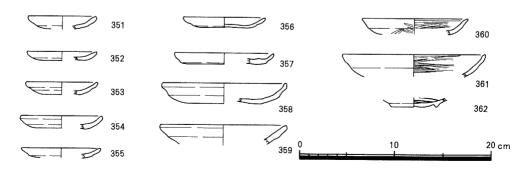


土師器小皿(323~330)は、いずれも浅い器形を呈するもので、口縁部には強いョコナデが施されており、底部と口縁部との境には一様に稜が一周する。口縁端部の形態には、尖って終るもの(323・329・330)、巻き込むようにつまみ上げて終るもの(324・328)、外傾する面を持つもの(325)、外へつまみ出されるもの(329・330)がみられる。土師器中皿(331~333)のうち、(331)は浅い器形を呈し、口縁部には2段のョコナデが施されるもので、口縁端部は外につまみ出されて終る。(332・333)は深い器形を呈するもので、ともに口縁部は体部から直立ぎみとなり、口縁端部の形態は(332)が丸みのある面を持ち、(333)は丸く終る。

瓦器小皿 (334) は、口縁端部内面に凹線状の段を有するもので、ヘラミガキは外面には施されず、内面口縁部にのみ粗い横方向のものが施されている。瓦器椀 (335~349) はその調整から、外面にヘラミガキを施すもの (335~339・345) と、ヘラミガキを施さないもの (340~344) に分かれる。前者の内面のヘラミガキは密に施されており、見込みのヘラミガキには体部と分化して乱方向に施すもの (339) と格子状に施すもの (345) がある。高台は断面逆三角形を呈しており、(339・349) は比較的重厚な作り、(346~348) はやや薄手、(345) は小型で低いが、総じて丁寧な作りである。

須恵器ねり鉢(350)は、外上方へ直線的に伸びる体部からわずかに外反する口縁部に至る もので、端部は外傾する面を持つ。





第25図 SK-6(323~350)・SK-7(351~362) 出土遺物実測図

SK-7

調査区の南西隅近くで検出した土坑である。南部は調査区外に至るため、全容は不明であるが、検出部の上面の形状は径1.6 m程度の半円形を呈する。断面の形状は逆台形を呈し、深さ0.15~0.25 mを測る。内部堆積土は黒灰色粘土1層で、上面および坑底には、灰が薄く堆積している。内部からは、土師器・瓦器等の小破片が多く出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿13・土師器中皿13・瓦器椀6・瓦器小皿1で、そのうち図示したものは、第25図351~362の2点である。

土師器小皿 (351~357) は浅い器形を呈するもので、(351・353・355~357) は強いョコナデによって底部と口縁部の境に稜を持つ。口縁端部の形態には、丸く終るもの (351・352・357)、つまみ上げぎみに終るもの (353・355・356)、外傾する面を持つもの (354) がある。このうち (354) の外面部には煤が付着していることから、燈明皿として使用されていた可能性が考えられる。また、(357) は口径10cmを超える大型のものである。土師器中皿 (358・359) のうち (358) は、強いョコナデによって口縁部が直立ぎみとなるもので、(359) は直線的に伸びる口縁部のみが遺存するものである。ともに口縁端部には外傾する面を持つ。

瓦器小皿 (360) の外面のヘラミガキは何方向かに分割されて施されているようで、内面には密なヘラミガキが横方向に施されている。瓦器椀 (361・362) には外面のヘラミガキは認められない。内面のヘラミガキは、(361) には比較的密なものが横方向に施され、(362) には渦巻状に施されている。(362) の高台は断面逆三角形で低い。

小穴

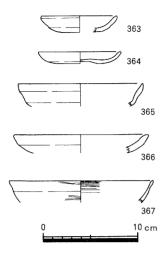
調査区南部、土坑SK-6の南側で、小穴5個($SP-1\sim SP-5$)を検出した。これらの小穴は、まとまった位置で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴とは考えがたく、性格は不明である。

SP-1

土坑**SK**-6のすぐ南で検出した小穴である。上面の形状は南北に長い楕円形を呈し、長径 0.31 m・短径0.2 m・深さ0.05 mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土で、層中から土師器中皿の底部片が1片出土したのみである。

SP-2

小穴SP-1の南約1mの位置で検出した小穴である。上面の形状は東西に長い楕円形を呈し、長径0.39m・短径0.26m・深さ0.11mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土1層で、内部から土師器小皿5・土師器中皿2・瓦器椀2が出土している。そのうち図示したものは、第26図363~365の3点である。土師器小皿(364)の外面口縁部には煤が付着していることから、燈明皿として使用されていたものと推定される。



SP-3

小穴SP-1の西約1mの位置で検出した小穴である。上面の形状は東西に長い楕円形を呈し、長径0.24m・短径0.3m・深さ0.07mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土で、遺物は出土していない。

SP-4

小穴SP-3の南西約0.9mの位置で検出した小穴である。 上面の形状は東西に長い楕円形を呈し、長径0.4m・短径0.3m・深さ0.07mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土で、内部から土師器中皿1・瓦器椀1が出土している。そのうち図示した

第26図 SP-2・4・5 出土遺物実測図 ものは、第26図366の土師器中皿のみである。

SP-5

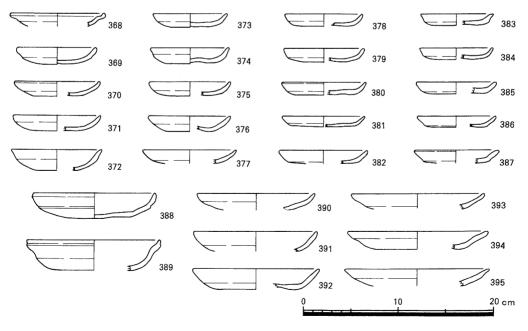
小穴SP-4のさらに南西約0.8mの位置で検出した小穴である。上面の形状は円形に近く、径0.35m前後・深さ0.05mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土で、内部から瓦器椀1の他、土師器皿・土師器羽釜の体部片が若干出土している。そのうち図示したものは、第26図367の瓦器椀のみである。

包含層出土遺物

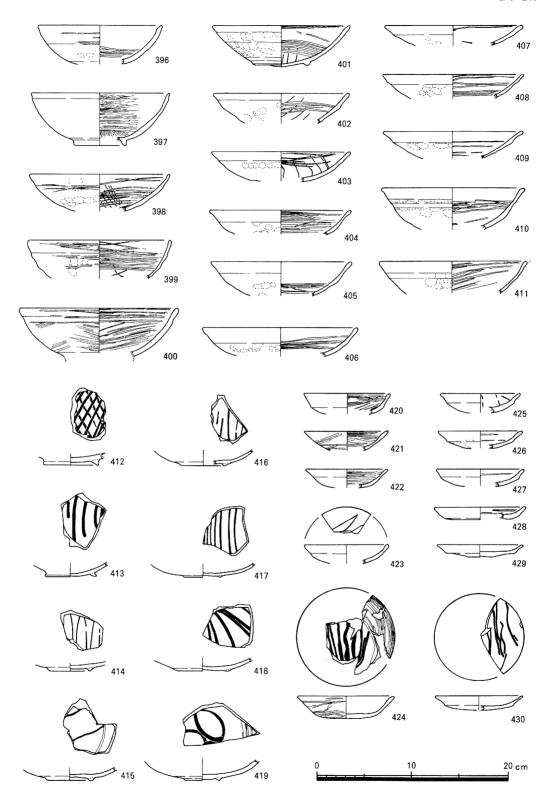
第4層暗灰色砂質土から、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器等がコンテナ箱に2箱分出土しているが、小破片のものが多い。出土遺物の内訳は、土師器小皿183・土師器中皿36・土師器甕2・土師器羽釜43・須恵器ねり鉢5・瓦器椀340・瓦器小皿28・瓦質土器甕1・瓦質土器羽釜11・白磁碗2・白磁合子1である。これらの遺物はその特徴からみて、概ね12世紀~13世紀に比定されるものである。そのうち図示したものは、第27図~第29図368~446の79点である。

土師器小皿(368~387)のうち、(368)の口縁部は2段に屈曲した後端部を巻き込んで終るもので、古い要素を持つ。他の小皿の形態には、丸みのある器形を呈するもの(369~377)と、平坦で広い底部を持つ浅い器形のもの(378~387)がある。内面底部の調整にハケ状工具を用いるもの(369・371・372)があり、その方向は、(369・372)が円周方向、(371)は一方向である。これらの小皿のうち、燈心油痕を残すものは(385)のみであるが、(370・371・374)の外面口縁部には煤の付着が認められる。土師器中皿(388~392)のうち、(388)は底部にヘラケズリによる成形が行われているもので、きわめて強いヨコナデによって、底部と口縁部の境には鋭い稜が一周している。(389)はやや深い器形を呈し、口縁端部は丸みのある面となる。(390~395)は浅い器形を呈し、口縁端部は一様につまみ上げられ、尖って終る。

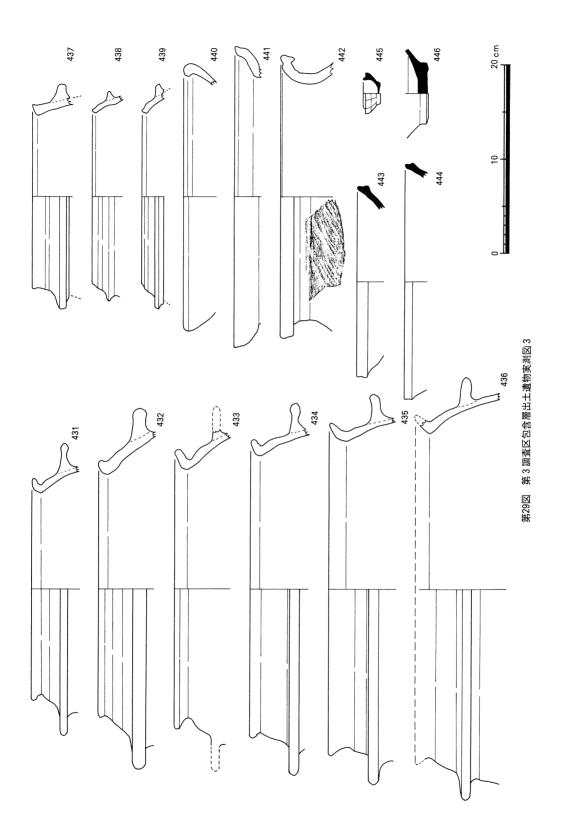
瓦器椀(396~411)には、外面にヘラミガキを施すもの(396~400)と、施さないもの (401~411)がある。前者は丸みのある深い器形を呈するのに対し、後者は直線的な浅い器 形を呈する。(397)の内面のヘラミガキは、体部と見込みとを分化して密に施されている。高 台は断面U字形を呈し、丁寧な作りである。(398・399) の見込みには、格子状のヘラミガキ が施されているものと考えられる。(401~403)の見込みには粗い平行線状のヘラミガキが施 され、(402・403) の見込みのヘラミガキは口縁部近くにまで及んでいる。(401) の高台は断 面方形のしっかりした作りであるが、外面底部が高台下端より突出している。(409)の内面の ヘラミガキは、渦巻状に施されている可能性がある。高台は付近のみが遺存する(412~419) のうち、(412・413) は比較的丁寧な作りであるが、他はきわめて低平で、細い粘土紐を軽く なでつけたもの(416・417・418)などがあり、いびつなものが多い。見込みのヘラミガキに は、格子状(412)、平行線状(413・415~417)、ジグザグ状(414)、渦巻状(418)、連結輪状 (419) がある。瓦器小皿(420~430) には、丸みのある底部を持つ深めの器形のもの(420 ~427) と、平坦な底部を持つ浅い器形のもの(428~430)がある。いずれにも、底部と口縁 部との境に稜を持つもの(425~427・429・430)と持たないもの(420~424・428)があ る。これらのうち、外面にヘラミガキが施されるものは(421・424)の2点である。内面口縁 部付近のヘラミガキはすべて横方向に施されているが、(420・422)が密(421・422・428) が粗、(426・427)には2~3条が認められる程度である。見込みのヘラミガキには、ジグザグ 状(423)、平行線状(424・425・430)がある。

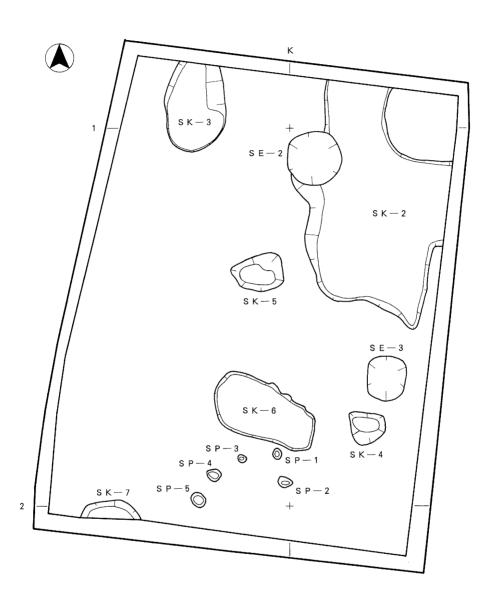


第27図 第3調査区包含層出土遺物実測図1



第28図 第3調査区包含層出土遺物実測図2







第30図 第3調査区平面図

土師器羽釜(431~436)は、一様に内傾する頸部から「く」の字形に屈曲する口縁部に至るもので、口縁部が長めに伸びるもの(433・435)や、やや短く直立ぎみとなるもの(432)などがある。すべてに煤が認められるが、(431・436)は外面全体に付着し、他は鍔以下にのみ付着する。なお、(436)の内面下方には炭水化物が厚く付着している。土師器甕(441)は、頸部から内湾した後に直立ぎみとなるいわゆる「受け口状」の口縁部を持つ。

瓦質土器羽釜(437~439)のうち、(437)は直立ぎみの口頸部に厚めの鍔が付くもので、 鍔上面から口縁端部にかけて、ヨコナデによる明瞭な段を3段有する。(438・439)は著しく 内湾する口縁部を持つ三脚付羽釜である。瓦質土器甕(440・442)のうち(440)は、内湾 する口縁部を持つもので、端部は内に巻き込んで終る。(442)は直立する頸部から外反する口 縁部に至り、端部は上下に拡張して面を持つ。外面体部にはタタキ目が遺存している。

須恵器ねり鉢(443・444)はともに小破片の出土であるが、口縁端部をわずかにつまみ上げ、外傾する面を持つ。

白磁合子(445)の体部は輪花状を呈するもので、外面口縁端部から受部上面と外面体部下 半以下は露胎である。白磁碗(446)は高台の幅が広く、高台内の削り込みはきわめて浅い。 また、内面の沈線は深く鋭い。磁胎は暗い灰白色を呈し、釉も暗く濁る。外面は露胎である。

第4章 出土遺物観察表

SK-1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
1	土師器 小皿	8.2	丸味のある底部から斜上方へ直線的に伸び る口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終る。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコ ナデ。		密 石英・長石 等の細粒を 含む	良好	
2 七	土師器 小皿	9.3 1.7	直線的な底部から稜を持って屈折し、斜上 方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は外 へ尖って終わる。 外面底部ケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。		密	良	燈心油痕あ り
3	土師器 小皿	10.5 —	外上方へ直線的に伸びる底部から稜を持って屈折し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に 至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡橙色	密 石英・赤色 酸化粒等の 細粒を含む	良	
4	土師器 小皿	10.6	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的 に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコ ナデ。	暗橙色~乳 褐色 器肉淡灰色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・	調	整	等(の 特	徽	色	調	胎	土	焼成	備	考
5	土師器 中皿	12.9	底部から稜 上方へ内湾し くで再び外反 底部ナデ、	て伸び し、端	る口細部は	縁部に 外へ尖	至る。	端部近			密		良好		
6	土師器 中皿	14.8	底部から丸 て伸びる口縁 ぎみに終わる 指おさえ後	部に至 。	る。゛	端部は	斜上フ	ちへ尖り	乳白包	2	密赤色配多量に		良		
7 七	土師器中皿	13.6 2.9	上方へわず 上がり、斜上 至る。端部は 指おさえ後	方へ外 丸く終	反ぎ。 わる。	みに伸	びるロ	1縁部に		1~暗	密		良	二次焼うける面に煤に付着	。内 多量
8 +	土師器 中皿	14.8 3.6	浅い半球形 外方へ外反ぎ は丸く終わる。 指おさえ後	みに伸i 。	びるロ	口縁部	に至る	5。端部		!~暗	密		良	二次焼うける	成を
9	土師器 羽釜	19.2	体部から丸 斜上方へ内湾 部は外傾する 外面ヨコナ ナデ。	ぎみに(丸みの)	伸び <i>を</i> ある[る口縁 面を持	:部に3 :つ。	≦る。端		.	粗 3 mi チャー 石英む 含む	· ト •	良	外面に着	煤付
10	瓦器 小皿	8.6	底部から斜 に至る。端部 底部ナデ、 密な横方向。	は外へ	尖りる	ぎみに	丸く約	きわる。	黒灰色器肉白		密		良好		
11	瓦器	13.4	半球形の体 線的に伸びる に丸く終わる。 指おさえ後 ラミガキは外	コ縁部に ・ 本部ナ	c至を デ、[る。端 □縁部	部は4 ヨコナ	らりぎみ · デ。へ	灰黒色口縁部肉灰白	• 器	やや粗	l	良		
12	瓦器 椀	14.8	上外方へ直 様の口縁部に 体部ナデ、「 密な横方向。	至る。					暗黒灰器肉灰		やや粗		良	表皮剥	维
13	瓦器 椀	15.3	半球形の体系 口縁部に至る。 体部ナデ、「 密な横方向。	端部に	は丸く	、終わ	る。		灰黒色器肉白		やや粗		良好		
14 七	瓦器 椀	15.9 5.5 高台径6.25 高台高0.75	水平な底部な 縁部に至る。 は断面逆台形 指おさえ後 コナデ、ヘラ 体部密な横方	端部はP で「ハ」 本部ナラ ミガキに	内傾す の写 で、口 は外面	トる面 2形に 1縁部 n粗い	を持つ 付 高 も 横方向	高台	灰黒色器肉白		やや粗		良好		

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
15	瓦器 椀	12.3	斜上方へ内湾して伸びる体部から器肉を減じ、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は内傾する面を持つ。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へラミガキは粗い横方向。	器肉白灰色	やや粗	良好	
16	瓦器 椀	14.9	上外方へ直線的に伸びる体部から斜上方へ 外反して伸びる口縁部に至る。端部は内傾す る面を持つ。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは外面粗い横方向、内面密な斜方向。	口縁部・器 肉淡灰褐色	密	良好	
17	瓦器	16.3	上外方へ直線的に伸びる体部から、上外方 へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く 終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは外面粗い横方向、内面密な斜方向。	器肉灰白色	やや粗	良好	
18 L	瓦器椀	14.7 5.3 高台径 6.3 高台高 0.6	半球形の底・体部から上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は内傾する面を持つ。 高台は断面逆台形で垂直に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョ コナデ。ヘラミガキは内面密な横方向、見込み格子状+平行線状。		やや粗	良好	
19	瓦器	15.1	上外方へ直線的に伸びる体部から器肉を減 じて上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。 端部は尖りぎみに終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは 密な横方向。	灰黒色 器肉灰色	やや粗	良好	
20	瓦器 椀	14.6	形態19に似る。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは粗い横〜縦方向。	暗黒灰色 器肉灰色	やや粗	良	表皮剥離
21	瓦器	16.3	斜上方へ内湾して伸びる体部から、19と同様の口縁部に至る。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台上方ョコナデ。ヘラミガキは外面粗い横方向、内面密な横方向。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
22	瓦器 椀	15.8	上外方へ直線的に伸びる体部から、わずかは外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へラミガキは外面口縁部密な横方向、体部粗い斜方向、内面上半粗・下半密な斜方向。		やや粗	良好	
23	瓦器 椀	15.4 5.85 高台径 6.2 高台高0.75	半球形の底・体部から上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。高台は断面逆三角形で垂直に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは外面密な斜方向、内面体部密な乱方向、見込み密な一方向。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良	
24	瓦器 椀	高台径5.15 高台高 0.6	中央が下る底部に、断面逆台形の高台が、 「ハ」の字形に付く。 ナデ後高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは見 込み粗い一方向。	外面・器肉 白灰色 内面黒灰色	やや良	良好	高台に煤付 着

遺物番号 図版番号		(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
25	瓦器 椀	— 高台径 5.8 高台高 0.6	水平な底部から、外上方へ内湾して伸びる 体部に至る。高台は断面逆台形で「ハ」の字 形に付き、端部は外反する。 ナデ後高台周囲ョコナデ。見込みにヘラミ ガキの痕跡。	淡黄灰色	やや粗	良	
26	瓦器 椀	 高台径6.25 高台高 0.8	水平に底部から外上方へ内湾して伸びる体 部に至る。高台は断面逆三角形で垂直に付く。 ナデ後高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見 込みにジグザグ状+格子状。	灰黒色~灰 白色 器肉白灰色	やや粗	良好	

第1調査区包含層

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
27	土師器 小皿	6.6	斜上方へ内湾して伸びる口縁部。端部は丸 く終わる。 口縁部ョコナデの他は不明。	黒褐色	やや粗	良	
28	土師器	7.75	外上方へ内湾して伸びる口縁部。端部は丸 く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	淡黄褐色	密	良好	
29	土師器小皿	8.25 —	外上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部は 尖りぎみに終わる。 ョコナデ。	淡橙色	密	良好	
30	土師器 小皿	8.35 <u>-</u>	斜上方へ内湾して伸びる口縁部。端部は立ち上がり、丸く終わる。 ョコナデ。	外面淡灰褐 色 内面淡黄褐 色	やや粗	良好	
31	土師器 小皿	9.45 1.55	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は器 肉を増して丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡橙色	やや粗	良	
32	土師器 小皿	10.0 1.35	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は 外へつまみ出される。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面乳白色 内面淡灰褐 色	粗 チャート 石英等多量 に含む	良好	
33	土師器 小皿	10.2	斜上方へ内湾した後直線的に伸びる□縁部 に至る。端部はつまみ上げ、外傾する面を持 つ。 ョコナデ。	淡褐色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形 態・・調調整整 等 の 特 徽 色 調	胎 土	焼 成	備考
34	土師器 羽釜	22.9	斜内方へ直線的に伸びる頸部から丸く屈曲 し、短い口縁部に至る。端部は丸く終わる。 鍔は基部を残して欠損する。 頸部ナデ、口縁部・鍔上下ョコナデ。	粗	良	鍔以下に煤 付着
35	土師器羽釜	27.85	斜内方へ内湾する頸部から丸く屈曲し、外 上方へ短く伸びる口縁部に至る。端部は器内 を滅じて丸く終わる。鍔貼付部から欠損。 外面頸部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナ デ。内面頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	石英・チャ	良好	
36	瓦器小皿	7.85 1.7	浅い半球形の体部から外に稜を持ち、外上 方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わ る。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。		良	炭素吸着不良
37	瓦器 小皿	9.85 1.0	水平な底部から外に稜を持ち、外上方へ外 反する口縁部に至る。端部は上方へつまみ上 げぎみに丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面にわずかに認められる。	密	良	
38	瓦器 小皿	9,95	斜上方へ内湾する底部~口縁部。端部は外 へ尖りぎみに終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは 内面わずかに認められる。	やや粗	良	炭素吸着不 良
39	瓦器椀	12.5	斜上方へ内湾する体部から外に稜を持ち、 上外方へ外反する口縁部に至る。端部は外へ つまみ出される。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ、ヘラミガキは わずかに認められる。	やや粗	良好	
40	瓦器	13.05	斜上方へ直線的に伸びる体部〜口縁部。端 部は丸みのある水面な面を持つ。 ョコナデ。ヘラミガキは内面口縁部粗い横 方向。	やや粗	良好	
41	瓦器	12.75	斜上方へ直線的に伸びる体部~口縁部。端 部は先太となり、外へわずかにつまんで終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面粗い横方向。	やや粗	良好	
42	瓦器	15.9	斜上方へ直線的に伸びる体部から外に稜を 持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部 は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面粗い横方向(渦巻状?)	粗	良好	
43	瓦器	17.1	斜上方へ直線的に伸びる体部から外に稜を作った後器肉を減じ、さらに伸びる口縁部。端部は丸く終わる。 ョコナデ。ヘラミガキは内面に1条認められる(渦巻状?)	粗	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
44	瓦器	— 高台径 5.9 高台高0.75	水平に近い底部に断面逆三角形の高台が垂直に付く。 ナデ後高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見 込みに乱方向。	暗灰色 器肉白灰色	やや粗	良	
45	瓦器 椀	高台径 5.9 高台高 0.6	水平に近い底部に断面逆三角形の高台が垂 直に付く。 高台周囲ョコナデ。	黒灰色 器肉淡灰褐 色	密	良好	
46	瓦器 椀	高台径6.75 高台高 0.7	水平な底部に断面逆三角形の高台が「ハ」 の字形に付く。 ナデ後高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは見 込みに乱方向。	灰白色	やや粗	良好	炭素吸着不 良
47	瓦器 椀	— 高台径 — 高台高 —	水平に近い底部から―旦張り出し、外上方 へ内湾する体部に至る。高台は断面逆三角形 で底く、垂直に付くが端部を欠損する。 体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。へラミガキ は見込みに単位幅の狭い格子状。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
48	瓦器 椀	高台径 — 高台高 —	外上方へ直線的に伸び、体部に至る。高台 は断面逆三角形で「ハ」の字形に付くが、端 部を欠損する。 体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキ は見込みに密な乱方向。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良	
49	須恵器すり鉢		斜上方へ外反ぎみに伸びる体部から〜口縁 部。端部は上方へつまみ上げられ、外傾する 丸みのある面を持つ。 回転ナデ。	淡青灰色 口縁端面暗 灰色	やや粗 長石多く含 む	良好	
50	須恵器すり鉢	底径 12.0	水平に近い底部から外上方へ直線的に立ち 上がる。 底部回転糸切り。外面底部側面ケズリ後ナ デ。内面ナデ。	灰青色	やや粗	良好	
51	備前焼すり鉢	18.8	外上方へ外反ぎみに伸びた後稜を持ち、直立する口縁部。側面には2条の凹線が廻る。 端部は段を持ち、内傾する面となる。 回転ナデ、すり目は8条/2cm、著しく左傾する。	外面淡灰色 内面灰黒色	密	良好	
52	丹波焼すり鉢	33.2	斜上方へわずかに外反する体部〜口縁部。 内面には1条の凹線が廻り、端部外傾する面 を持つ。 回転ナデ。すり目は5条/1.6cm。	外面茶褐色 器肉淡灰色	やや粗		

SE-1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼 成	備	考
53	瓦器 椀	13.4	1113C 3 CITO 0 F 1110C 9	外面·器肉 淡灰色 内面灰黒色	密	良		
54	瓦器	13.0	斜上方へ直線的に伸びる体部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部は器肉を減じて丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面粗い横方向。	黒灰色~灰 白色 器肉白灰色	やや粗	良		
55	瓦器 椀	15.6	上外方へ内湾ぎみに伸びる体部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面粗い横方向。	淡灰色	やや粗	良好		

SD-2

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・	調整	等の	特	徵	色	調	胎	±	焼 成	備	考
56	瓦器 椀	13.9	外上方へ直線 部は丸く終わる ョコナデの他	0	体部~	口縁:	部。端	乳白色		やや粗	I	良		
57	瓦器	高台径 6.8 高台高 0.7	断面U字形の 高台周囲ヨコ・ 痕跡あり。				がキの	黒灰色器肉乳	黄色	やや粗		良好		

第2調査区包含層

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴 色調	胎土	焼 成	備	考
58	土師器 小皿	8.4	外上方へ伸びる底部から鈍い稜を持ち、斜 上方へ内湾する口縁部に至る。端部は尖りぎ みに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	粗 赤色酸化粒 含む	良		
59	土師器小皿	9.9	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は上 淡黄褐色 方へつまみ上げぎみに終わる。 ョコナデ。	やや粗	良		
60	瓦器 椀	13.85	滅じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は「内面黒灰色」	やや粗 石英・長石 粒多く含む	良		

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
61	瓦器 椀	13.9	10130 21130 211	黒灰色 器肉淡灰色	やや粗	良好	
62	土師器 羽釜	鍔径 29.0	< ∘	外面黒褐色 内面・器肉 淡赤褐色	粗 石英•長石• チャート等 多く含む	良好	鍔以下に煤 付着

SE-2

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
63	土師器 小皿	8,0 1.65	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸 く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ョコナデ。	乳褐色	密	良好	
64	土師器 小皿	7.8 1.25	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は 内に巻き込む。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	やや粗	良好	内面に煤付 着
65	土師器 小皿	8.1 1.15	水平な底部から丸く屈曲し、上外方へ内湾 して伸びる短い口縁部に至る。端部は内に巻 き込むように丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコ ナデ。	淡灰褐色	密	良好	
66	土師器 小皿	7.8 1.0	形態65に似るが端部は丸く終わる。 外面・内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色 外面底部淡 茶褐色	密	良好	
67	土師器 小皿	7.15 0.85	水平な底部から丸く屈曲し、斜上方へ立ち上がる短い口縁部に至る。端部は内に巻き込む。 外面底部へラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
68	土師器 小皿	7.15 1.15	水平な底部から丸く屈曲し、斜上方へ直線 的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに 丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良好	
69	土師器 小皿	8.45 1.2	水平に近い底部から鈍い稜を持って屈折し、 斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部 は内へ巻き込むように丸く終わる。 外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナ デ、内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳黄色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態•	調整	等(の 特	徴	色	調	胎	±	焼 成	備	考
70	土師器 小皿	8.2 1.1	底部から稜を した後斜上方へ る。端部は上方 指おさえ後ナ	、内湾ぎみ うへ尖りぎ	に伸び みに終	る口縁 わる。		淡灰褐	色	やや粗		良好		
71	土師器 小皿	7.8 1.1	形態70に似る 外面底部へ ラ デ。内面底部円 デ。	ケズリ後	ナデ、	口縁部		淡灰褐	色	密		良好		
72	土師器 小皿	8.2 1.25	底部から丸く みに伸びた後余 に至る。端部は ョコナデ。	上方へ内	湾して	伸びる	口縁部	淡赤褐	色	やや粗		良好		
73	土師器中皿	10.5 1.8	底部から斜上 丸く終わる。 指おさえ後外 内面ヨコナデ。							やや粗		良好		
74	土師器中皿	13.15 2.0	底部から斜上 至る。端部は対 外面底部ナテ ナデ。	しく終わる	0			外面淡 色 内面黒 ~淡黄	褐色	やや粗		良好		
75	土師器 中皿	13.9 1.7	底部から丸く に伸びる口縁部 に丸く終わる。 指おさえ後外 内面ョコナデ。	Sに至る。 ト面底部ナ	端部は	内へ尖	りぎみ	淡赤褐	色	やや粗		良好		
76	瓦器 小皿	9.0 2.0	丸みのある底 へ外反して伸び 終わる。 指おさえ後底 込みに渦巻状へ	ドる口縁部 長部ナデ、	に至る 口縁部	。端部	は丸く	灰黒色 白色 器肉灰		やや粗		良		
77	瓦器 椀	12.2	斜上方へ内湾 部。端部は器内 体部ナデ、口 内面に粗い横方	を増して 縁部ョコ	丸く終	わる。		黒灰色器肉灰		密		良		
78	瓦器	12.7	斜上方へ直線 て斜上方へ外反 部は外へつまみ 指おさえ後体 ラミガキは内面	して伸び 出される ぶ部ナデ、	る口縁 。 口縁部	部に至	る。端	黒灰色器肉灰		やや粗		良好		
79	瓦器	13.3	斜上方へ内湾 に外反して伸び 終わる。 指おさえ後体 ラミガキは内面	ヾる□縁部 ×部ナデ、	に至る 口縁部	。端部	は丸く	黒灰色器肉淡	灰色	やや粗		良好		

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
80	瓦器 椀	15.4	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は器 肉を増して丸く終わる。 ョコナデ。ヘラミガキは内面に 1 条のみ認 められる。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
81	瓦器 椀	15.7	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部近く で器肉を増して外反ぎみとなり、丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面に粗い横方向。	灰白色	やや粗	良好	炭素付着不 良
82 八	瓦器	12.2 3.0 高台径 3.7 高台高 0.2	浅い半球形を呈する。口縁部は器肉を減じて外反ぎみとなり、端部は丸く終わる。高台は厚い粘土紐状。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは内面体部に粗い横方向。 見込みに連結輪状(3個)。	外面灰黒色 ~淡茶褐色 内面灰黒色 ~灰色	粗	良好	炭素付着不 良
83	常滑焼壺	18.6 — 最大径29.65	上方に最大径を持つ体部から内傾ぎみに立つ頸部に至る。口縁部は頸部から外反して外上方へ伸び、端部は器肉を減じて丸く終わる。 外面体部下位指ナデ、口頸部回転ナデ。内面体部粘土帯接合部指おさえ後ナデ、口頸部回転ナデ。	外面赤灰色 内面灰赤色 ~茶褐色 器肉灰色	やや粗 長石粒含む	良好	内面口縁部 外面肩部に 黄緑色の自 然釉付着
84 八	土師器羽釜	27.7 — 鍔径 42.1	丸みのある体部から斜内方へ内湾する頸部 に至る。口縁部は内に稜を持って短く立ち上 内傾する面を持つ。鍔は水平、端部丸く終わる。 外面体部ヘラケズリ後ナデ、頸部ナデ、口 縁部・鍔周囲ヨコナデ。内面体部・頸部ナデ、 口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	外面鍔以下 に煤付着 最下段の井 戸側
85	土師器 羽釜	47.1 — 鍔径 41.1	直線的に伸びる体部から斜内方へ伸びる頸部に至る。口縁部は短く直立し、端部丸く終わる。鍔は下がりぎみに付き、端部丸く終る。外面体部へラケズリ後ナデ、頸部ナデ、口縁部・鍔上下ヨコナデ。内面体部ナデ、口縁部ココナデ。	淡赤褐色	粗	良好	内外面の鍔 以下に煤・ 炭化物付着、 井戸側
86 八	土師器 羽釜	— 号径 42.7	直線的に伸びる体部のみ遺存。口縁部は打ち欠かれる。鍔はほぼ水平に伸び、端部は尖りぎみに丸く終わる。 外面体部ヘラケズリ後ナデ、鍔上下ョコナデ。内面ナデ。	淡赤褐色~ 灰褐色	粗	良好	内外面の鍔 以下に煤付 着、井戸側
87	土師器 羽釜	34.3 — 鍔径 —	斜内方へ直線的に伸びる頸部から、器肉を増して直立する口縁部に至る。端部は丸く終わる。鍔接合部以下を欠損する。 頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	鍔以下に煤 付着
88	土師器 羽釜	36.4	上内方へ内湾して伸びる頸部から器肉を増して直立する口縁部に至る。端部は内傾する丸みのある面を持つ。 外面ナデ後口縁部・頸部下位ヨコナデ。内面頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	鍔以下に煤 付着
89	瓦質土器 羽釜	19.8	上内方へ直線的に伸びる口頸部。端部は直立ぎみとなり、外傾する面を持つ。鍔は下がりぎみに付き、端部は丸みのある面を持つ。 外面口頸部2段ヨコナデ、鍔上下ヨコナデ。内面ヨコナデ。	白灰色	やや粗	良	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備考
90	瓦器 椀	16.8	斜上方へ内湾して伸びる体部から一旦器内を減じ、上外方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台上方ョコナデ。ヘラミガキは外面粗い横方向、内面体部やや粗い横方向、見込み格子状。	黒灰色 器肉淡灰色	やや粗	良好	
91	瓦器 椀	15.2 4.3 高台径 5.0 高台高 0.4	形態90に似るが、口縁部は直線的に伸びる。 高台は断面逆台形で低く、「ハ」の字形に付 く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョ コナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、 見込みは単位幅狭く不揃いな平行線状。	黒灰色 器肉灰色	やや粗	良好	内面に炭化 物付着
92	瓦器	14.8 4.15 高台径5.25 高台高0.45	浅い半球形を呈する器形。口縁部は先太となり、内に沈線状の凹みを持つ。高台は幅広で低く、不揃いである。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。 見込み平行線状。	黒灰色 器肉灰色	粗	良好	
93	瓦器椀	12.2	上外方へ直線的に伸びる体部〜口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へラミガキは内面粗い横方向。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
94	瓦器	14.5	底部から内湾した後上外方へ直線的に伸びる体部から稜を作った後器内を減じ、外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。指おさえ後体部ナデ、口縁部強いヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込み平行線状。	外面黑灰色 内面灰黒色 器肉灰色	粗	良好	
95	瓦器 椀	14.85	斜上方へ内湾して伸びる体部からわずかに 外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終 わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面粗い横方向。	黒灰色 器肉灰色	粗	良好	
96	瓦器 椀	16.15	斜上方へ内湾する体部から、稜を持った後 外反して伸びる口縁部に至る。端部は先太と なり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。指 おさえの凹凸が顕著に残る。ヘラミガキは内 面粗い横方向。	黒灰色 器肉黄灰色	やや粗	良好	
97	瓦器 椀	15.75 —	外上方へ内湾する体部から鋭い稜を持って 2段に外反して伸びる口縁部に至る。端部は 外へつまみ出される。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面に単位幅狭く粗い横方向。	黒灰色 器肉乳白色	やや粗	良好	
98	瓦器 椀	16.5 —	斜上方へ内湾して伸びる体部から稜を持った後器肉を減じ、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面に単位幅狭く粗い。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
99	瓦器 椀	高台径 3.9 高台高0.25	水平な底部から外上方へ内湾ぎみに立ち上がる体部、高台は断面逆台形できわめて低く「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、高台周囲ョコナデ。 ヘラミガキは内面体部に粗い横方向、見込みに単位幅狭い平行線状。	黒灰色 器肉乳白色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備考
100	瓦器 椀	高台径 4.0高台高 0.3	中央がやや窪む底部のみ遺存。高台は断面 逆三角形〜逆台形で不揃い。 高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは見込みは 不揃いな平行線状。	内面•器肉	やや粗	良好	
101	瓦器 小皿	7.75	浅い半球形を呈する体部から稜を持ち、タ 上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部に 巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ョコナデ 内面2段のョコナデ、内面にヘラミガキが裂 められる。	器肉灰白色	やや粗	良好	
102	瓦器 小皿	8.5	外上方へ内湾する体部から鈍い稜を持った後、器肉を減じて斜上方へ直線的に伸びる口線部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後ナジ、口縁部ヨコナデ。内面にヘラミガキが認められる。	灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
103	瓦器 小皿	8.8 1.8	形態102に似る。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。内 面のヘラミガキは乱れた平行線状。	灰黒色	やや粗	良好	
104	瓦器 小皿	9.25 1.2	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸 く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面粗い横方向。	器肉灰色	粗	良好	
105	瓦器 小皿	8.95 1.5	水平に近い底部から丸く立ち上がり、稜を持った後外反ぎみに直立する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後ナデ、口縁部ョコナデ。へラミガキは内面体部粗い横方向、見込みに粗い平行線状。	器肉灰色	粗	良好	
106	土師器 羽釜	29.8 — 鍔径 40.7	直線的な体部から内傾する頸部に至る。口縁部は屈折し、外上方へ短く伸び、端部は器肉を減じて丸く終わる。鍔は水平に付き、端部は器肉を増して丸く終わる。 外面体部へラケズリ後ナデ、口縁部・鍔上下ョコナデ、内面体部十デ、口縁部ョコナデ。		粗 チャート含 む	良好	鍔以下に煤 付着
107	土師器羽釜	31.2 — 鍔径 40.35	内傾する頸部から丸く屈曲し、外方へ伸びる短い口縁部に至る。端部は器肉を減じて丸く終わる。鍔は下がりぎみに付き、端部丸く終わる。 頸部ナデ、口縁部・鍔上下ョコナデ。	赤褐色	粗	良好	鍔以下・内 面に煤付着
108	土師器羽釜	34.4 — 鍔径 43.0	内傾する顕部から「く」の字形に屈曲し、 外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部 はつまみ上げぎみに終わる。鍔は水平に付き 端部は器肉を増して丸く終わる。 調整107と同様	淡赤褐色~ 淡黄褐色	粗	良好	
109	土師器小皿	7.9	水平に近い体部から丸く立ち上がり、斜上 方へ内湾する口縁部に至る。端部は巻き込む ように丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色~ 淡灰褐色	密	良好	燈心油痕あ り
Л							

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴色	周 胎 土	焼成	備	考
110	土師器 小皿	8.3 1.25	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的 と伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面淡赤	赤色酸化粒	良		
1111 八	土師器小皿	8.4	水平な底部から鈍い稜を持ち、斜上方へ直 泉的に伸びる口縁部に至る。端部は尖る。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ョコナデ。	密雲母含む	良好		
112	土師器 中皿	12.8	外上方へ内湾して伸びる底部から稜を持ち 科上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部 は丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部2段ヨコナデ。内面 ヨコナデ。	淡密	良		

SK-2

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備考
113	土師器 小皿	7.5 1.55	水平に近い底部から丸く立ち上がり、上外 方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は上 方へ尖る。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。		密	良	二次焼成を うける
114	土師器 小皿	7.7 1.45	底部から丸く立ち上がり、上外方へ直線的 に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡灰褐色	密	焼成良	
115	土師器 小皿	7.6 1.3	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は上方へ尖る。 指おさえ後底部強いナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密 2 m程度の 雲母付着	焼成良	
116	土師器 小皿	7.5 1.1	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、外上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	乳褐色	密	良	
117	土師器 小皿	7.75 1.2	底部から口縁端部まで外上方へ内湾して伸びる。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	乳褐色	密	良	
118	土師器 小皿	7.75 1.4	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、上外方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみに終わる。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコナデ。	淡灰褐色	密	良	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整:	等 の 特 徴	色 調	胎土	焼 成	備考
119	土師器 小皿	8.05 1.45	器肉のきわめて薄い底部 ながら内湾して伸びる口縁 上方へ尖る。 指おさえ後外面底部ナテ 内面不明。	計部に至る。 端部	が 淡黄褐色	密	良	
120	土師器	8.05 1.45	底部から口縁端部まで糸びる。端部は上方へ尖りき 外面底部ナデ、口縁部ョ	みに丸く終わる		密	良	
121	土師器	8.15 1.3	底部から丸く屈曲し、糸 びる口縁部に至る。端部は 底部ナデ、口縁部ヨコナ	上方へ尖る。	伸 淡灰褐色	やや粗	良	
122	土師器	8.2 1.25	上方へわずかに突出する 上がり、上外方〜斜上方へ 縁部に至る。端部は丸く終 外面底部ヘラケズリ後ナ デ。内面底部ナデ、口縁部	、直線的に伸びる なわる。 デ、口縁部ョコ	口 色 内面淡黄褐	密	良好	
123 九	土師器 小皿	8.35 1.5	丸みのある底部から口縁 へ内湾して伸びる。端部は 丸く終わる。 指おさえ後外面底部へラ 縁部ヨコナデ、内面底部強 コナデ。	:上方へ尖りぎみ ケズリ後ナデ、		密	良	
124 九	土師器小皿	8.4 1.8	丸みのある底部から丸く 方へ内湾して伸びる口縁部 りぎみに丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ョ ョコナデ。	『に至る。端部は	尖 淡黄褐色	密	良	·
125	土師器小皿	8.15 1.15	水平に近い底部から丸く 方へ内湾して伸びる口縁部 りぎみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナ	に至る。端部は		密	良	
126	土師器 小皿	8.2 1.1	125に似るが器肉きわめ 外面底部ヘラケズリの後 ナデ。内面底部ナデ、口縁	ナデ、口縁部ヨ	淡橙色コ	やや粗	良	***************************************
127	土師器 小皿	8.7 0.8	水平に近い底部から外上 る口縁部に至る。端部は尖 指おさえの後底部ナデ、	る。		密	良	
128	土師器 小皿	7.2	底部から丸く立ち上がり みに伸びる口縁部に至る。 で外傾する丸みのある面を 外面底部ナデ、口縁部ョ ョコナデ。	端部は器肉を増 もつ。	し ~淡灰褐色 内面淡黄褐	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・	調整	等	の特	徴	色	調	胎	土	焼成	備	考
129	土師器 小皿	7.5 1.5	上方へ突出っ	りに伸びる	口縁部	『に至る	。端部	淡灰褐	色	密		良		
130	土師器 小皿	8.05 1.55		₱びる口縁 る面を持っ	部に至 つ。	る。端		外面淡色~淡。色	灰褐	やや料 2 四程 長石龍 れる	腹の	良	二次炒うける	
131	土師器 小皿	8.15 1.5	底部から丸く みに伸びる口縁 底部ナデ、口	部に至る。	端部			淡灰褐1	连	密 2 ㎜程 長石ま		良		
132	土師器 小皿	8.4 1.45	底部から丸く て伸びる口縁部 外面底部ナテナデ。	な至る。か	端部は	丸く終	わる。	灰褐色~褐色	~乳	密 2 mm前 長石 <i>を</i>				
133 九	土師器小皿	8.25 1.7	わずかに上方 上がり、斜上方 る。端部は丸く 指おさえ後外 縁部ョコナデ。 デ。	へ内湾し [*] 終わる。 面底部へ	て伸び	る口縁	部に至	淡橙色~橙色	~明	密 2 m程 長石あ		良		
134	土師器小皿	8.3 1.35	底部から丸く に伸びる口縁部 底部ナデ、口	に至る。如	端部(は			淡灰褐色	<u>6</u>	密 1 mm程 長石あ		·····································		
135	土師器	8.8 1.5	底部から丸く て伸びる口縁部 指おさえ後外 内面ョコナデ。	に至る。対	船部(は	丸く終	わる。	淡橙色~黄褐色	- 淡	やや粗	4.000	良		
136	土師器小皿	8.8	丸みのある底 方へ内湾して伸 く終わる。 外面底部ヘラ デ。内面底部ナ	びる口縁部 ケズリ後ナ	Bに至 - デ、	る。端	部は丸	淡灰褐色 淡黄褐色 淡橙色	2~	密 1 ㎜程 チャ石 長石あ。	١.	良	二次焼うける	成を
137	土師器小皿	8.9 1.4	わずわに上方 上がり、斜上方 る。端部は丸く 底部ナデ、口	へ直線的に 終わる。	伸び			淡黄褐色 明橙色		密 1 mm前 ² 長石粒i される		良好		
138	土師器 小皿	7.45 1.2	底部から丸く みに伸びる口縁 られる。 指おさえ後外 内面不明。	部に至る。	端部は	はつまん	み上げ	乳褐色		やや粗		良		

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
139	土師器 小皿	8.5 1.05	底部から丸く立ち上がり、外上方へ内湾ぎ みに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ られる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡灰褐色	やや粗 2 mm程度の 長石あり	良	
140	土師器 小皿	8.35 1.6	底部から丸く立ち上がり、外上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むように丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	灰褐色	密	良	
141	土師器 小皿	8.8 1.3	底部から丸く立ち上がり、外上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むように丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
142	土師器小皿	11.0 1.2	底部から丸く立ち上がり、外上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むように丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面強いョコナデ。	乳褐色~灰褐色	精良	良好	
143 九	土師器小皿	7.7 1.55	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方へ 内湾して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込 むように丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ココナデ。 内面底部ナデ、口縁部強いヨコナデ。	灰褐色	密	良	
144 九	土師器 小皿	7.75 1.35	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方へ 内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部はつま みあげられる。 外面底部ヘラケズリの後ナデ、口縁部ョコ ナデ。内面底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡灰褐色~ 淡黄褐色	密 雲母・石英 等の微粒を 多く含む	良	
145 九	土師器 小皿	8.0 1.4	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、上外方〜斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ョコナデ。	灰褐色	密	良好	燈心油痕あ り
146 九	土師器 小皿	7.95 1.6	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡黄褐 色 内面乳褐色	密	良好	
147 九	土師器 小皿	8.15 1.75	丸みのある底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部はつ まみ上げぎみに終わる。 指おさえ後外面底部弱いナデ、口縁部ヨコ ナデ。内面底部ナデ、口縁部強いヨコナデ。	外面淡灰褐 色 内面灰褐色	密 3 mm程度の チャートあ り	良好	
148	土師器 小皿	8.4 1.65	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方へ 内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部はつま み上げぎみに終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	精良	良	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調	整等	の特	徴	色 調	胎土	焼 成	備考
149 九	土師器 小皿	8.25 1.25	上方へわずかに突 上がり、上外方〜科 縁部に至る。端部は 指おさえ後外面底 縁部ヨコナデ、内面 デ。	上方へ直線 つまみ上に 部へラケス	泉的に作 げぎみに ズリ後ナ	申びる口 終わる。 ・デ、口	淡灰褐色~ 淡黄褐色	やや粗 2 mm程度の 赤色酸化料 散見される	<u>.</u>	
	I. AX SP	0.55								
150	土師器 小皿	8.55 1.6	水平に近い底部か 方へ内湾して伸びる き込むように丸く終 指おさえ後外面底 ナデ。内面底部ナデ、	口縁部に3 わる。 部弱いナラ	Eる。端 デ、口縁	部は巻 部ョコ	乳褐色~灰 褐色	やや粗	良好 	燈心油痕あり
151	土師器小皿	7.7 1.6	外上方へ直線的に4 上外方へ直線的に伸 は外傾する丸みのあ 底部ナデ、口縁部	びる口縁部 る面を持つ	Bに至る o。		淡灰褐色	密	良	
152	土師器 小皿	7.7 1.6	形態 151 に似るが端 底部ナデ、口縁部:		終わる。		淡灰褐色~ 淡黄褐色	やや粗 1~2 mmの 長石散見さ れる	良	
九										
153	土師器 小皿	8.2 1.6	丸みのある底部から 的に伸びる口縁部に3 終わる。 底部ナデ、口縁部引	Eる。端部	は尖り		淡灰褐色	密	良好	燈心油痕あ り
154 九	土師器小皿	8.4 1.25	上方へわずかに突出 上方〜斜上方へ直線的 端部は丸く終わる。 指おさえ後外面底部 ナデ。内面底部ナデ、	りに伸びる Bナデ、ロ	□縁部/ 縁部強	c至る。 いョコ	淡灰褐色	密	良好	燈心油痕あ り
<i>)</i> L										
155	土師器 小皿	8.9 1.4	水平に近い底部から 的に伸びる口縁部に至 て丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ミ	ぎる。 端部			乳褐色	精良	良	
156	土師器小皿	9.4 1.4	外上方へ直線的に伸 斜上方へ直線的に伸び は器内を滅じて丸く終 指おさえ後外面底部 ナデ、内面強いヨコナ	ヾる口縁部 ぐわる。 ぶ弱いナデ	に至る。	端部	灰褐色	やや粗	良	燈心油痕あり
157	土師器	10.4	水平な底部から屈曲 伸びる口縁部に至る。 ある面を持つ。 底部ナデ、口縁部ョ	端部は内			淡灰褐色~ 淡黄褐色	密 1 ㎜前後の チャートあ り	良	
158	土師器		水平な底部から稜を 又した後斜上方へ直線 る。端部は外傾する面 れる。 底部ナデ、口縁部ョ	的に伸び を持ち、	る口縁部	邪に至	淡灰褐色~ 淡黄褐色	密	良	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
159	土師器 小皿	8.1 1.1	底部から稜を持って屈折し、斜上方へ直線 的に伸びる口縁部に至る。端部は158に似る。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色~ 淡黄褐色	密	良	
160	土師器 小皿	8.45 1.2	形態159に似る。 外面底部ナデ、口縁部強いヨコナデ。内面 強いヨコナデ。	淡黄褐色	密	良好	
161	土師器 小皿	7.5 0.95	水平に近い底部から鋭い稜を持って屈折し、 外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部 は器肉を滅じて丸く終わる。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ後ナデ、口 縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナ デ。	外面淡黄褐 色~淡灰褐 色 内面淡灰褐	やや粗	良好	
162	土師器 小皿	8.0 0.95	161に似るが稜は鈍い。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	灰褐色	密	良	
163	土師器 小皿	8.4	底部から稜を持って屈折し、短く外反した 後外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端 部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡灰褐色	密	良	
164	土師器 小皿	8.4 1.0	底部から屈折し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げぎみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色~ 淡黄褐色	密	良	
165	土師器 小皿	9.0 1.4	底部から稜を持って屈折し、斜上方へ外反 ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は器肉を減 じて丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部強いヨコナデ。内面 強いヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良	燈心油痕あ り
166	土師器 小皿	8.95 1.35	底部から稜を持って屈折し、斜上方へ内湾 ぎみに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上 げぎみに丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面強い ヨコナデ。	乳褐色	精良	良	
167	土師器 小皿	9.1 1.15	器肉のきわめて薄い底部から器肉を増して 屈折し、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に 至る。端部は器肉を減じて丸く終わる。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ後ナデ、口 縁部強いヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨ コナデ。	暗橙色 内外口縁部 褐色(煤付 着か)	やや粗	良	
168	土師器 小皿	8.1 1.25	上方へわずかに突出する底部から稜を持って屈折し、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ョコナデ。	乳灰色	やや粗 1 ma程度の チャート・ 石英	良	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
169	土師器 小皿	8.4 1.2	底部から稜を持って屈折し、斜上方へ内湾 ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わ る。 外面底部ナデ、口縁部強いヨコナデ。内面 強いヨコナデ。	淡橙色	精良	良好	
170	土師器 小皿	8.5 1.1	水平に近い底部から稜を持って斜上方へ内 湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸〈終 わる。 底部ナデ、□縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良	
171	土師器 小皿	8.7 1.2	水平に近い底部から鈍い稜を持って屈折し 上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部 は尖って終わる。 外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナ デ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	
172 九	土師器 小皿	10.15 1.25	水平な底部から稜を持って屈折し、短く外 反した後外上方へ内湾して伸びる口縁部に至 る。端部はつまみ上げて終わる。 底部ナデ、口縁部強いヨコナデ。	外面淡黄褐 色 内面乳褐色	精良	良好	
173	土師器 中皿	11.0 2.5	水平な底部から丸く立ち上がり、上外方へ 直線的に伸びる長い口縁部に至る。端部は尖 りぎみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡黄褐色〜 灰褐色 器肉灰褐色 の部分あり	やや粗 2 mm前後の チャート・ 石英あり	良好	
174	土師器 中皿	12.1	形態173に似るが端部は内湾ぎみとなり、 尖って終わる。 強いヨコナデ。	淡灰褐色~ 淡黄褐色	密	良好	
175	土師器 中皿	12.2 3.6	水平な底部から丸く屈曲し、上外方へ内湾 して伸びた後外反する長い口縁部に至る。端 部は内湾ぎみとなり、尖って終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部強いョコ ナデ。内面底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡黄褐色 器肉淡灰色	密	良好	
176	土師器 中皿	13.0 3.1	形態・調整175に似る。	外面灰褐色 ~淡黄褐色 内面乳褐色	密	良好	
177 —O	土師器 中皿	13.0 3.1	形態175に似るが端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色 器肉灰褐色	密	良好	
178 —O	上師器 中皿	12.9 2.65	丸みのある底部から稜を持って屈折し、短く外反した後上方へ内湾する短い口縁部に至る。端部は上方へつまみ上げられる。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ョコナデ。内面底部ナデ、口縁部ョコナデ。	乳褐色~灰 褐色	やや粗 2 mm前後の 石英・長石 散見される		

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
179	土師器 中皿	12,3 1.95	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的 に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部強いョコナデ。内面ョコナデ。	乳褐色	精良	良	
180 —O	土師器 中皿	13.35 2.0	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方へ 内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は尖り ぎみに終わる。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ後ナデ、口 縁部ョコナデ。内面底部ナデ、口縁部ョコナ デ。	灰褐色~淡 黄褐色~淡 橙色	密 5 m程度の 赤色酸化粒 多く含む		
181	土師器 中皿	13.4 2.4	180に似る形態。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	灰褐色 器肉暗灰色	精良	良好	外底面に煤 付着
-0							
182	土師器 中皿	14.0 2.65	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾ぎ みに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ られ、外傾する面を持つ。 外面強いヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡橙色	密 赤色酸化粒 多く含む	良	
183	土師器 中皿	15.85 —	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は、 182に似る。 ョコナデ。	乳褐色	**	良	
184	土師器中皿	10.7 1.85	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部はつまみ出される。 外面底部ナデ。口縁部ョコナデ。内面ョコナデ。	乳褐色	密	良	
185	土師器中皿	12.4 2.6	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口線部に至る。端部は内湾ぎみとなり、上方へ尖りぎみに終わる。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコナデ。	乳褐色~灰 褐色	やや粗 1 mm前後の 赤色酸化粒 石英等あり	良	
186	土師器中皿	12.5 2.4	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は尖 って終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色~ 暗灰褐色	密	良	
187	土師器 中皿	13.3	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾ぎ みに伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ 出される。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	外面淡橙色 内面・器肉 暗灰褐色~ 灰褐色	やや粗 1 mm前後の 石英・長石 多く含む	良	内面に煤付着
188	土師器 中皿	12.8 1.95	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 ョコナデ。	灰褐色	密	良	外面口縁部に煤付着

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴 色調 胎 土 焼	成 備 考
189	土師器 中皿	12.9 2.1	上方へごくわずかに突出する底部から丸く 立ち上がり、188に似る口縁部に至る。 外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ョコナデ。 内面底部ナデ、口縁部ョコナデ。	
190	瓦器 椀	14.05	体部との境に稜を持ち、器肉を減じて上外 方へ直線的に伸びる口縁部。端部は内に凹線 状の凹みを持ち、丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ョコナデ。ヘラミガキは 密な横方向。	
191	瓦器	13.8	体部との境に稜を持ち、器肉を減じて斜上 方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わ る。 体部ナデ、口縁部ョコナデ。ヘラミガキは 上位密な横方向・下位密な円弧状。	7
192	瓦器	15.45	体部から口縁部まで連続して斜上方へ内湾 ぎみに伸びる。端部は上方へ尖る。 調整191と同様。 良好	F
193	瓦器椀	16.6	上外方へ内湾する体部から器肉をわずかに 黒灰色 滅じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は 外へ尖りぎみに終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ、ヘラミガキは 密な横方向。	
194	瓦器 椀	高台径6.35 高台高 0.6	水平に近い底部から除々に立ち上がる。高 台は断面正方形で垂直に付く。 体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキ は見込みに密な一方向。	
195 —O	瓦器 椀	14.35 5.1 高台径3.65 高台高0.45	水平な底部から斜上方へ内湾する深めの体 部。口縁部は先太となって丸く終わる。高台 は断面逆台形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョ コナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、 見込みは単位幅狭く粗い格子状。	
196	瓦器 椀	14.8 4.55 高台径 3.5 高台高 0.5	形態195に似るがやや浅く、底部中央を欠 損する。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョ コナデ。ヘラミガキは見込みにのみ、粗い平 行線状。	
197	瓦器 椀	14.35 — 高台径 — 高台高 —	斜上方へ内湾する深めの体部。口縁部は直 線的に伸び、内に凹線状の凹みが一周する。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョ コナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方 向、見込み単位幅狭く粗い平行線状。	
198	瓦器 椀	15.0	外上方へ内湾ぎみに伸びる体部から、角度 を変えて上外方へ直線的に伸びる口縁部に至 る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部密な横方向、見込み単位 幅狭く沈線状の粗い平行線状。	外面口縁部 に木葉の圧 痕あり 土器集積

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
199 —O	瓦器 椀	15.2 4.35 高台径 4.7 高台高0.35	水平な底部から一旦張り、斜上方へ内湾する。口縁部は直線的に伸び、先太となって丸く終わる。高台は断面方向で垂直に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、 見込み粗く不揃いな平行線状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	土器集積
200 >	瓦器 椀	15.0 4.6 高台径4.55 高台高 0.4	形態195に似るがやや深く、口縁部は2段に外反する。高台は断面逆三角形で低く「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向、見込みやや粗い平行線状。		やや粗	良好	
201	瓦器椀	13.6 3.7 高台径 4.1 高台高 0.3	水平な底部から一旦張り、斜上方へ直線的 に伸びる。口縁部は外反ぎみで、端部は丸く 終わる。高台は断面逆三角形で低い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョ コナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、 見込みは単位幅狭くやや粗い平行線状。	灰色~灰白 色 器肉灰白色	密	良	炭素吸着不 良
202	瓦器	14.6 3.9 高台径 3.9 高台高0.25	形態 201 に似るが口縁部は直線的に伸び、端部は外へ尖りぎみとなる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向、見込みは単位幅狭く粗い平行線状。	灰色~灰白 色 器肉灰白色	粗	良	炭素吸着不 良
203	瓦器	14.6 4.3 高台径 3.6 高台高 0.2	水平な底部から一旦張り、外上方へ直線的 に伸びる。口縁部は器肉を滅じて伸び、端部 丸く終わる。高台は断面逆三角形で低い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ョ コナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、 見込みやや粗い平行線状。	灰色~灰白 色 器肉灰白色	密	良	炭素吸着不 良
204	瓦器 椀	14.15 3.7 高台径3.85 高台高0.25	水平な底部から一旦張った後外上方へ直線 的に伸びる。口縁部は上外方へ短く外反する。 高台は断面逆三角形で低く不揃い。 指おさえ後ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナ デ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向、 見込み粗く不揃いな平行線状。	黒灰色~白 灰色 器肉白灰色	やや粗	良	
205	瓦器 椀	14.9 3.95 高台径 3.7 高台高 0.2	形態 204 に似るが大型で、口縁部は長く外 反する。高台はきわめて低く不揃い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部、高台周囲ョ コナデ。ヘラミガキは内面口縁部から見込み へ向って左廻りの粗い渦巻状。	黒灰色 外面体部の 一部・器肉 白灰色	やや粗	良好	光沢あり 内面に油痕 あり
206	瓦器 椀	12.6	外上方へ内湾して伸びる体部〜口縁部。端 部は上方へ丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ。口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向、見込みに単 位幅の狭い平行線状のものが認められる。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
207	瓦器 椀	12.2	一旦横に張った後斜上方へ内湾して伸びる 体部から器肉を滅じて直線的に伸びる口縁部 に至る。端部は先大となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部に粗い横方向。	黒灰色~白 灰色 器肉白灰色	やや粗	良	
208	瓦器 椀	13.4	外上方へ直線的に伸びる体部から角度を変えて上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。 端部は外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面体部にやや粗い円弧状。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
209	瓦器 椀	13.3	斜上方へ内湾して伸びる体部〜口縁部。口縁端部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面体部にやや粗い横方向。	白灰色	密	良	炭素吸着不 良
210	瓦器椀	13.9	一旦横に張った後斜上方へ直線的に伸びる 体部から器肉を滅じて屈曲し、上方へ内湾す る口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面体部に粗い円孤状(渦巻状?)。	色 器肉灰白色		良	炭素吸着やや不良
211	瓦器梯	13.9	形態210に似るがやや深い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ うミガキは内面体部に横方向のものがわずか に認められる。		やや粗 1 mm程度の 砂粒わずか に含む	良	炭素吸着不良
212	瓦器 椀	13.8	高台際から口縁端部まで内湾して立ち上がる。端部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台際ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込みに単位幅の狭いものが1条認められる。	器肉白灰色	やや粗 2 mm前後の 砂粒わずか に含む	良好	
213	瓦器 椀	13.9	形態 212 に似るが、口縁部は 2 段に外反し端部丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向、見込みに単位幅の狭いものが 1 条認められる。	黒灰色 器肉白灰色	粗	良好	
214	瓦器	15.2	斜上方へ内湾して伸びる体部〜口縁部。端部は外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向。	黒灰色 器肉灰白色	粗 長石粒多量 に含む	良好	土器集積
215	瓦器 椀	14.9	斜上方へ内湾して伸びる体部からわずかに 外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黒色~灰 白色 器肉灰白色	やや粗	良	炭素吸着や や不良
216	瓦器椀	15.5	斜上方へ内湾して伸びる体部から稜を持って短く外反する口縁部に至る。端部は外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黒色 器肉白灰色	密	良	
217	瓦器	15.2	斜上方へ直線的に伸びる体部~□縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、□縁部ョコナデ。へラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黒色 器肉灰色	やや粗 長石粒多く 含む	良好	
218	瓦器 椀	15.55	斜上方へ内湾して伸びる体部〜口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黒色 器肉乳白色	密	良	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形	態	調	整	等	の	特	徴		色	調	胎	土	焼 成	備	考
219	瓦器 椀	15.4	に伸び	る口線	(体部ナ	≦る。 - デ 、	端部 口縁	は丸 部ョ	く終 コナ	わる。	.	黒灰色器肉灰		やや判	1	良好		
220	瓦器	16.0	部は丸	く終れ さえ後	体部ナ	・デ、	口縁	部ョ	コナ	デ。イ	~	灰黒色器肉灰	_	やや料	1	良好		
221	瓦器 椀	11.8	部は丸	く終れ さえ後	体部ナ	デ、	□縁;	部ョ	コナ	デ。^		黒灰色 白色 器肉乳		やや粗石英粒含む		良	炭素吸良	養不
222	瓦器 椀	12.5	へわず; 終わる。	かに外 。 さえ後	:体部ナ	口縁 デ、	部に	至る。 部ョ	。端	部丸く デ。^	1	外面上 内面黑 外面下 器肉灰	灰色 半・	やや粗	l	良		
223	瓦器 椀	12.5	外反する	る口縁 さえ後 キは内	体部ナ	る。! デ、	端部(口縁音	ま丸 邪ヨ:	く終; コナ	わる。 デ。ヘ		灰白色		粗 3 mm以 石英粒 含む		良	炭素付 良	着不
224	瓦器 椀	12.65	た後器は	肉を減 邪は丸 さえ後	く終わ 体部ナ	線的 る。 デ、!	に伸て口縁部	びる ボヨ:	コ緑: コナ:	部に至	P	外面・ 下半黒 内面上 器肉灰	灰色 半・	やや粗		良好		
225	瓦器	13.8	に外反す り丸く約	する口 をわる。 さえ後 トは内	。 体部ナ	至る。 デ、「	, 口 口 縁 音	縁部↓	は先っ コナラ	太とな デ。へ	:	外面黑月 ~灰白1 个灰灰月 ~灰灰月 ~灰色	色 黒色	やや粗石英粒		良好		
226	瓦器 椀	13.8		え後	似るが 体部ナ 面体部	デ、ロ]緑音				夕包	灰白色 外面に 列を呈っ 部分あり	する	密		良好	炭素吸良	着不
227	瓦器 椀	13.8	口縁部に	至る。 え後(本部ナ	は丸く デ、[く終れ □縁部)る。 3ヨニ			器	県灰色 器肉淡原 色	灭褐	やや粗		良好		
228	瓦器椀	14.0	斜上方 外反する みに終れ き り に り に り に り に り に り に り に り た り た り た	口縁 る。 え後(は内)	本部ナラ	る。 蛸 デ、 ロ	端部は 1縁部	:外へ	、つま ナテ	。 、 、 へ	器外内	本面体部 素肉灰白 本面口線 可面灰具	9色 桑部	やや粗		良好		

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼 成	備考
229	瓦器 椀	14.2	外上方へ内湾ぎみに伸びる体部から器肉を 減じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は 丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部単位幅狭く粗い横方向。	黑灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	内面に油痕あり
230	瓦器 椀	14.3	斜上方へ内湾して伸びる体部から器肉を減じて外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へラミガキは内面体部に横方向の痕跡あり。	黒灰色 器肉淡灰褐 色	粗	良	表皮剥離
231	瓦器 椀	14.95	斜上方へ内湾して伸びる体部から短く外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向、見込みに単位幅狭く粗い平行線状。	灰黒色 器肉灰白色	粗 チャート・ 石英の小粒 多く含む	良	
232	瓦器 椀	15.0 —	斜上方へ内湾して伸びる体部からわずかに 外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部下半に密な横方向。	外面黒灰色 内面灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良	表皮剥離
233	瓦器 椀	16.2	斜上方へ内湾して伸びる体部から強く外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面体部やや粗い横方向、見込み は単位幅狭い平行線状。	外面口縁部 内面黒灰色 外面体部・ 器肉白灰色	やや粗	良好	
234	瓦器 椀	16.95	斜上方へ内湾して伸びる体部から器肉を減 じて外反ぎみに伸びる□縁部に至る。端部は 上方へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、□縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面体部に横方向の痕跡。	黒灰色 器肉乳灰色	密	良	表皮剥離
235	瓦器 椀	16.2 —	外上方へ内湾して伸びる体部から外反して 伸びる口縁部に至る。端部は先太となり丸く 終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向、見込みには 粗い平行線状。	白灰色 内面の一部 のみ黒灰色	やや粗	良好	
236	瓦器 椀	12.55 —	外上方へ直線的に伸びる体部〜口縁部。端 部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部上位粗・下位密な横方向。	外面口縁部・ 内面黒灰色 外面体部・ 器肉乳白色	チャート・ 石英多く含	良	表皮剥離• 外面炭素吸 着不良
237	瓦器 椀	12.9	斜上方へ直線的に伸びる体部~口縁部。端 部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面体部粗く連続しない横方向。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
238	瓦器 椀	13.0	外上方へ伸びる体部から2段に強く外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。ヘ ラミガキは内面体部粗い横方向。	灰色~灰白 色 器肉灰白色	やや粗	良	炭素吸着不 良

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等	の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
239	瓦器	13.6	斜上方へ直線的に伸びる体 わずかに外反する口縁部に至 となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ(外面 デか?)口縁部ヨコナデ。へ 体部横方向に1条のみ認めら	る。端部は先太 ヘラケズリ後ナ ラミガキは内面	外面口縁部• 内面黒灰色 外面体部• 器肉白灰色	粗	良	外面炭素吸 着不良
240	瓦器 椀	14.0	斜上方へ直線的に伸びる体 器肉を減じて直線的に伸びる 端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁 ラミガキは内面体部やや粗い	口縁部に至る。 部ヨコナデ。へ	黒灰色~灰 白色 器肉灰白色	粗	良好	
241	瓦器 椀	13.9	斜上方へ内湾ぎみに伸びる 的に伸びる口縁部に至る。端 指おさえ後体部ナデ、口縁 ラミガキは内面体部やや粗い 見込みから続くものか単位幅 のものが口縁部付近まで認め	部は丸く終わる。 部ョコナデ。へ 横方向〜円孤状。 の狭い平行線状	黒灰色 器肉灰色	やや粗	良好	
242	瓦器 椀	14.2	斜上方へ直線的に伸びる体 を減じて□緑部に至る。端部 く終わる。 指おさえ後体部ナデ、□縁 ラミガキは内面底部粗い横方	は先太となり丸 部ヨコナデ。へ	黒灰色~灰 白色 器肉灰白色	粗	良好	
243	瓦器 椀	14.2	斜上方へ直線的に伸びる体部は尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁ラミガキは内面体部やや粗く 向。見込みから続くものか単のものが口縁部付近まで認め	部ョコナデ。へ 連続しない横方 位幅の狭い縦位	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
244	瓦器 椀	14.0	斜上方へ直線的に伸びる体 部は先太となり、外へ尖りぎ 指おさえ後体部ナデ、口縁 ラミガキは内面体部やや粗い	みに終わる。 部ヨコナデ。へ	黒灰色 器肉黄灰色	やや粗	良好	
245	瓦器 椀	14.85	斜上方へ直線的に伸びる体がに外反する口縁部に至る。 先大となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁 ラミガキは内面体部粗い横方の	端部はわずかに 部ヨコナデ。へ	外面黒灰色 内面灰黒色 一灰白色 器肉灰白色	やや粗	良	
246	瓦器 椀	14.9	外上方へ直線的に伸びる体 に伸びる口縁部に至る。端部 指おさえ後体部ナデ、口縁 ラミガキは内面体部やや粗い	丸く終わる。 邹ヨコナデ。へ	灰黒色 器肉灰白色	粗 2 m以下の 石英・赤色 酸化粒等含 む	良	
247	瓦器 椀	14.8	斜上方へ直線的に伸びる体管 じて直線的に伸びる口縁部に 太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁管 ラミガキは内面体部粗く連続し	至る。端部は先 部ヨコナデ。へ	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
248	瓦器 椀	15.3	形態 247 に似るが端部は尖り 指おさえ後体部ナデ、口縁き ラミガキは内面体部粗い横方向	邪ヨコナデ。ヘ	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
249	瓦器 椀	16.95	斜上方へ内湾ぎみに伸びる体部から器肉を減じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は 先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部やや粗い横方向。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
250	瓦器	16.0	斜上方へ直線的に伸びる体部から器肉を減 じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸 く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部やや粗い横方向。	灰黒色~灰 色 器肉灰白色	粗 赤色酸化粒 認められる	良	
251	瓦器	高台径4.25 高台高 0.4	水平な底部から斜上方へ直線的に伸びる体部に至る。高台は断面半円形で低い。 指おさえ後外面体部ナデ、高台周囲ヨコナデ、内面底部ハケナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込みは単位幅狭く粗いジグザグ状。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良	
252	瓦器 椀	高台径 4.9 高台高 0.4	底部から除々に内湾して立ち上がる。高台 は断面半円形できわめて低い。 指おさえ後体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。 内面のヘラミガキは体部粗い横方向、見込み 単位幅狭く粗いジグザグ状。	灰白色	粗 石英・長石 粒含む	良	炭素吸着不 良
253	瓦器	高台径4.45 高台高 0.3	形態 252 に似るが高台は断面逆三角形で垂直に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは見込みに単位幅の狭いジグザグ状。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
254	瓦器 椀	高台径4.35 高台高 0.3	水平な底部から一旦横へ張り出した後、斜上方へ直線的に伸びる。高台は断面逆台形できわめて低く、ゆがむ。 指おさえ後ナデ、高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込み粗く不揃いな平行線状。	外面上半・ 内面灰黒色 外面下半灰 色 器肉灰白色	粗	良好	
255	瓦器	高台径5.05高台高0.55	底部から外上方へ直線的に伸びる。高台は 断面逆三角形で「ハ」の字形に付く。 高台周囲ヨコナデ、内面ナデ後見込みに不 揃いな平行線状のヘラミガキ。	灰黒色 器肉乳灰色 ~白灰色	やや粗	良	表皮剥離
256	瓦器	高台径5.05高台高0.25	水平な底部から外上方へ内湾して伸びる。 高台は断面台形できわめて低平。 指おさえ後ナデ。高台周囲ヨコナデ。ヘラ ミガキは見込みに単位幅の狭い平行線状。	外面灰黑色 内面灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
257	瓦器	— 高台径4.65 高台高 0.3	やや深みのある底部から外上方へ除々に内 湾して伸びる。高台は断面逆台形で垂直に付 く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラ ミガキは内面体部粗い横方向、見込みは粗い 平行線状。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
258	瓦器	— 高台径 3.4 高台高 0.3	水平に近い底部。高台は断面半円形で低い。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラ ミガキは見込みに平行線状。	灰黒色~灰 色 器肉灰白色	やや粗	良	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
259	瓦器 椀	高台径 4.0高台高0.25	水平に近い底部。高台はきわめて低平。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面粗い渦巻状。	灰黒色 器肉白灰色	やや粗	良好	
260 — <u>—</u>	瓦器 小皿	8.35 1.7	やや深みのある底部から稜を持って上外方 へ伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸 く終わる。 指おさえ後ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミ ガキは見込みに密な格子状。		密	良好	
261	瓦器 小皿	8.8	底部から稜を持って上外方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後ナデ、口縁部ョコナデ。ヘラミガキは内面口縁部に粗い平行線状のものが認められる。	外面・器肉 灰白色 内面灰色	やや粗	良好	炭素吸着不 良
262	瓦器 小皿	8.55 	形態 261 に似る。 指おさえ後ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部から見込みにかけて単位幅狭く密な横方向+平行線状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
263 — <u>—</u>	瓦器 小皿	1.55	水平な底部から丸く立ち上がり、上外方へ 直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎ みに丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは見込みに密な格子状。		やや粗	良好	
264	瓦器 小皿	7.95 1.05	水平な底部から稜を持って上外方へ直線的 に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸 く終わる。 指おさえ後ナデ、口縁部ヨコナデ。		粗 長石粒多く 含む	良	表皮剥離
265	瓦器 小皿	8.7 1.15	水平に近い底部から稜を持って上外方へ外 反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつ まみ出される。 指おさえ後ナデ、口縁部ヨコナデ。		粗	良好	
266 — <u>—</u>	瓦器 小皿	8.3 1.35	やや深みのある底部から鈍い稜を持って斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は内へ巻き込むように終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へラミガキは見込みに粗いジグザグ状。		やや粗	良好	
267	瓦器 小皿	8.2 1.2	形態 266 に似るが口縁部は強く外反し、端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へラミガキは内面口縁部に粗い横方向のもの数条認められる。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
268	瓦器 小皿	8.8 1.5	形態 266 に似るが口縁部は直線的に伸び、 端部丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面口縁部に粗い横方向のもの数 条認められる。	黒灰色 器肉灰白色	粗	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高		色 調	胎土	焼成	備考
269	瓦器 小皿	7.6 1.5		器肉灰白色	やや粗	良好	
270	瓦器小皿	7.8 1.5	底部から稜を持ち、外反して伸びる口縁部に至る。端部は先太となり、内へ巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へラミガキは見込みに粗い横方向。	器肉乳灰色	やや粗	良好	
271	瓦器小皿	8.2	形態 270 に似るが器肉薄い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガギは見込みに粗い横方向。	灰白色	やや粗 長石粒多く 含む	良好	炭素吸着不良
272	瓦器 小皿	8.2	丸みのある底部から稜を持って斜上方へ外 反して伸びる口縁部に至る。端部は器肉を減 じて丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ョコナデ。ヘラミガキは 外面底部・内面口縁部にやや粗い横方向。		やや粗	良好	
273	瓦器 小皿	8.2 2.05	半球形を呈する深い底部から稜を持って斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は先細となり内に尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へラミガキは内面口縁部に横方向のもの認みられる。		やや粗	良好	土器集積
274	瓦器 小皿	10.2	丸みのある底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する丸みのある面を持つ。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは見込みにわずかに認められる。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
275	須恵器 甕	27.6	体部から斜上方へ外反する口縁部。口縁部 上面・端部外面は凹面となり、上端はつまみ 上げられる。 回転ナデ。	外面黒灰色 内面・器肉 灰色	粗 長石粒多く 含む	良好	内面口縁部 上端に灰か ぶり
276	須恵器	28.0	上外方へ直線的に伸びた後外反ぎみとなる 口縁部。端部は先細となり、外傾する面を持 つ。 回転ナデ。	灰白色	密	良好	
277	須恵器 小型杯	6.0 1.8	水平な底部から上外方へ直線的に伸びた後 斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く 終わる。 外面底部回転糸切り、他は回転ナデ。	淡青灰色	やや粗 石英・長石 粒多く含む	良好	外面口縁部に自然釉
278	白磁椀	高台径 7.1 高台高 1.4	上面が水平で下面が突出する底部から、斜上方へ内湾して立ち上がる。内面に沈線が一周する。高台は断面逆台形で高く、垂直に付く。 外面・高台内にカンナ削り。	釉・白色薄 く光沢なし	白灰色密	良好	高台脇から高台内に釉なたれ

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態•	調整等	の特徴	色調	胎土	焼成	備考
279	士師器 羽釜	22.2 — 鍔径 32.75	上内方へ直続 して直立する口 る。鍔はほぼか	1縁部に至る。 (平に付き、端 1縁部・鍔上下		わ 器肉淡赤褐 る。色	粗	良好	外面に煤付着
280	土師器 羽釜	26.0 一 鍔径 33.6	の字形に屈曲し 部は丸く終わる	、直立する口 。鍔は基部を I縁部・鍔上下		嵩 赤褐色	粗 2~3 mmチャート含む		口縁端部・ 外面体部に 煤付着
281	土師器 羽釜	27.1 — 鍔径 32.3	反する口縁部に る。鍔は基部を	至る。端部は ・残して欠損。 縁部強いヨコ	ナデ、鍔上下	つ 器肉淡赤褐 色	粗	良好	外面煤付着
282	土師器羽釜	27.7 一 鍔径 38.1	字形に屈曲して 水平に伸びる。	外反する口縁 縁部・鍔上下	部から「く」の 部に至る。鍔が ヨコナデ、頸部	ま 外面淡褐色 器肉赤褐色	粗		鍔以下に煤 付着
283	土師器 羽釜	28.0 — 鍔径 36.65	ある「く」の字 端部は丸く終わ	形に屈曲する る。鍔は接合 ケズリ後ナデ	部から欠損。 、頸部ナデ、[褐色、器肉 淡褐色	粗	良	体部に煤付着
284	土師器 羽釜	30.0 一 鍔径 39.25	字形に屈曲する みに終わる。鍔	口縁部に至る は下がりぎみ		福色 器肉淡褐色	粗	良好	鍔以下に煤 付着
285 — <u>-</u>	土師器 羽釜	26.5 — 鍔径 37.9	伸びる頸部から 端部は丸く終わ	短く屈曲する る。鍔は下が ケズリ後ナデ コナデ。内面	りぎみに付く。 、頸部ナデ、□	器肉淡赤褐 色	粗	良好	外面鍔以下・ 内面下半に 煤付着 土器集積
286	瓦質土器 羽釜	16.35 —— 鍔径 20.85	傾する面を持つ。 面は水平。	。鍔は断面三	頸部。端部は内 角形で短く、上 デ、口頸部ヨコ	:	粗	良好	鍔以下に煤付着
287	瓦質土器 羽釜	19.6 響径 26.3	斜内方へ内湾 く終わる。鍔は! ョコナデ。		質部。端部は丸 く。	外面黒灰色 内面・器肉 灰白色	やや粗	良好	鍔以下に煤 付着
288	瓦質土器 羽釜	19.8 — 鍔径 25.8	は内傾する面を打付き、端部は面を	寺つ。鍔は短。 を持つ。 ケズリ後ナデ、	口頸部•鍔上	内面・器肉 淡褐色~淡	密		鍔以下に煤 付着

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備考
289	土師器 小皿	6.7 1.4	水平な底部から鈍い稜を持った後器内を減じ、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は先太となり巻き込むように丸く終わる。指おさえ後外面底部ヘラケズリ・ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	0	密	良好	
290	土師器 小皿	7.95	底部から鈍い稜を持ち、斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げぎみとなり、外傾する丸みのある面を持つ。 ョコナデ。		密	良好	
291	土師器 小皿	8.8 1.0	底部から鈍い稜を持って一旦外反した後斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げられ、外に垂直な面を持つ。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。		密	良好	
292	土師器小皿	9.0 1.6	斜上方へ内湾して伸びる底部〜口縁部。端部は内へ巻き込み、外傾する丸みのある面を持つ。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
293	土師器 小皿	9.05 1.2	外上方へ内湾して伸びる底部〜口縁部。端 部は丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	淡灰褐色	やや粗	良好	
294	土師器	9.1 1.05	水平な底部から鈍い稜を持って一旦外反した後外上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。 端部はつまみ上げぎみに丸く終わる。 外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコナデ。	外面暗灰褐 色~淡灰褐 色 内面淡灰褐	密	良好	
295	土師器小皿	9.55 	斜上方へ内湾して伸びる底部〜口縁部。端部は先細となって丸く終わる。 ョコナデ。	乳褐色	やや粗	良好	
296	土師器小皿	9.35	外上方へ内湾する底部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	乳黄色	やや粗 赤色酸化粒 多く含む	良好	
297	土師器	9.6 1.4	底部から丸く立ち上がり、外反して外へ伸びる口縁部に至る。端部は内へ巻き込んで終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	淡橙色	精良	良好	
298	土師器	9.6 1.45	外上方へ直線的に伸びる底部からわずかに 外反する口縁部に至る。端部は巻き込むよう に丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面底部一定方向のナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡黄褐 色~乳褐色 内面淡橙色 ~乳褐色	やや粗	良好	燈心油痕あ り

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・	調	整等	· の	特	徴	色	調	胎	土	焼成	備	考
299 - <u>=</u>	瓦器小皿	9.3 1.7	外上方へ内 持ち、斜上方 る。端部は外 指おさえ後 ラミガキは内 粗く乱れたジ	へ外反き へつま 底部ナ 面口縁	ぎみに(み出され デ、ロ紀 都密な	申びる れる。 縁部 =	口縁	部に至		_	やや粗		良好		
300	瓦器 椀	13.1	斜上方へ内; に伸びる口縁 指おさえ後; ラミガキは外i な横方向、見 状のものが体	部に至る 体部ナラ 面口縁部 込みから	る。端語 デ、口網 部横方向 る続く。	部はす 豪部 = 句に、 ものか	くコ内粗い	わる。 デ。へ 体部密	外面黑 ~乳灰 内面黑 器肉白	色 灰色	密		良		
301	瓦器 椀	12.95 —	上外方へ内i に外反するロ! 丸く終わる。 指おさえ後f ラミガキは外i 内面やや粗い	縁部に3 本部ナラ 面体部単	Eる。 デ、口線 単位幅3	端部は 象部ョ	器肉コナ	を減じ デ。へ	黒灰色器肉白		やや粗		良好		
303	瓦器 椀	14.3	斜上方へ内 った後器肉を 至る。端部は 指おさえ後(ラミガキは外i い横方向。	咸じ、直 よりぎみ 本部ナラ	直線的に みに終す デ、口経	て伸ひ っる。 象部ョ	るロ	縁部にデ。へ	灰黒色色 器肉白		やや粗		良好		
303	瓦器 椀	14.8	上外方へ直 持ち、斜上方・ は器肉を減じ ⁻ 指おさえ後(ラミガキは外面 方向。	ヘ外反す て丸く約 本部ナラ	トる□総 をわる。 デ、□総	象部に 象部ョ	至る。コナ	。端部 デ。へ	灰黒色 白色 器肉乳		やや粗		良好		
304	瓦器 椀	15.5	斜上方へ内流 直線的に伸びる りぎみに終わる 指おさえ後位 ラミガキは外面 方向。	る口縁部 る。 本部ナデ	『に至る 『、口縁	。端 ^{8部ョ}	部は	外へ尖	黒灰色器肉乳		密		良好		
305	瓦器 椀	15.6	斜上方へ内を 部は丸く終わる 指おさえ後夕 内面体部左傾の へラミガキは夕 横方向、内面の	る。 面体部 ハケナ 面体部	3ナデ、 デ、ロ 3上半~	口縁 1縁部 -口縁	部ョ: ョコ:	コナデ。 ナデ、	黒灰色 器肉淡		やや粗		良好		
306	瓦器 椀	17.55	斜上方へ内を 部は器肉を減し 指おさえ後夕 内面体部右傾・ デ。ヘラミガギ	ごて丸く 面体部 縦のハ	終わる ナデ、 ケナテ	。 口縁 、口	部ョ: 縁部:	コナデ。 ヨコナ	黒灰色 器肉灰	白色	やや粗		良好		
307	瓦器 椀	13.0	上外方へ直線部は丸く終わる 指おさえ後位 ラミガキは外面 もの2~3条、	。 本部ナデ 「体部と	*、口緣 口緣部	部ョ	コナラ	ř. ^	乳白色		やや粗		良	炭素吸 良	着不
308	瓦器梯	13.0	上外方へ内湾端部は器肉を減 指おさえ後体 ラミガキは外面 もの2~3条、	じて丸 3部ナデ f体部と	く終わ 、口縁 口縁部	る。 部ョ の境	コナラ		黒灰色 器肉白/	灭色	やや粗		良好		

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
309	瓦器 椀	15.65	斜上方へ直線的に伸びる体部から器肉を減 じて口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
310	瓦器 椀	13.8	斜上方へ直線的に伸びる体部からわずかに 外反する口縁部に至る。端部は外へ尖りぎみ に終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向。	内面灰黒色 ~灰色	やや粗	良好	
311	瓦器 椀	14.2 —	斜上方へ直線的に伸びる体部からわずかに 外反する口縁部に至る。端部は先太となり、 丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
312	瓦器	 高台径 5.6 高台高0.55	水平な底部に断面丸みのある逆三角形の高台が垂直に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは見込みに単位幅広く密なジグザグ状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
313	瓦器 椀	— 高台径 5.2 高台高 0.6	水平な底部に断面逆三角形の高台が垂直に付く。 付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラ ミガキは見込みに単位幅広く粗い格子状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
314 —=	須恵器 ねり鉢	28.75	底部から丸みを持って立ち上がり、斜上方 へ直線的に伸びる体部から、内傾する口縁部 に至る。端部は尖りぎみに終わる。 回転ナデ。		粗	良好	重ね焼き痕 灰かぶり SK-2出土 の破片と接 合

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
315	土師器 小皿	9.4 1.8		橙色	やや粗	良好	
316 <u>=</u>	土師器小皿	9.4 1.5	外上方へ直線的に伸びる底部から鈍い稜を 持ち、外上方へ外反して伸びる口縁部に至る。 端部は器肉を減じて外へ尖る。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	外面灰褐色 内面暗赤褐 色	密	良好	外面に煤付着
317	土師器 小皿	9.65 1.4	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ直線的に伸びる口線部に至る。端部は器 肉を減じて外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。		密	良	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
318	土師器 中皿	13.8 2.45	外上方へ直線的に伸びる底部から鈍い稜を 持ち、上外方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至 る。端部は尖りぎみに終わる。 底部ナデ。口縁部ョコナデ。		やや粗 赤色酸化粒 多く含む	良	
319	土師器 中皿	16.4	外上方へ内湾ぎみに伸びる底部から鈍い稜を持ち、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する面を持つ。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコナデ。		密	良好	
320	瓦器	15.4	上外方へ直線的に伸びた後外上方へ外反する口縁部。端部は尖って終わる。 ヨコナデ。ヘラミガキは外面密な横方向。	乳白色	やや粗	良	炭素吸着不良
321	瓦器 椀	— 高台径 6.2 高台高 0.5	水平な底部から外上方へ直線的に伸び、体 部に至る。高台は断面逆三角形で垂直に付く。 外面ナデ後高台周囲ココナデ。内面ナデ後 見込み格子状のヘラミガキ、体部密な横へラ ミガキ。		やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器	種	(cm) 法量	口径 器高	形	態	•	調	整	等	の	特	徵	色	調	胎	土	焼成	備	考
322	土印	币器 皿		12.8	に伸び つまみ	るロ: 上げ さえ	縁部 ぎみ 後外	に至 に終	る。 わる	端部 。	は外	に面	直線的 を持ち コナデ。		曷色	やや料	1	良好		

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備	考
323	土師器 小皿	8.4	底部から外に鈍い稜を持った後、斜上方へ 内湾きみに伸びる口縁部に至る。端部は尖り ぎみに丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ、内面ヨコ ナデ。	乳橙色	密 赤色酸化粒 多く含む	良好		
324	土師器 小皿	8.15 1.3	底部から外に鈍い稜を持った後、斜上方へ わずかに外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端 部近くでは内湾ぎみに立ち上がり、端部は巻 き込むようにつまみ上げられる。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコ ナデ。	乳灰色	密	良好		
325	土師器 小皿	8.7	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的 に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する丸み のある面を持つ。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	淡黄褐色	やや粗	良好		

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼 成	備考
326	土師器 小皿	8.7 1.2	水平な底部から外に稜を持ち、斜上方へ 反する口縁部に至る。端部は器肉を減じて へつまみ出される。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ・ナデ、 縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコ デ。	外口	粗 石英・長石 粒多く含む	良好	
327	土師器 小皿	9.2	外上方へ直線的に伸びる底部から外に稜 持ち、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る 端部は器肉を減じ、尖って終わる。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ・ナデ、 縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5.	粗石英粒多く含む	良好	
328	土師器 小皿	9.1	外上方へ内湾する体部から外に稜を持ち 斜上方へわずかに外反する口縁部に至る。 部は巻き込むようにつまみ上げられる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ョコナテ 内面ョコナデ。	端	やや粗	良好	
329	土師器 小皿	9.3 1.4	外上方へ直線的に伸びる底部から丸く立上がり、斜上方へ直線的に伸びる底部から丸く立上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部にる。端部は尖りぎみに終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ョコナデ。		密	良好	
330	土師器 小皿	9.5 1.3	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は尖ぎみに丸、終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ョコナデ。		密 赤色酸化粒 含む		
331	土師器 中皿	14.85	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線 に伸びる口縁部に至る。端部は内傾する丸。 のある面を持つ。 口縁部2段のヨコナデ。		密	良	
332	土師器 中皿	15.2	斜上方へ内湾ぎみに伸びる体部から、器 を減じて上外方へ直線的に伸びる□縁部に る。端部は丸みのある面を持つ。 指おさえ後体部ナデ、□縁部ョコナデ。		密 石英・赤色 酸化粒含む	良好	
333	土師器 中皿	16.2 —	斜上方へ内湾ぎみに伸びる体部から、角度を変えて上外方へ直線的に伸びる口縁部にる。端部は丸く終わる。 指おさえ後外面体部ナデ、口縁部ヨコナテ内面ヨコナデ。	至 内面淡灰褐 色	密 赤色酸化粒 多く含む	良好	
334	瓦器小皿	10.95	底部から外に鈍い稜を持った後斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内に凹 状の段を持ち、外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ョコナデ。クラミガキは内面口縁部に粗い横方向。	線 器肉白灰色	やや粗	良好	
335	瓦器 椀	14.95	半球形の体部から外に稜を持った後器内? 減じ、上外方へ外反ぎみに伸びる口縁部に3 る。端部は外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ィ ラミガキは体部やや粗い円孤状、口縁部や4 粗い横方向。	至 器肉灰白色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態	• #	整	等	の	特	徴	色	調	胎	土	焼成	備	考
336	瓦器 椀	14.8	半球形の 口縁部に3 く終わる。 指おおおお ラミ横方向。	後体部	部は外 ナデ、	へつ:	まみ!	出さ	れ、丸 デ。へ	外面原	灰色	やや粗		良好		
337	瓦器 椀	15.3	上外方へ 持って場所 至る。おおだ ままがまし 方向。	『は上方~ .後体部:	直線 \尖り ナデ、	的に(ぎみ) 口縁:	申び、 て終	る口; わる。 コナ	縁部に , デ。へ	黒灰色 器肉白		やや粗		良好		
338	瓦器	16.95	上外方へ 部は外へよ 指おさえ ラミガキは 方向。	りぎみん 後体部っ	て終わ トデ、	る。 口縁部	ポョ:	コナ	デ。へ	黒灰色器肉白	-	粗		良好		
339	瓦器 椀	17.0 4.95 高台径 6.5 高台高 0.8	半球形の 外反する口 台は断面逆 指おさえ コナデ。へ 内面体部を	縁部に3 三角形で 後体部プ ラミガキ	Eる。 で垂直 - デ、 - は外	端部に に付く 口縁部 面にも	は外/ く。 ポ・雨 やや料	へ尖 高台 届い権	る。高 翻囲ョ 護方向、	黒灰色 灰色 器肉灰		やや粗		良好		
340	瓦器 椀	12.8	上外方へ を持って上 部は器おさえ ラミガキは 粗い横方向	外方へタ 減じ、タ 後体部ォ 外面体部	反す へ尖 ・デ、	る口線 りぎみ 口縁音	象部に 外に糸	こ至る をわる コナラ	る。端 る。 デ。へ	灰黒色器肉灰	•	密		良好		
341	瓦器 椀	14.35	斜上方へ ち、器かを る。端おさえ うミガキは	減じて内 先太とな 後体部ナ	湾し な丸 ・デ、	て伸て く終れ コ縁部	ドるロ うる。 ドヨニ	1 縁音 1 ナラ	『に至			粗		良好		
342	瓦器 椀	14.85	斜上方へ みに伸びる 指おさえ ラミガキは 方向。	口縁部に 後体部ナ	至る。 · デ、I	, 端部 コ縁部	B は 丈 B ヨ ニ	Lく終 Iナラ	やる。 ゔ。へ	黒灰色 器肉白		やや粗		良好		
343	瓦器	15.6	外上方へ わずかに外 部は丸くを 指おさえ ラミがくもの ら続く	反ぎみに わる。 後体部ナ 内面口縁	伸び、 デ、[:部粗]	る 口縞 コ縁部 い横方	部にいます。	 至る ナテ 見込	。端 。へ みか	灰黒色器肉灰		粗		良好		
344	瓦器 椀	15.5 —	斜上方へ 外反して伸 滅じ、外へ 指おさえ ラミガキは	びる口縁 つまみ出 後体部ナ	部に される デ、[至る。 る。 J縁部	端部	は器	肉を	口縁部 色 色 体部・ 灰白色		やや粗		良好		
345	瓦器 椀	高台径5.45 高台高 0.5	高台脇か 内湾して垂直 指でささえ かラミガキ向 粗い横方向	びる体部 に付く。 後体部ナ は外面粗	に至る デ、 い横フ	る。高 高台周 5向、	台は	断面コナ	逆三	外面、! 色~白! 内面、心 色~白! 器肉白!	灭色 炎灰 灭色	やや粗		良好		

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
346	瓦器 椀	高台径 6.7高台高 0.6	水平な底部から一旦張り出し、外上方へ内 湾して体部に至る。高台は断面逆台形で「ハ」 の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。 ヘラミガキは外面体部に密な横方向、見込み に密な乱方向。		やや粗	良好	
347	瓦器 椀	高台径 6.7 高台高0.85	外上方へ内湾する底部〜体部。高台は断面 逆台形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、高台周囲ョコナデ。 ヘラミガキは見込みに密な乱方向。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
348	瓦器	— 高台径 7.0 高台高0.75	水平な底部に断面U字形の高台が「ハ」の字 形に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ョコナデ。	黒灰色 器肉淡灰色	やや粗	良好	
349	瓦器 椀	— 高台径 5.8 高台高0.95	底部から外上方へ内湾して体部に至る。高台は断面逆台形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。見込みにヘラミガキの痕跡あり。	外面淡灰色 内面灰黒色 器肉白灰色	やや粗	良好	
350	須恵器 鉢	25.4	上外方へ直線的に伸びる体部から、器肉を 減じて外反する口縁部に至る。端部は外傾す る面を持つ。 回転ナデ。	外面口縁部 黒灰色 他は青灰色	やや粗	良好	重ね焼き痕あり

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備考
351	土師器 小皿	6.95	外上方へ直線的に伸びる底部から鈍い稜 持ち、斜上方へ内湾して伸びる口線部に至る端部は丸く終わる。 外面底部へラケズリ後ナデ、口縁部ヨコデ。内面ヨコナデ。	。器肉淡灰色	密	良好	
352	土師器 小皿	7.3 0.9	水平に近い底部から丸く立ち上がり、上ヶ方へ伸びる短い口縁部に至る。端部は丸く約わる。 指おさえ後外面底部ナデ。口縁部ヨコナデ内面ョコナデ。	冬 外面の一部 淡赤褐色	密	良好	
353	土師器 小皿	7.5 1.3	外上方へ内湾して伸びる底部から稜を持て立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口線部に至る。端部はつまみ上げぎみに終わる。指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ョコナテ内面ョコナデ。	暴 器肉淡灰色	密	良好	
354	土師器 小皿	8.6 1.3	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は外傾する丸をのある面を持つ。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨニナデ。	,	密	良好	外面口縁部 に煤付着

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
355	土師器 小皿	8.3	底部から鈍い稜を持ち、外上方へ直線的に 伸びる口縁部に至る。端部は上方へつまみ上 げぎみに終わる。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	乳褐色	密	良好	
356	土師器 小皿	8.5 1.05	水平な底部から稜を持って立ち上がり、外 上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部 は上方へつまみ上げぎみに終わる。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ・ナデ、口 縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナ デ。	乳褐色	密	良好	
357	土師器 小皿	10.35 1.1	水平な底部から稜を持って立ち上がり、斜 上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は 丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	外面乳褐色 内面淡黄色 ~明橙色	密	良好	
358	土師器 中皿	12.6 2.1	上方へ突出する底部から丸く立ち上がり、 稜を持った後斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁 部に至る。端部は上方へ立ち上がり、外傾す る面を持つ。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	外面暗灰色 内面淡灰褐 色	密	良好	
359	土師器 中皿	13.05	底部との境に稜を持ち、斜上方へ直線的に 伸びる口縁部に至る。端部は外傾する面を持 つ。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ・ナデ、口 縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナ デ。	外面淡灰色 内面乳褐色	密	良好	
360	瓦器 小皿	10.8 1.55	底部から丸く立ち上がり、外に稜を持った 後斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。 端部は器肉を滅じて外へ尖って終わる。 外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。内面ョコ ナデ。ヘラミガキは外面やや粗い斜方向、内 面密な横方向。	乳白色 一部灰黒色	密	良	炭素吸着不 良
361	瓦器 椀	14.6	斜上方へ内湾して伸びる体部~口縁部。端 部は直立ぎみとなり、丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面やや粗い横方向。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
362	瓦器	— 高台径 5.2 高台高 0.4	やや丸みのある底部。高台は断面逆三角形で垂直に付く。 外面ナデ、高台の周囲ヨコナデ。ヘラミガ キは見込みに渦巻状。	黒灰色 器肉灰白色	密	良好	

SP-2

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
363	土師器	7.9 1.7	丸みのある底部から斜上方へ直線的に伸びる口線部に至る。端部はつまみ上げぎみとなり、外傾する面を持つ。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳褐色	密	良好	
364	土師器 小皿	8.45 1.2	上方へわずかに突出する底部から斜上方へ 直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終 わる。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ・ナデ、口 縁部ョコナデ。内面底部ナデ、口縁部ョコナ デ。	乳褐色	密	良好	外面口縁部に煤付着
365	土師器 中皿	13.0	底部から丸く屈曲し、上外方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は内湾ぎみとなり尖って終わる。 2段のヨコナデ。	淡灰色 器肉黒灰色	密	良	

SP-4

遺物番号 図版番号	器	種	(cm) 法量	口径 器高	形	態	•	調	整	等	の	特	徴	色	調	胎	±	焼 成	備	考
366	土師器 中皿			13.9	外上 外反し みに丸 底部	て伸る	びる わる	口縁 。	部に	至る	。端		外方へ 尖りぎ		色~淡	やや料石英・酸化料	赤色	良好		

SP-5

遺物番号 図版番号	器和	锺	(cm) 法量	口径 器高	形	態	•	調	整	等	の	特	徴	色	調	胎	土	焼 成	備	考
367	瓦器 椀	Vicinity of the state of the st		14.9	反する	口縁ナデ	部に 、ロ	至る 縁部	。端 ョコ	部は ナデ	丸く 。へ	終わ ラミ	じて外 る。 ガキは	黒灰色器肉泡	_	密		良好		

第3調査区包含層

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形	態	調	整	等	の	特	徴	色	調	胎	土	焼 成	備	考
368	土師器 小皿		9.8	水平に 込む。	さえ後	口縁部外面庭	部ナ	る。デ、	端部	は内		乳褐色	į	精良		良好		
369	土師器小皿			へ内湾 く終わ	して伸 る。 底部ナ	びる。 デ、□	端部縁部	は巻 ヨコ	き込	むよ 。内i	外上方 うに丸 面底部			密		良好		

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
370	土師器 小皿	8.8 1.5	形態 369 に似るが器肉薄い。 外面・内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色~乳 橙色	密	良	二次焼成を うける
371 —=	土師器 小皿	9.0 1.65	形態 369 に似るが口縁端部は器肉を減じて 丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面底部一方向のハケ後口縁部ヨコナデ。	外面底部の	密	良好	二次焼成を うける
372	土師器 小皿	9.2 2.2	底部から斜上方へ内湾して伸びる深めの器形。口縁部は斜上方へ直線的に伸びる。端部は外へつまみ出される。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ・ナデ、口縁部ョコナデ。内面ハケ状工具による円周方向のナデ後口縁部ョコナデ。		精良	良好	
373	土師器 小皿	7.6 1.4	水平に近い底部から丸く立ち上がり、上外 方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸 く終わる。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
374 —≡	土師器小皿	8.0 1.65	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ョコナデ。 内面底部ナデ、口縁部ョコナデ。	暗褐色〜暗 灰褐色 器肉は赤褐 色	密	良	二次焼成をうける
375	土師器 小皿	8.4 1.4	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色	密	良好	
376	土師器 小皿	8.4	上方へ突出する底部から丸く立ち上がり、 斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部 は丸く終わる。 指おさえ後外面口縁部ョコナデ、内面底部 ナデ、口縁部ョコナデ。	乳灰褐色	精良	良好	
377	土師器 小皿	9.65 1.4	底部から斜上方へ内湾して伸びる口縁部。 端部は器内滅じて丸く終わる。 ヨコナデ。	乳橙色	精良 赤色酸化粒 含む	良	
378	土師器 小皿	8.0 1.25	水平な底部から丸く屈曲し、上外方へ直線 的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに 終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色	密	良好	
379	土師器小皿	8.15 1.4	上方へわずかに突出する底部から鈍い稜を持って屈曲し、上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後、底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
380	土師器 小皿	8.6 1.3	水平な底部から鈍い稜を持って屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は 外傾する面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡灰褐 色 内面淡赤褐 色~明橙色	密	良好	
381	土師器 小皿	8.45 1.15	形態 380 に似るが器肉薄く、口縁端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	
382	土師器 小皿	9.0 1.35	形態 380 に似るが口縁部丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
383	土師器小皿	7.5 1.15	水平に近い底部から稜を持って屈折し、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
384	土師器 小皿	7.5 1.2	水平な底部から鈍い稜を持って屈曲し、上 外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は 丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
385	土師器 小皿	8.2 1.2	水平な底部から鈍い稜を持って屈曲し、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	茶褐色~赤褐色	密	良好	燈心油痕 あり
386	土師器小皿	8.I 1.1	水平な底部から稜を持って屈折し、斜上方 へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸 く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色 内面の一部 乳橙色	密	良	
387	土師器 小皿	8.55 1.3	形態 386 に似るが器肉厚く、口縁端部は外傾する面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色	密	良好	
388	土師器 中皿	12.75 2.7	水平な底部から外上方へ伸びた後鈍い稜を 持って上外方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至 る。端部は外傾する面を持つ。 指おさえ後外面底部ヘラケズリ・ナデ。内 面底部一方向のナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡灰褐 色 内面淡黄色	密	良好	外面底部に黒斑あり
389	土師器 中皿	13.8	底部から丸く屈曲し、外反ぎみに伸びる口 終部に至る。端部はつまみ上げ、外に垂直な 凹面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色~ 淡黄褐色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
390	土師器 中皿	12.0	外上方へ直線的に伸びた後斜上方へ内湾ぎ みに伸びる口縁部。端部は尖りぎみに終わる。 口縁部のョコナデの他不明。	淡灰褐色~ 淡黄色	密	良	
391	土師器 中皿	12.6	斜上方へ内湾して伸びる口縁部。端部は尖 りぎみに丸く終わる。 ョコナデ。	淡灰褐色~ 乳褐色	精良	良好	
392	土師器 中皿	13.1 2.2	水平に近い底部から丸く屈曲し、斜上方へ 直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸みの ある面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡橙色~淡 灰褐色	密	良好	
393	土師器 中皿	13.8	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は立 ち上がりぎみとなって丸く終わる。 ョコナデ。	淡橙色	密	良好	
394	土師器中皿	7.5 1.8	底部から丸く屈曲し、外上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみに終わる。 ココナデ。	淡橙色	密 2 mm前後の 石英含む	良好	
395	土師器中皿	14.9	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は器 肉を減じて外へつまみ出される。 底部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡黄褐色~ 灰褐色	密	良好	二次焼成をうける
396	瓦器 椀	12.7	半球形を呈する体部~口縁部。口縁端部は 器肉を減じて斜上方へつまみ出される。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台上方ョ コナデ。ヘラミガキは外面・内面ともに密に 施されるが不明瞭。	暗灰色 器肉灰色	粗	良好	
397	瓦器	14.3 5.45 高台径5.45 高台高0.55	半球形を呈する。口縁部は上方へわずかに 外反して伸び、端部は尖って終わる。高台は 断面U字形で垂直に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台上下ョ コナデ。ヘラミガキは外面不明、内面体部密 な横方向、見込み密な一方向。	外面灰黒色 ~白灰色 内面黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良	外面表皮剥離
398	瓦器	14.4	浅めの半球形を呈する体部。□縁部は器肉を減じて端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、□縁部ヨコナデ。へ ラミガキは外面□縁部付近にやや粗い横方向 内面体部密〜やや粗い横方向、見込みに密な 格子状?。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
399	瓦器 椀	14.7	上外方へ内湾して伸びる体部〜口縁部。口縁端部はわずかに先太となり、端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へラミガキは外面やや粗い横方向、内面体部やや粗い横方向、見込みに格子状?。	黒灰色 器肉灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備	考
400	瓦器椀	16.4 — 高台径 — 高台高 —	半球形を呈する体部から稜を持って外反した後、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。 端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台上方ョコナデ。ヘラミガキは外面やや粗い斜方向、 内面体部密な円孤状、口縁部密な横方向。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好		
401 —四	瓦器 椀	14.0 4.1 高台径 5.9 高台高 0.4	中央が窪む底部から外上方へ直線的に伸びる体部〜口縁部。端部は丸く終わる。高台は断面台形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台上下ョコナデ。ヘラミガキは内面口縁部・体部下位にやや粗い横方向、見込みに粗い平行線状。	灰黒色 器肉灰色	やや粗	良好		
402	瓦器	13.8	斜上方へ直線的に伸びる体部〜口縁部。端部は丸く終わる。指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へラミガキは内面体部粗い横方向、見込み単位幅狭く粗い平行線状。	外面暗灰色 内面灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良		
403	瓦器	14.1	外上方へ内湾して伸びる体部から、斜上方 へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く 終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部粗い横方向、見込み粗い 平行線状。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好		
404	瓦器	14.5	外上方へ内湾する体部から斜上方へ外反ぎ みに伸びる口縁部に至る。端部は先太となり 丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面やや粗い横方向。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好		
405	瓦器	14.4	外上方へ内湾する体部から斜上方へ直線的 に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面体部下半に粗い横方向。	灰黒色~暗 灰色 器肉灰白色	やや粗	良好		
406	五器 椀	15.8	斜上方へ内湾する体部〜口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面粗い横方向。	黒灰色~灰 白色 器肉灰白色	やや粗	良好		
407	瓦器	14.0	外上方へ直線的に伸びる体部から稜を持ち 外上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く 終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へ ラミガキは内面口縁部横方向に2条認められ る。	外面灰黒色 ~灰白色 内面灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良		
408	瓦器 椀	14.4	斜上方へ直線的に伸びる体部~口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。へラミガキは内面粗い横方向。	暗灰色~灰 白色 器肉灰色~ 灰白色	やや粗	良		
409	瓦器 椀	14.05	斜上方へ直線的に伸びる体部から稜を持ち 外上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部 は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ョコナデ。へ ラミガキは内面粗い横方向(渦巻状?)。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好		

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
410	瓦器 椀	14.4	斜上方へ内湾する体部から、上外方へ直 的に伸びる口縁部に至る。端部は先太とな 丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 ラミガキは内面体部中位に粗い横方向のも をまとめて施す。	り 色 器肉灰色	やや粗	良好	炭素吸着や や不良
411	瓦器 椀	15.0	上外方へ直線的に伸びる体部〜口縁部。 部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 ラミガキは内面やや粗い右上り斜方向。	器肉灰白色	やや粗	良好	
412	瓦器	高台径 5.7 高台高 0.6	断面逆三角形の高台が「ハ」の字形に付く ナデ、高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは 込みに格子状。		密	良好	外面表皮剥離
413	瓦器	高台径5.35 高台高 0.5	中央部がわずかに窪む底部から外上方へ 線的に伸びる。高台は断面逆三角形で「ハ の字形に付く。 ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは 込みに粗い平行線状。	内面黒灰色 器肉白灰色	密	良好	外面表皮剥離
414	瓦器 椀	高台径 4.1 高台高0.35	水平に近い底部に断面逆三角形の底い高が垂直に付く。 ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは 込みに単位幅の狭いジグザグ状。	器肉灰白色	やや粗	良好	
415	瓦器 椀	高台径 4.9 高台高 0.3	水平に近い底部から外上方へ内湾して伸える。高台は断面半円形で底く垂直に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。へ だガキは見込みにきわめて粗い平行線状か 体部に横方向のものも1条認められる。	器肉灰白色	やや粗	良好	
416	瓦器 椀	高台径 4.4 高台高0.25	水平に近い底部から斜上方へ内湾して伸る。高台は低平で不揃い。 指おさえ後ナデ、高台周囲ョコナデ。へ ぎガキは見込みに単位幅狭く不揃いな平行約 状。	器肉灰白色	粗	良	炭素吸着不 良
417	瓦器 椀	高台径 3.7 高台高0.15	水平に近い底部から外上方へ内湾して伸てる。高台はきわめて低平、わずかに痕跡を列す程度である。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。へき ミガキは見込みに平行線状。	美 白色	密	良	炭素吸着不 良
418	瓦器 椀	高台径 5.1 高台高0.25	水平な底部から外上方へ直線的に伸びる。 高台はきわめて低く、高台の役割を果たしていない。 ナデ、高台周囲ョコナデ。ヘラミガキは料 い渦巻状か。	器肉灰白色	やや粗	良	炭素吸着不 良
419	瓦器 椀	高台径 3.6高台高 0.2	半球形を呈する底部〜体部。高台は断面近三角形で小型、垂直に付く。 三角形で小型、垂直に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。へき まガキは内面体部横方向、見込み連結輪状。	器肉灰白色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調	整等	の特	徵	色 調	胎	上 焼成	備	考
420	瓦器 小皿	8.8 —	外上方へ内湾する 外方へ外反するれる は内傾するえ後底部 ラミガキは内面口紅 位幅狭く密な平行紅	申びる口縁 ある面を持 ナデ、口縁 象部密な横	部に至る つ。 部ョコナ	。端部 デ。へ	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好		
421	瓦器 小皿	8.6	外上方へ内湾し、 部は外へつまみ出。 指おさえ後底部。 ラミガキは外面粗い	される。 ナデ、口縁	部ョコナ	デ。へ	黒灰色 器肉灰白色	粗	良好		
422	瓦器 小皿	8.45 1.95	外上方へ内湾する みに伸びる口縁部は出される。 指おさえ後底部は ラミガキは内面口線	て至る。端 トデ、口縁	部は外へ 部ョコナ	つまみ	黒灰色 器肉白灰色	密	良好		
423	瓦器 小皿	8.6	浅い半球形を呈す 内へ巻き込むように 指おさえ後底部コ ラミガキは内面単位	こ丸く終わ トデ、口縁	る。 部ヨコナ	デ。へ	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好		
424 —四	瓦器 小皿	10.0 2.3	水平な底部からす 直線的に伸びる口線 まみ出される。 指おさえ後底部カラミガキは外面口線 部密な横方向、見え	歌に至る - デ、口縁 歌粗い横	。端部は 部ヨコナ 方向、内	外へつ デ。へ 面口縁	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好		
425	瓦器 小皿	8.0 2.0	浅い半球形の底部 方へ外反して伸びる く終わる。 指おさえ後底部カ ラミガキは見込みに	5口縁部に - デ、口縁	至る。端 部ョコナ	部は丸デ。へ	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好		
426	瓦器 小皿	8.4 1.8	外上方へ直線的に 持ち、外上方へ外長 は先太となり、丸く 指おさえ後底部ナ ラミガキは内面口線 条認められる。	でする口縁 終わる。 - デ、口縁	部に至る 部ヨコナ	。端部 デ。へ	灰黒色 器肉灰白色	粗 石英粒多 含む	良好		
427	瓦器 小皿	8.8 1.85	外上方へ直線的に 持ち、上外方へ外長 は外へつまみ出され 指おさえ後体部ナ ラミガキは内面口縁 み認められる。	でする口縁 いる。 - デ、口縁	部に至る。	。端部 デ。へ	暗灰色 器肉灰色	やや粗	良好		
428	瓦器 小皿	9.2 1.3	水平に近い底部か 方へ内湾ぎみに伸び 丸く終わる。 底部ナデ、口縁部 内面口縁部に粗い植	る口縁部 3ヨコナデ。	に至る。	端部は	灰黒色 器肉灰白色	粗 長石・石類 粒多く含む			
429	瓦器 小皿	8.6 1.2	水平に近い底部か へ外反する口縁部に 外へつまみ出される 指おさえ後底部ナ	至る。端	部は先細	となり	灰色	やや粗	良好	炭素吸着 ² 良	不
一四											

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼成	備考
430 — 四	瓦器 小皿	8.8 1.5	きわめて浅い半球形の底部から外に稜を持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面不揃いな平行線状。		やや粗	良好	
431	土師器 羽釜	22.9 — 鍔径 30.65	斜内方へ内湾して伸びる頸部から丸く外反する口縁部に至る。端部は器肉を減じて丸く終わる。鍔は水平に伸びる。 外面頸部ナデ後口縁部・鍔上下ョコナデ。 内面頸部ナデ、口縁部ョコナデ。	外面暗褐色 内面淡赤褐 色~黄褐色	粗	良好	外面全体に 煤付着
432	土師器 羽釜	25.95 — 鳄径 37.7	斜内方へ直線的に伸びる頸部から器肉を増して直立する口縁部に至る。鍔はやや下がりぎみに付き、器肉厚い。 外面頸部ナデ、口縁部・鍔上下ョコナデ。 内面頸部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	鍔下面以下 に煤付着
433	土師器 羽釜	28.4 一 鍔径 33.4	斜内方へ内湾して伸びる頸部から「く」の 字形に屈曲し、外上方へ直線的に伸びる長め の口縁部に至る。端部は器肉を減じて丸く終 わる。鍔は基部を残して欠損する。 外面頸部ナデ、口縁部・鍔上下ョコナデ。 内面頸部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡赤褐色~ 乳黄色	粗	良好	鍔下面以下 に煤付着
434	土師器 羽釜	30.8 一 鍔径 39.1	上内方へ内湾して伸びる頸部から「く」の 字形に屈曲し、外上方へ伸びる口縁部に至る。 端部は尖りぎみに終わる。鍔は水平に付き、 中位でくびれ、端部は丸く終わる。 外面頸部ナデ、口縁部・鍔上下ョコナデ、 内面体部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	鍔下面以下 に煤付着
435	土師器 羽釜	34.4 — 鳄径 14.0	上内方へ直線的に伸びる体部から丸く屈曲 し、上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。 端部は尖りぎみに終わる。鍔は水平。 外面頸部ヘラケズリ(左→右)後ナデ。口 縁部・鍔上下ョコナデ。内面頸部ナデ、口縁 部ョコナデ。	外面暗褐色 内面赤褐色	粗	良好	外面全体に 煤付着
436	土師器 羽釜	— — 鍔径 44.2	上内方へ内湾して伸びる体部から「く」の字形に屈曲して口縁部に至るが、端部を欠損する。鍔はやや下がりぎみに付く。 外面頸部ナデ、口縁部・鍔上下ョコナデ、体部はヘラケズリか?内面頸部ナデ、口縁部ョコナデ。	淡赤褐色~ 黒褐色	粗	良好	外面・内面に煤付着
437	瓦器 羽釜	19.15 — 鍔径 23.6	内傾して伸びる口頸部。端部は器肉を増して内傾する面を持つ。鍔は断面台形で、下がりぎみに付く。 ョコナデ。	灰黒色 器肉淡褐色	粗	良	
438	瓦器 羽釜	18.05 —— 鍔径 22.0	上内方へ内湾して伸びる口頸部。端部は丸 く終わる。鍔は断面三角形。 ョコナデ。	灰白色	やや粗	良	
439	瓦器羽釜	18.0 — 鍔径 23.6	斜内方へ内湾して伸びる口頸部。端部は内傾する面を持つ。鍔は断面台形。 ョコナデ。	灰黒色 器肉淡灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
440	土師器 甕	27.0	上外方へ内湾して伸びる口縁部。端部は器 肉を増して内に巻き込む。 ョコナデ。	白灰色	密	良好	内面に炭化 物付着
441	土師器 甕	36.8	体部から一旦直立し、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は内傾する丸みのある面を持ち、外へつまみぎみに終わる。 ョコナデ。	暗褐色 器肉淡褐色	やや粗	良好	
442	瓦筧土器 甕	29.05	体部から直立し、斜上方へ外反して伸びる 口縁部に至る。端部は上方へ丸く肥厚し、下 方へ拡張し、外に面を持つ。 外面右上りタタキ後口縁部ョコナデ。内面 ョコナデ、下位は不明。	灰白色	やや粗	良	内面下半表 皮剥離
442	須恵器 すり鉢	19.9	斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部は 下方へ拡張し、凹面を持つ。 外面回転ナデ。内面ナデ。	淡灰色	やや粗	良好	
444	須恵器 すり鉢	24.6	上外方へ直線的に伸びる口縁部。端部は下 方へ拡張し、凹面を持つ。 外面回転ナデ。内面ナデ。	淡青灰色	やや粗	良好	
445	白磁合子	3.0 1.75	突出する上げ底状の底部から、上外方へ内 湾して伸びる体部へ至る。受部は体部から器 肉を増して続き、立ち上がりは短く内傾する。 体部は輪花状を呈する可能性あり。	釉、淡緑青 色透明 光沢あり	白灰色 緻密	良好	外面受部端 以下0.5cm まで、内面 施釉
446	白磁椀	— 高台径 6.6 高台高0.85	削り込みの浅い高台底部、直立する高台側 面から斜上方へ伸びる体部に至る。見込みに 沈線。 外面・高台内にカンナ削り。	釉、白灰色 光沢あり	灰白色 密 黒色粒含む	良好	内面施釉
一四							

第5章 ま と め

今回の調査では、平安時代後期と鎌倉時代後期に比定される遺構・遺物を検出した。ただ、調査区が分散している関係で、しかも、調査区を異にして遺構の帰属時期が違うため、平面的な広がりの内で遺跡の推移を考えることは困難である。一方、第1調査地の南約100m地点では、昭和56年4月~5月に八尾市教育委員会が発掘調査を実施しており、平安時代末期~鎌倉時代初頭に比定される井戸を検出している。これらの資料を含めて考えれば、平安時代後期から鎌倉時代末期に至る間、この地域一帯で集落が連綿と営まれていたことがわかる。

なお、I 萱振A遺跡発掘調査概要の報文中で作成した八尾市域内の瓦器椀編年試案に従って 各遺構の在続時期を示せば、以下の通りになる。

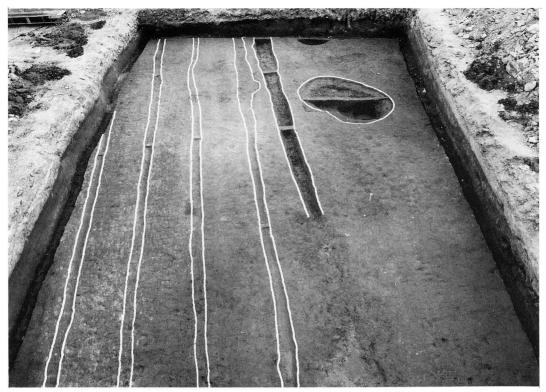
第1調査区のSK-1 (II-1期)、第3調査区のSK-2 (II-3)・SK-3 (II-3・4)・SK-6 (II-2・II-4)・SE-2 (IV-1)・SE-3 (II-3・4) に区別でき、各遺構の在続時期の一時期を知ることができる。



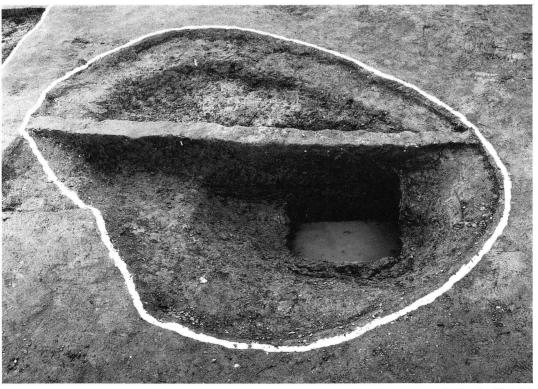
第1調査区全景(北から)



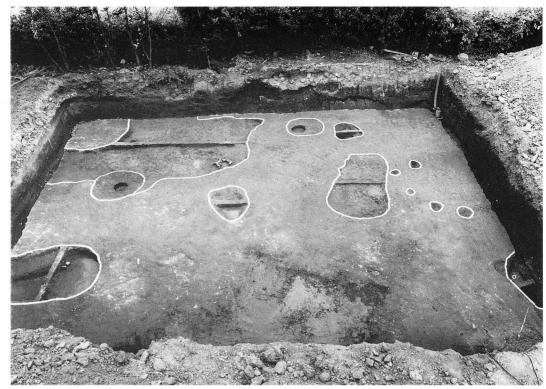
SK-1 (北から)



第2調査区全景(北から)



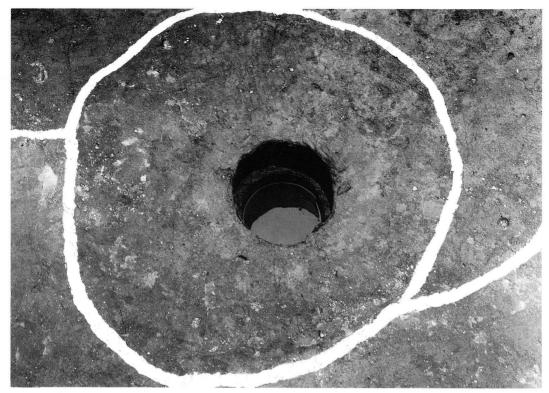
SE-1 (北から)



第3調査区全景(西から)



SK-3 (南から)



SE-2 (南から)



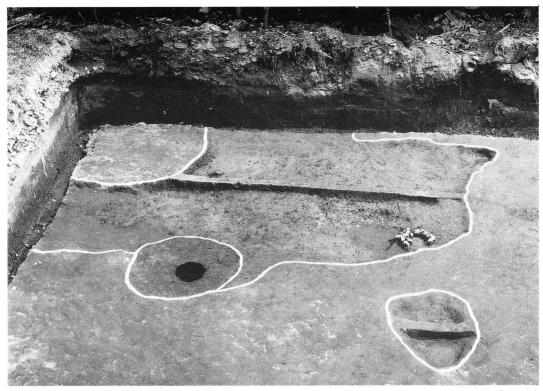
同上 断面 (南から)



SE-3 (西から)



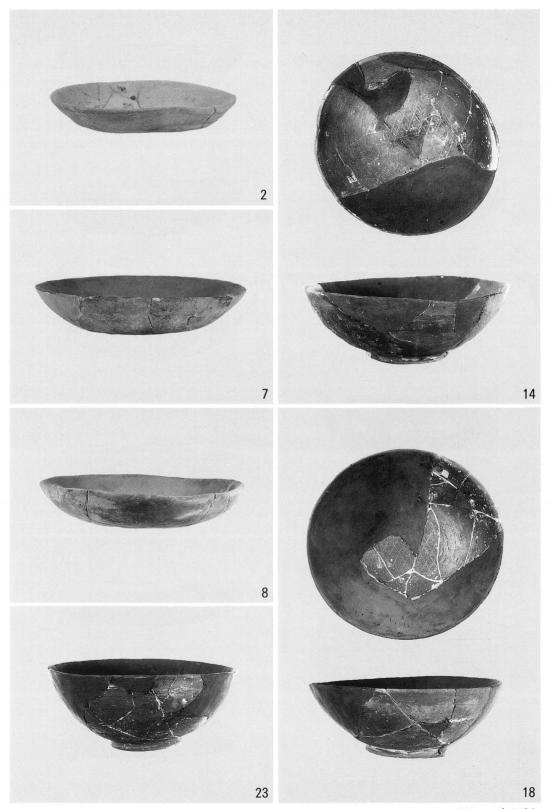
同上 断面 (南から)



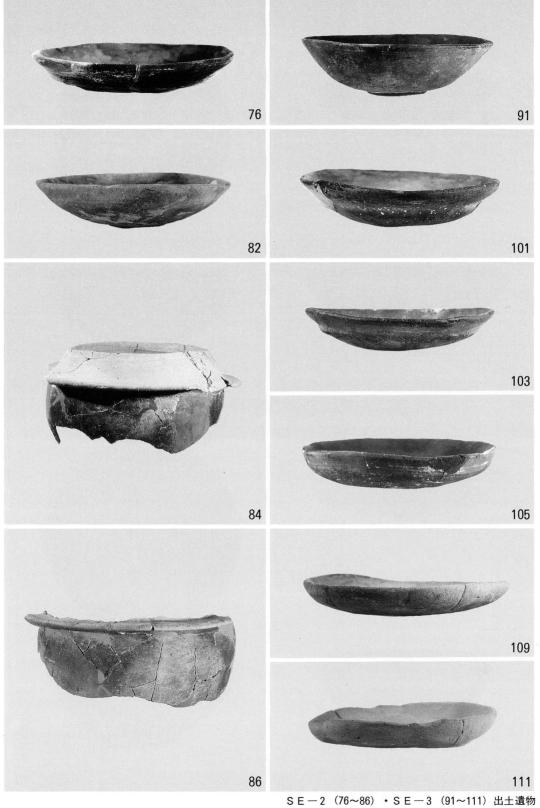
 $SK-2 \cdot SK-5 \cdot SE-2$ (西から)

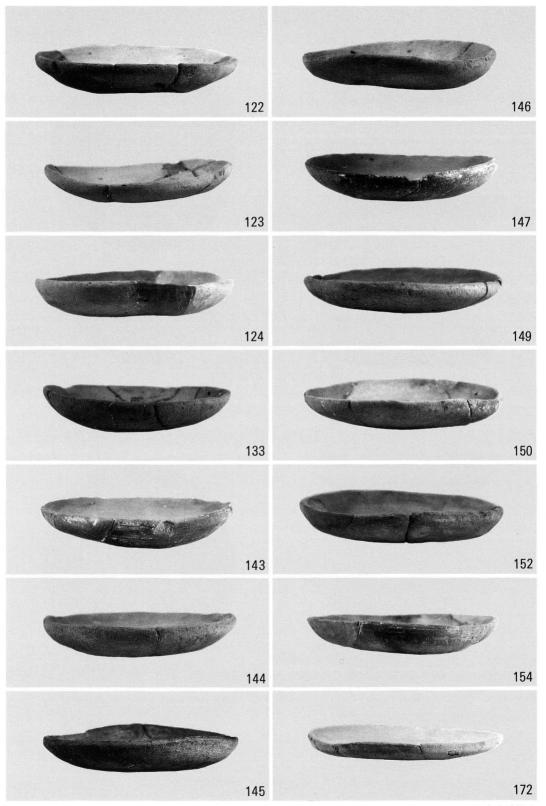


SK-2土器集積(西から)

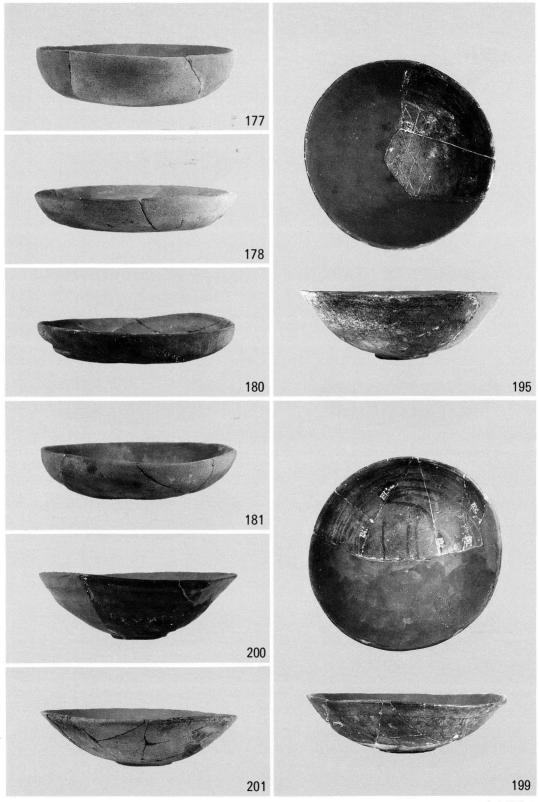


SK一1出土遺物

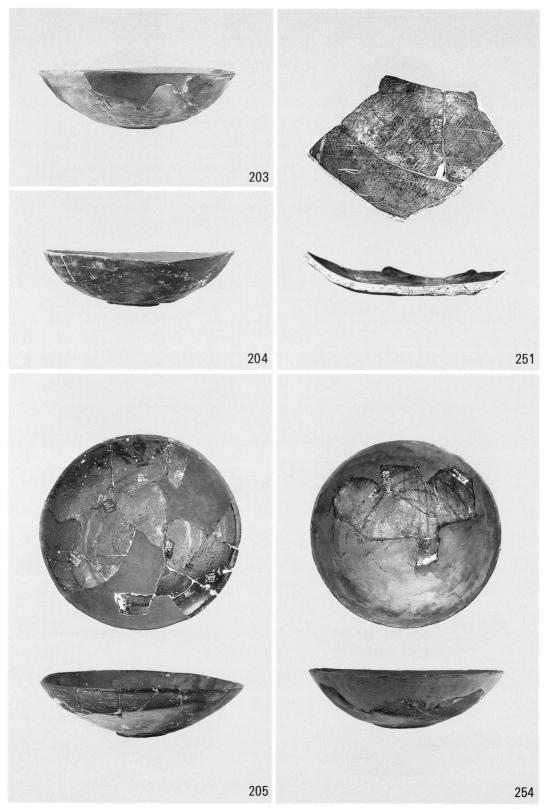




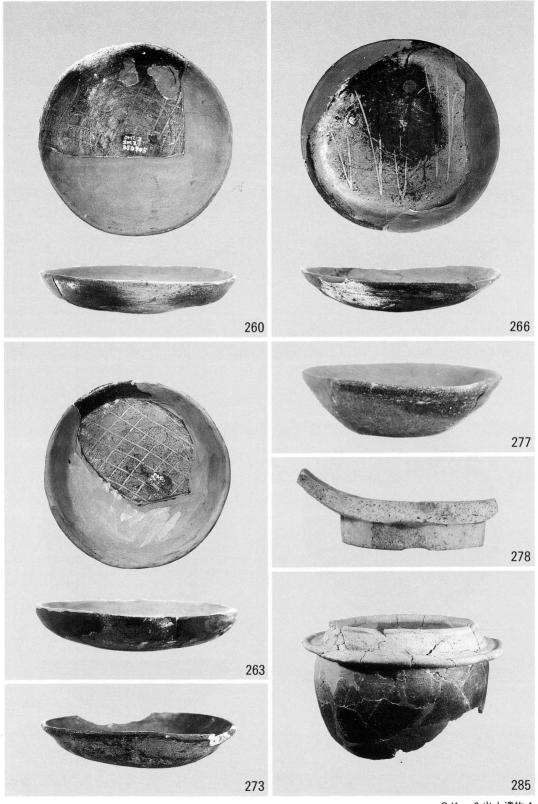
SK-2出土遺物1



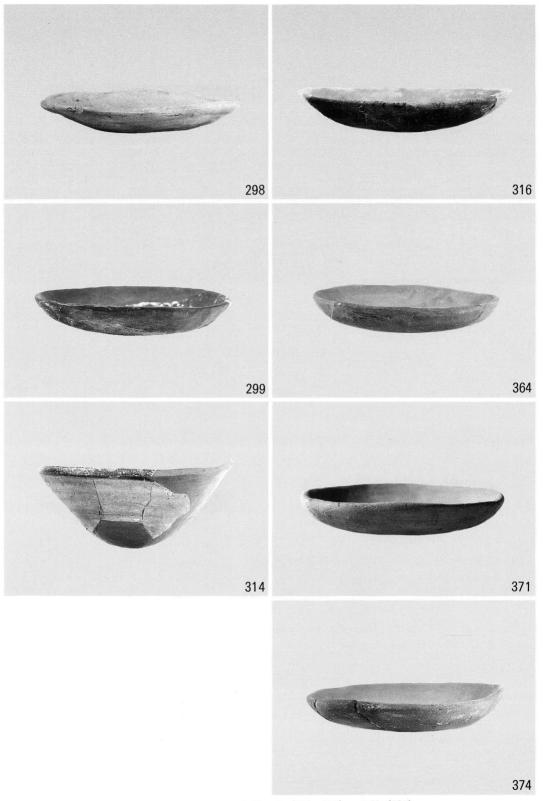
SK-2出土遺物2



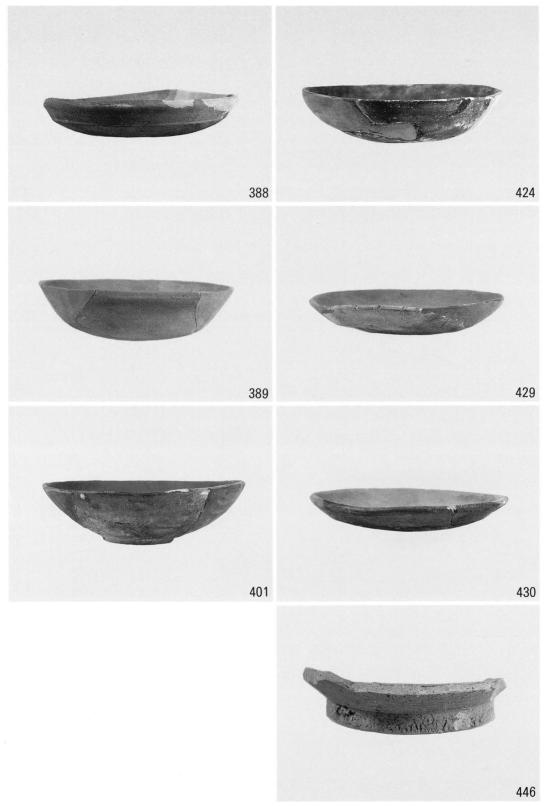
SK一2出土遺物3



SK-3出土遺物4



SK-3 (298~314) ・SK (321) ・ SP-2 (364) ・第3調査区包含層 (371・374) 出土遺物1



第3調査区包含層出土遺物2

III 東郷遺跡(第20次調査) 発掘調査概要報告

- 1、本書は、八尾市光町2丁目40他で実施した市立文化会館建設に伴う発掘調査の概要報告である。
- 1、本書で報告する東郷遺跡(第20次調査)の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市企画調整部から委託を受けて実施したものである。
- 1、現地調査は昭和60年10月29日から昭和61年3月10日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。なお、調査においては相松隆・麻田優・岩森久晃・上辻よしえ・岡崎英雄・長野琢磨・南艸良彦・前田芳嗣・益本浩・山口ひろみが参加した。
- 1、内業整理は、現地調査終了後実施し昭和62年3月31日で完了した。
- 1、本書作成に関る業務は、遺物実測・図面レイアウトー原田、図面トレース一成海佳子、遺物写真撮影ー原田、浄書一山内千恵子が参加した。
- 1、本書の執筆は原田が担当した。
- 1、全体の編集構成は原田が行った。

本 文 目 次

第1	章	調査	に至る経過····································	247
第 2	章	地理	• 歴史的環境	248
第 3	章	調査	概要	251
	第 1	節	調査方法と経過	251
	第2	節	基本層序	251
	第3	節	検出遺構・出土遺物	252
		1)	検出遺構	252
		2)	出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	274
第 4	章	出土	遺物観察表	277
第 5	章	まと	ઝ	284
			插 図 日 次	
			挿 図 目 次	
第1	図	調査		247
第1 第2			地周辺図	
	図	基本		252
第2	図図	基本調查	地周辺図	252 253
第 2 第 3		基本調査検出	地周辺図 層序模式図 区設定図および地区割図	252 253 •256
第 2 第 3 第 4		基本調査検出SX	地周辺図 層序模式図 区設定図および地区割図 遺構平面図 255 一1・SX-2・SX-3平断面図… 257	252 253 •256 •258
第2 第3 第4 第5		基本 調 検 S X S X	地周辺図 層序模式図 区設定図および地区割図 遺構平面図	252 253 • 256 • 258 260
第 2 第 3 第 3 第 5 6		基本 調査 検出 SX SX	地周辺図	252 253 • 256 • 258 260 261
第 第 第 第 第 第 第 第 7		基本 調 検 X S X S X	地周辺図 層序模式図… 区設定図および地区割図 遺構平面図 255 一1・S X — 2・S X — 3 平断面図 257 —1・S X — 2・S X — 3 出土遺物実測図 257	252 253 • 256 • 258 260 261 262
第 3 第 3 第 3 第 3 第 3 第 3 8 8 8 8 8 8 8 8		基本 調検 SX SX SX SX	地周辺図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	252 253 • 256 • 258 260 261 262 264
第 第 第 第 第 第 第 第		基本 a b c c c c d c c c c c c c c c c c c c	地周辺図 層序模式図… 区設定図および地区割図 遺構平面図 255 -1・S X - 2・S X - 3 平断面図 -4 平断面図 -5 平断面図 -6・S X - 7 平断面図 -6・S X - 7 平断面図 - 8 ※ 3 ※ 3 ※ 3 ※ 3 ※ 3 ※ 3 ※ 3 ※ 3 ※ 3 ※	2522 2533 • 2566 • 2588 2600 2611 2622 2644 265

第13区]	土器棺墓 1 • 2 平断面図 · · · · · 2	68
第14図]	土器棺 1 • 2 実測図	69
第15図		S K-1 平断面図 ····· 22	70
第16区		S K — 4 出土遺物実測図 ····· 22	70
第17図]	SE-1平断面図 ···· 2	72
第18図]	包含層出土遺物実測図 1	74
第19区		包含層出土遺物実測図 2	75
第20区]	包含層出土遺物実測図 3	76
		図 版 目 次	
図版	_	調査区全景	
図版	_	調査区北部遺構	
		調査区南部遺構	
図版	=	S X — 1	
		SX一1 南周溝内遺物出土状況	
図版	四	SX-1周溝内土層堆積状況	
図版	∄ .	SX-2	
		SX-2東周溝内遺物出土状況	
図版	六	S X — 3	
		SX-3内遺物出土状況	
図版	七	SX-4北周溝	
		SX-4北周溝内遺物出土状況	
図版	八	SX—5東周溝内遺物出土状況	
		同上 遺物	
図版	九	土壙墓	

SK-1

土器棺墓2

同上 断面

図版一〇 土器棺墓1

図版—— SE-1

図版一二 SE-4

 $SE-6 \cdot SE-7$

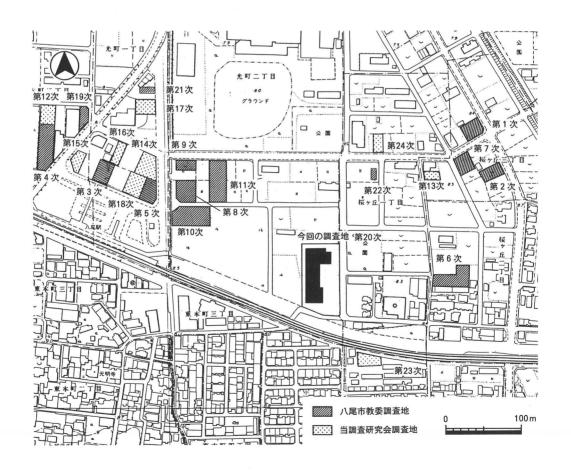
図版一三 S X-1・S X-2・S X-3・S X-4 出土遺物

図版一四 S X - 3 · S X - 4 · S X - 5 · 土壙墓 · 土器棺墓 1 · 土器棺墓 2 出土遺物

第1章 調査に至る経過

東郷遺跡は、行政区画上八尾市北本町・東本町・光町・桜ケ丘一帯に存在している。当遺跡推定範囲内では、昭和55年以降、近鉄八尾駅の移動に関連した開発が継続的に行われており、開発に伴う事前発掘調査が今日まで19次に亘って実施されてきている。それらの調査成果を総合すると、当遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが窺える。なかでも、当遺跡内で活発に集落が営まれるのは古墳時代前期(庄内式期・布留式期)であったようで、集落を構成する居住域と墓域が確認されており、この時期の集落のあり方を考えるうえで、当遺跡が重要な遺跡の一つとして認識されるようになってきた。

このような情勢下、八尾市企画調整部から、八尾市光町2丁目40番地他において文化会館を建設する旨の計画書が、文化財保護法57条の3に基づいて、八尾市教育委員会に提出された。



第1図 調査地周辺図

これら一連の計画書を受けた八尾市教育委員会は、当該地が周知の遺跡内で、しかも建物の基礎杭構築深度が遺構面に達することが予想されるため、文化財保護法98条の2に基づき、試掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通告した。

昭和60年8月9日・10日、建物建築予定地内の4箇所で企画調整部立会の上、八尾市教育委員会文化財室が試掘調査を実施した結果、中世の土器片を包含する土層が確認された。以上の結果から、建物の基礎工事によって遺構が破壊されることが判明したため、八尾市文化財保存に係る事務取扱い要綱に基づき、記録保存に必要な資料を作成する目的で事前に発掘調査を実施することが、二者間で了解された。

発掘調査は、財団法人八尾市文化財調査研究会が主体になって実施することが、八尾市教育委員会・八尾市企画調整部・財団法人八尾市文化財調査研究会の三者間で決定され、契約締結後現地調査に着手した。なお、調査面積は当初1,200㎡であったが、調査途中古墳時代前期の遺構を検出したことから、一部それらの遺構の広がりを追求する目的で465㎡を拡張したため、最終の調査面積は1,665㎡を測る。発掘調査の期間は、昭和60年10月29日から昭和61年3月10日までである。

第2章 地理•歷史的環境

東郷遺跡は、行政区画上八尾市北本町・東本町・光町・桜ケ丘一帯に存在する弥生時代中期 から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

東郷遺跡の位置する河内平野については、近畿自動車道に伴う一連の発掘調査により、人類 史の時代に入ってもなお地形的変遷が顕著であったことが明らかになってきた。なかでも、河 内平野内部を北流する恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川を中心とする中小河川の沖積 作用による土砂の堆積は、河内平野の形成に多大な影響を及ぼしていたようである。河内平野 内部では、このような地形的制約に左右されながらも基本的には、上記の5水系を核とした集 落が営まれてきた。これらの水系がもたらす大量の水は、水稲耕作に適した肥沃な土壌を提供 する反面、ときには集落の存続を瞬時に停止させると言った相反する機能を備えていた。人々 は、このような地理的条件を持つ低位沖積地に積極的に対応し、自然堤防上および微高地に居 住域、低湿地に生産域である水田、さらに居住地の近くには墓域を設けることで集落を構成し ていたようである。東郷遺跡は上記の水系で区別すれば、楠根川と長瀬川に挟まれた地域に当 たり、既述した地理的条件に符号した集落構成であったことが過去の調査成果で確認されてい る。

以下、東郷遺跡内で実施されてきた過去の調査成果を踏まえて、周辺遺跡との関係を概観し

てみる。

東郷遺跡で集落が営まれ始めるのは弥生時代中期(畿内第Ⅲ様式)であったようで、遺跡範 囲の南西部で土坑が検出されている。この時期の遺跡は、北方に位置する瓜生堂遺跡付近で集 落が出現しており、南に続く巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・山賀遺跡をも含めて拠点的な大集落 註2 註3 が形成されている。一方、生駒山西麓部から恩智川流域にかけては、水越遺跡・恩智遺跡で集 註 5 落が営まれている他、南西方には亀井遺跡・長原遺跡、さらに南方には東弓削遺跡・弓削遺跡 註7 註8 で集落の存在が認められている。後期になると遺跡の中心は当遺跡の南に近接する成法寺遺跡 にあったようで、この時期の遺構・遺物は当遺跡の範囲内では希薄である。古墳時代前期〔庄 内式期・布留式期〕になると、当遺跡推定範囲のほぼ中央部で竪穴住居・掘立柱建物を中核と する居住域と墓域が検出されており、この時期に集落の形成が活発であったことが窺える。こ れらの現象は周辺の遺跡でも同じであったようで、西岩田遺跡・美園遺跡・萱振B遺跡・成法 註12 註13 寺遺跡・小阪合遺跡・矢作遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡で集落が検出されており、当遺跡と同 _{註15} _{註17} 様の条件下でこの時期に爆発的に集落が増加する傾向が指摘される。古墳時代中期になると当 遺跡の居住地の中心は、遺跡範囲の北東部に移動したようである。なお、北東に隣接する萱振 B遺跡の南西部で若干の土師器と子持勾玉が出土したことが報ぜられていることから、この時 期の集落の中心をその付近一帯に求められよう。周辺ではこの時期の集落が西岩田遺跡・小阪合 遺跡・中田遺跡で確認されている。後期になっても遺跡の状況は中期と同様であったようである。 周辺では成法寺遺跡・友井東遺跡で居住地が確認されている。なお、美園遺跡・萱振A遺跡・ 友井東遺跡・巨摩廃寺遺跡・山賀遺跡・萱振 B 遺跡では中期から後期に比定される古墳が検出 されており、平野部に於ける古墳の存在が明らかになってきた。続く奈良時代になると、近接 する成法寺遺跡で居住地が確認されている程度で、東郷遺跡推定範囲内では包含層から奈良時 代に比定される遺物が少量出土している程度であるが、明瞭な遺構は検出されていない。続く 平安時代・鎌倉時代においても遺跡の状況は奈良時代と同様であったらしく、一部で散発的に 遺構が検出される程度である。室町時代以後は居住地としては顧みられることも無く、耕作地 としてのみ利用されていたようである。

- 註1 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 『瓜生堂』近畿自動車道天理~吹田線建設に 伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1980
- 註 2 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理〜吹田線 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1981
- 註3 (財)大阪文化財センター 『若江北』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘 調査概要報告書 1983
- 註4 (財)大阪文化財センター 『山賀(その3)』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文 化財発掘調査概要報告書 1984

- 註5 (財)八尾市文化財調査研究会・「水越遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和56・57年度」:(財)八尾市文化財調査研究会報告3 1983
- 註6 瓜生堂遺跡調査会 『恩智遺跡』・Ⅱ・Ⅲ』1980・1981
- 註7 (財)大阪文化財センター 『亀井』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調 査概要報告書 1983
- 註8 長原遺跡調査会・(財) 大阪市文化財協会 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』1982.3改 訂
- 註9 八尾市教育委員会 『東弓削遺跡』:八尾市文化財調查報告3 1976
- 註10 (財)八尾市文化財調査研究会 「弓削遺跡(第1次調査)」『昭和59年度事業概要報告』八尾市文化財調査研究会報告7 1985
- 註11 (財)八尾市文化財調査研究会 『成法寺遺跡』1983
- 註12 大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 『西岩田』近畿自動車道天理〜吹田線建設に 伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1980
- 註13 (財)大阪文化財センター 『美園』近畿自動車道天理〜吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1985
- 註14 大阪府教育委員会 『萱振遺跡発掘調査概要 I』 1983
- 註15 (財)八尾市文化財調査研究会 「小阪合遺跡(第3次調査)」『昭和58年度事業概要報告』: (財)八尾市文化財調査研究会報告5 1984
- 註16 八尾市教育委員会 「矢作遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』: 八尾市文化財調査報告15 1987
- 註17 八尾市教育委員会 『中田遺跡』1975
- 註18 広瀬雅信 『萱振遺跡調査概報』『八尾市文化財紀要』』八尾市教育委員会 1984

第3章 調査概要

第1節 調査方法と経過

調査にあたっては、八尾市教育委員会文化財室に試掘成果に従って、現地表下1.6mまでの土層を機械掘削によって除去した。以下の土層については、土層葉理に従って人力掘削を実施し、試掘調査で確認された中世の遺物包含層と遺構の関係を追求した。人力掘削を0.5m実施したところで、試掘結果に該当する土層の存在を確認した。さらに、その土層を取り除くと耕作に関連した小構の他に、古墳時代前期に比定される方形周溝墓7基を検出した。この結果、以上の調査状況を中間報告としてすみやかに八尾市教育委員会文化財室に報告し、以後の適切な処置を行政判断に委ねた。その結果、方形周溝墓の広がりを追求する目的で調査面積を465㎡拡張する旨の指示を得た。したがって、当初の調査面積である1,200㎡を1,665㎡に変更した。なお、調査区の設定にあたっては、南北軸を磁北に合わせて基準とし、それに東西軸を直交させる形をとった。設定した1区割単位は10m四方で、東西方向は西から東へアルファベット(A~E)・南北方向は北から南へ算用数字(1~10)を付せて、それぞれ1A地区・2A地区……と付称した。

第2節 基本層序

ここでは、普遍的に存在した土層10層を基本層序とした。以下、各層を概説する。

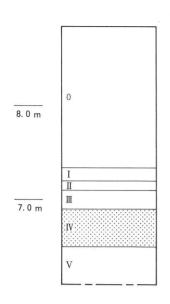
第0層:現代の盛土である。層厚150~160㎝。地表面の標高は8.80~8.90mを測る。

第 I 層:旧耕土、暗灰色砂質土、層厚10~15cm。水田耕土に該当する土層で、調査区全域で ほぼ水平に堆積している。

第 II 層:灰色〜灰緑色の色調で、土質は砂質〜シルト質である。とくに南部はシルト質が優勢な層相を示している。層厚 5~15cm・床土の層相を示す土層で全体に酸化鉄・マンガン等の斑点が散見して認められる。層中に、中世末期〜近代に比定される遺物を少量包含している。

第Ⅲ層:灰色の色調で、土質は砂質〜粘質である。層厚10〜30cm。安定した土層で調査区全域で普遍的に認められた。第Ⅱ層同様酸化鉄・マンガン等の斑点が顕著である。層中に古墳時代前期から中世末期に比定される遺物を包含するが、出土量は少い。

第IV層: この土層上面で古墳時代前期と中世末期〜近世時期に比定される遺物を検出した。 なお、第IV層上面においては一部河川の氾濫を示す層相が認められており、基本的 な層序も3層(A~C)に区別できる。なお、河川の氾濫に起因するものと考えら れる粗砂層(C層)からは、弥生時代後期に比定される土器片が少量出土している。



I 暗灰色

砂質

Ⅱ 灰~灰緑色

砂質・シルト

Ⅲ 灰色

砂質。粘質

Ⅳ A灰~灰黄色

粘質 B淡灰色~灰茶色 シルト

C淡灰色

V 淡青灰色

粘質・粘土・シルト

第2図 基本層序模式図

A 層:灰色~灰黄色粘質土。層厚10~40cm。粘性 が弱く粗砂が散見される土層で、下部に行 くにしたがってシルト質がやや優勢する層 相を示す。調査区北部一帯および西部一帯 に広がっている。方形周溝墓1~方形周溝 墓5がこの土層上面を構築面としている。

B 層:淡灰青~灰茶色の色調で土質はシルトであ る。層厚30cm以上。調査区南部一帯に広が る土層で、方形周溝墓6・方形周溝墓7が この土層上面を構築面としている。

C 層:淡灰色の色調で土質は上面付近は粗砂であ るが、下部へ行くにしたがって礫が散見さ れる。層厚50cm以上。調査区中央の東部一 帯に広がっている。井戸2~井戸7がこの 土層上面を構築面としている。

第 V 層:淡青灰色の色調で十層には粘質土・粘土・ シルトがある。層厚20~40cm。層中には、 弥生時代中期に比定される土器片を少量包 合している。ただ、調査区中央東部には第 WC層が堆積しており、第V層に該当する 十層はなかった。

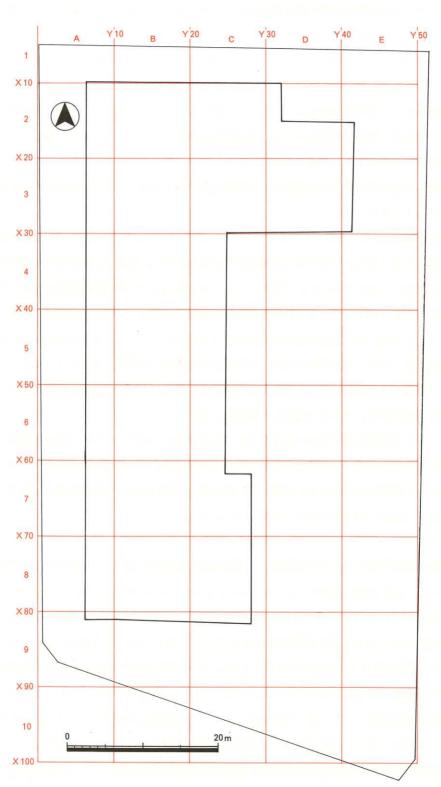
第3節 検出遺構・出土遺物

1)検出遺構

検出した遺構は、古墳時代前期の方形周溝幕7基(SX-1~SX-7)・土壙墓1基・土 器棺墓2基・土坑4基(SK-1~SK-4)、中世末期以降の耕作に関連した溝8条(SD- $1 \sim SD-8$) の他、近世の井戸 7 基($SE-1 \sim SE-7$)である。時期幅があるにもかか わらず、すべて第IV層上面で検出した。これらの事柄は、旧耕土以下約50cmたらずで古墳時代 前期の遺構面を検出した事実が示すように、古墳時代前期までの調査地一帯の沖積作用が緩慢 であったことが一番の成因であったものと考えられる。以下、遺構ごとに概観する。

方形周溝墓(SX)

7基(SX-1~SX-7)を検出した。方形周溝墓を検出した第Ⅳ層上面一帯は、粗砂・ シルトの平面的な広がりから、過去に河川の氾濫を受けた土地であることが判明した。したがっ



第3図 調査区設定図および地区割図

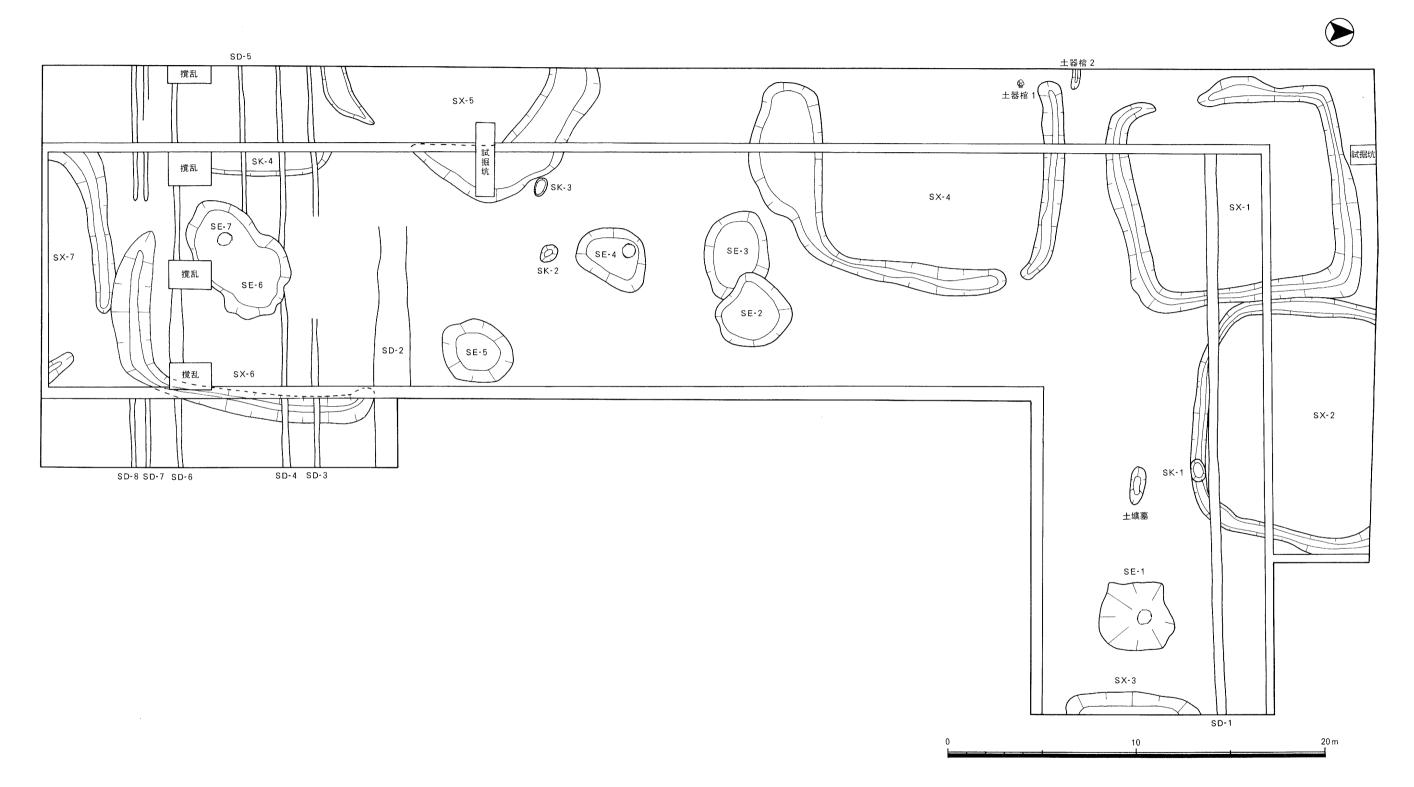
て、検出した7基の方形周溝墓の構築面の土質は一様ではなく、SX-1・SX-2・SX-3・SX-4・SX-5が第IV A層(灰色~黄灰色粘質土)、SX-6・SX-7が第IV B層(淡灰青~灰茶色シルト)に区別される。とくに、調査区中央の東部一帯は、南西方向から北東方向にかけて第IV C層(淡灰色粗砂)の堆積が顕著で、西側に位置するSX-4・SX-5はこの粗砂の広がりを避けて構築していることが窺える。さらに、SX-6の北周溝が開掘されていない事実は、被葬者の集落内における地位等が反映したものと考えるよりは、粗砂という土質が構築に不向きであったと考えたほうが正しいようである。なお、第IV C層中には、わずかではあるが畿内第 V様式に比定される土器類が含まれており、この土層がこの時期に堆積形成されたものと推定される。

方形周構墓の平面形は、SX-6を除けばすべて方形を呈しており、一辺 $10\sim11.5$ mを測る。主軸は、 $SX-5\cdot SX-7$ 以外はほぼ磁北を指すものが多い。周溝は、断面 U字形または V字形を呈しており、幅 $1.0\sim4.0$ m・深さ $0.1\sim0.3$ mを測る。周溝内部の堆積土層は、基本的には 3層ないし 4 層である。各方形周溝墓の周溝の最下層には、一様に地山に近い土質が堆積していることから、構築当初は無水状態が保たれているようである。なお、 $SX-1\cdot SX-2$ と $SX-6\cdot SX-7$ が周溝を共有する関係にあたる他、陸橋部は $SX-1\cdot SX-4\cdot SX-5\cdot SX-7$ で確認できた。盛土および埋葬主体部は、中世末期以降の開発に伴って完全に削平を受けており、まったく遺存していなかった。

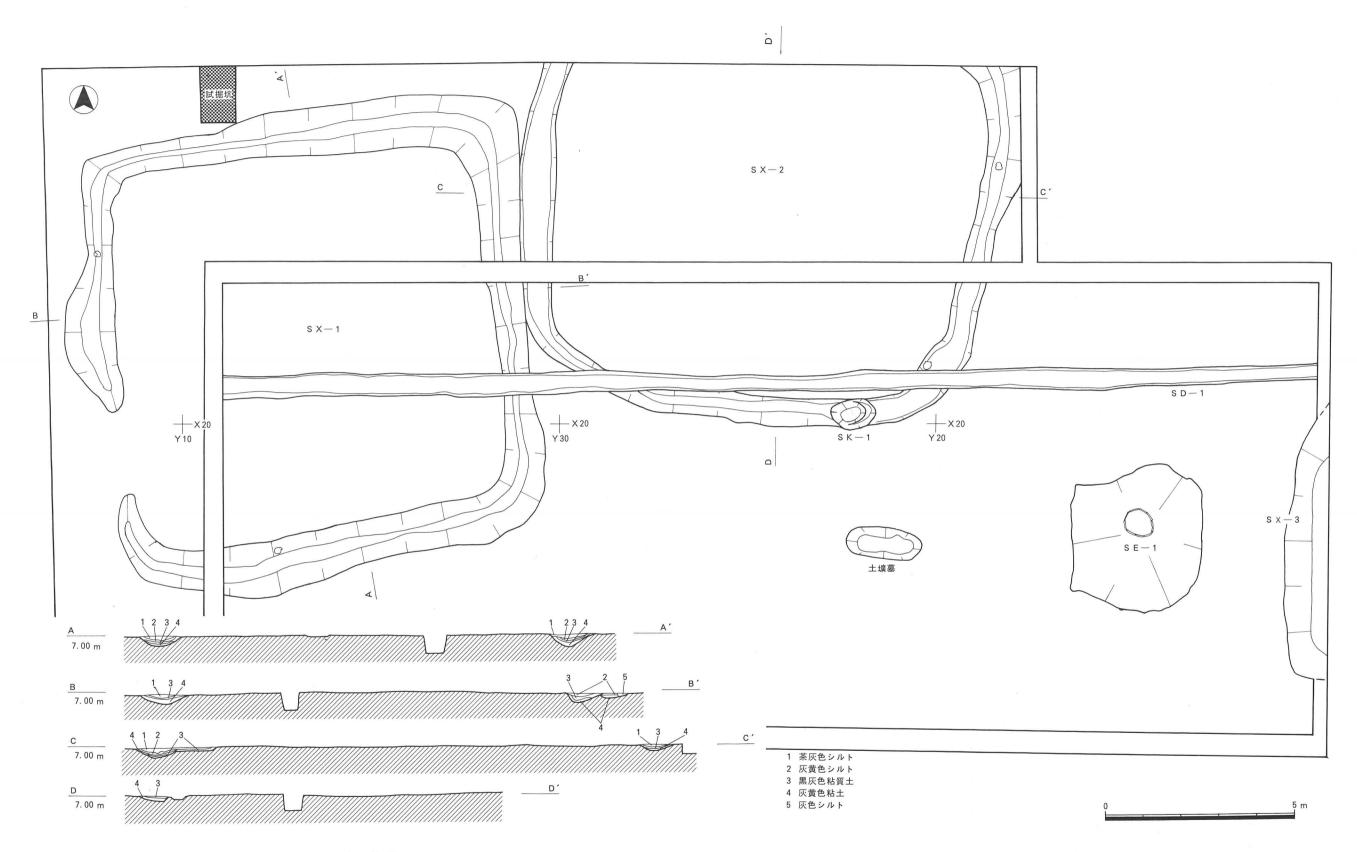
遺物は、すべて周溝の最下層から出土したが、出土状況から推定すれば、当初から周溝内に 埋納されたとは考えがたく、構築後の比較的早い段階に墳丘上から転落したものと考えるのが 妥当であろう。周溝内から出土した遺物には、庄内甕・二重口縁壷・大型直口壷・砥石等があ り、時期的には概ね庄内式期の新しい時期に比定される。

S X - 1

調査区の北西部で検出した方形周溝墓で、墳丘西辺に陸橋部を有する。墳丘の平面は方形を呈しており、一辺の規模は東西9.5 m・南北10 mを測る。方向は南北軸に対してN-5°-Wを示す。墳丘は完全に削平を受けており、主体部の痕跡および盛土はまったく遺存していなかった。周溝の断面は、U字形またはV字形を呈しており、幅1.0~1.5 m・深さ0.25~0.3 mを測る。ただ、東周溝は1.0 mと幅狭であることから、先に構築されたと考えられる方形周溝墓SX-2を意識して、溝幅が狭められたものと推定される。周溝内の堆積土層は、基本的には上層より第1層茶灰色シルト・第2層灰黄色シルト・第3層黒灰色粘質土・第4層灰黄色粘土の4層からなるが、第2層灰黄色シルトが欠損する部分が認められた。なお、最下層の土層からみて、周溝内での、帯水は認められない。遺物は、西周溝で壷1個(1)、南周溝で甕1個(2)が検出されている。遺物の出土土層は、いずれも最下層の第4層灰黄色粘土層である。



第4図 検出遺構平面図



第5図 SX-1・SX-2・SX-3平断面図

SX-2

調査区の北部で検出した。方形周溝墓SX-1の東側に位置するもので、調査区外に至る北周溝を除いた3方で周溝を検出した。墳丘の平面は隅丸方形を呈しており、墳丘の規模は西端を検出した南辺で11mを測る。方向は南北軸に対してN-3°-Eを示す。周溝は方形周溝墓SX-1に比して遺存状態が悪く、幅1m前後深さ0.1~0.2mが残存していた。周溝底の標高は方形周溝墓SX-1より0.15m前後高いことが指摘できる。周溝内部には、上層より茶灰色シルトと灰黄色粘土が堆積しており、遺物は下層の灰黄色粘土から庄内甕(5)が1点出土している。出土地点は、南東隅の周溝内である。なお、南周溝内には、土坑SK-2が存在している。

SX-3

調査区の北東隅で検出した方形周溝墓であるが、大半が調査区外へ至るため、規模等の詳細 は不明である。周溝内最下層から庄内甕 2 点 (**7・8**) が出土している。

SX-4

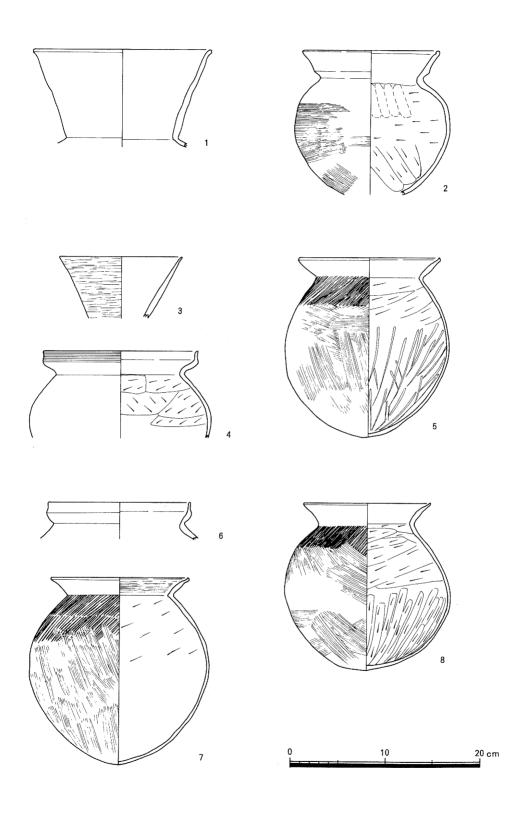
方形周溝墓SX-1の南側で検出した。南西部を除いて、ほぼ全容を知ることができる。墳丘の平面形は南北にやや長い方形を呈するもので、北東隅に陸橋部を有する他、西周溝が存在しないタイプの方形周溝墓である。方向は、南北軸に対してN-3°-Eを示す。周溝は、南周溝以外は断面U字形を呈する。周溝幅は、南周溝が4mを測るが、他は0.5~1.0mである。深さは0.25m前後を測る。周溝内には、第1層茶灰色シルト・第2層黒灰色粘質土・第3層灰黄色粘土・第4層淡灰色粘土・第5層灰色シルトの5層が堆積している。遺物は、方形周溝墓SX-1・SX-2と同様、最下層に堆積する第3層灰黄色粘土から、南周溝で広口壺(10)・北周溝で二重口縁壺(12)が出土した。なお、北西隅には土器棺墓1が位置している。

SX-5

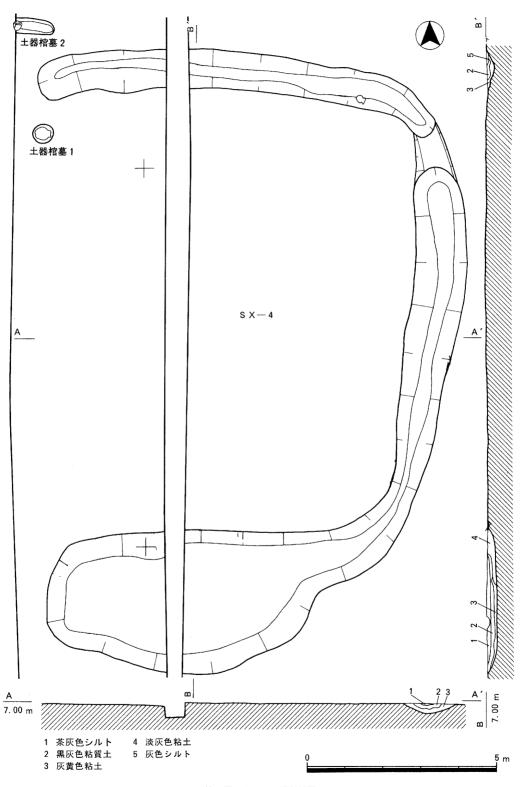
調査区の南西部で約2分の1を検出した。西側は調査区外に至るため全容は不明であるが、東辺の中央部に陸橋部を有する方形周溝墓である。墳丘の規模は、両端を検出した東辺から推定すると、一辺約11 m前後を測るものと考えられる。方向は、方形周溝墓SX-1・SX-4とは主軸を異にしており、南北軸に対してN-35°-Eを示す。周溝は、幅1.5~3.0 mで、周溝底は水平な面を呈している。深さは0.2 m前後を測る。周溝内部には、上層より第1層茶灰色シルト・第2層黒灰色粘質土・第3層灰黄色粘土が堆積している。遺物は、周溝内の北東隅で二重口縁壷(16)が最下層の灰黄色粘土から出土した他、庄内甕・砥石(17)等が黒灰色粘質土から出土している。

SX-6

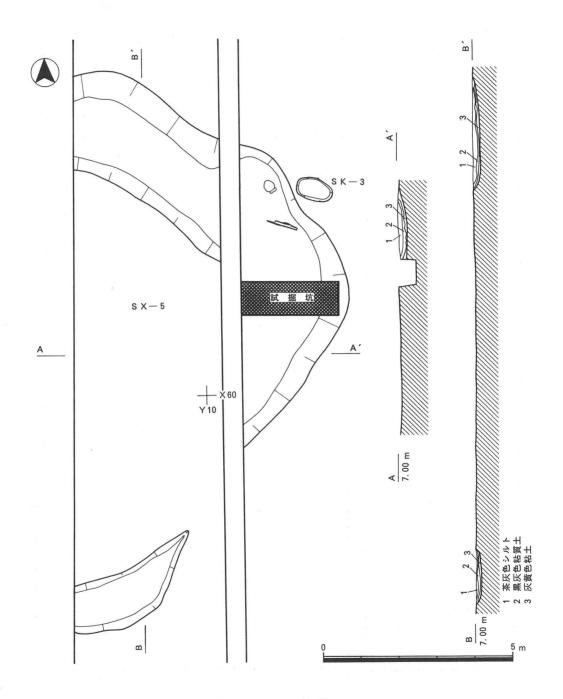
調査区の南部で検出した方形周溝墓で、北周溝と西周溝の存在は認められない。墳丘上には、



第6図 SX-1 (1・2)・SX-2 (3~5)・SX-3 (6~8) 出土遺物実測図



第7図 SX-4平断面図

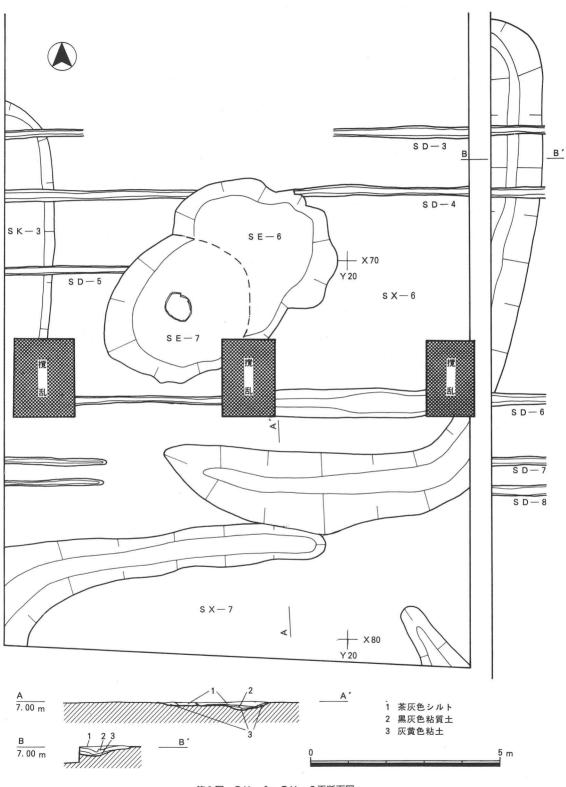


第8図 SX-5平断面図

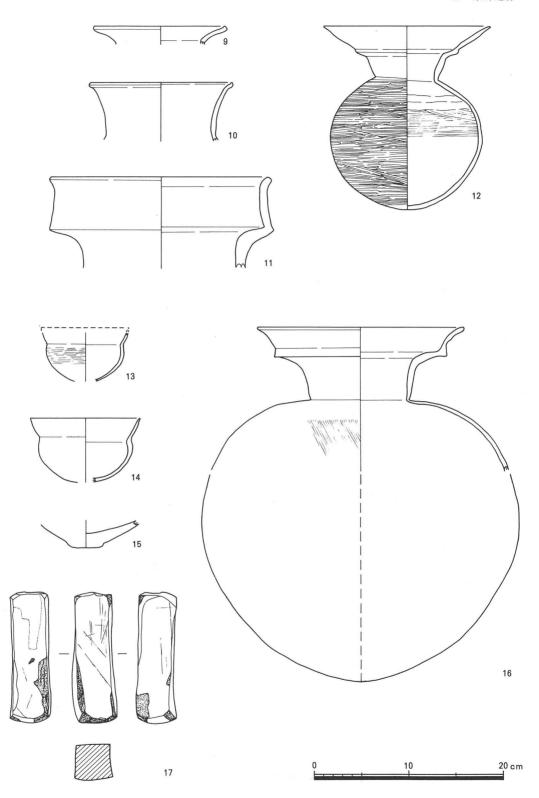
コンクリート基礎や近世の井戸SE-6・SE-7の他、農耕に関連する小溝が多数遺存しており、とくに墳丘の西部が不明瞭である。調査中、土坑SK-3がこの方形周溝墓の西周溝にあたると考えたが、調査の結果からは積極的に周溝とは認めがたく、別遺構とした。方向は南北軸に対してN-10°-Eを示す。方形周溝墓SX-7と共有関係にある南周溝は、内部の堆積状況からみれば、方形周溝墓SX-6が方形周溝墓SX-7を切る関係であることが指摘できる。したがって、この部分を占地する方形周溝墓SX-6がL字形を呈しているのは、方形周溝墓の構築時期の前後関係と、北側に粗砂が広がっているといった地質的な制約に左右された結果と考えられる。周溝幅は、方形周溝墓SX-7と共有する部分が1.94mと幅広であるが、他は1.2m前後で、深さは0.2mを測る。周溝内には、上層より第1層茶灰色シルト・第2層黒灰色粘質土・第3層灰黄色粘土が堆積している。遺物は、第3層灰黄色粘土から庄内甕の細片が少量出土している。

SX-7

調査区の南隅で検出した。北周溝と東周溝の一部を検出したが、大半が調査区以外のため全容は不明である。規模は検出した北辺で10 mを測り、北東隅に陸橋部を有する。周溝の断面は皿形状を呈し、底部はほぼ平坦で幅0.5~2.0 m・深さ0.1 mを測る。内部堆積土は、茶灰色シルト・灰黄色粘土の2層からなり、遺物は茶灰色シルトから庄内甕の細片が少量出土している。

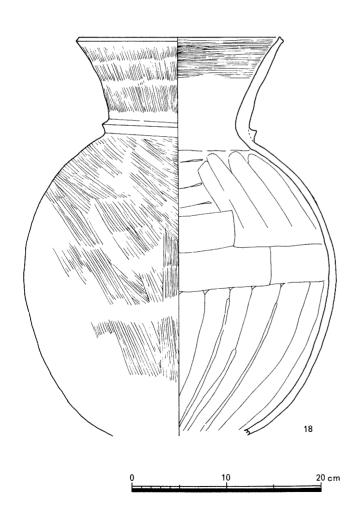


第9図 SX-6·SX-7平断面図



第10図 SX-4 (9~12)・SX-5 (13・14・16・17)・SX-6 (15) 出土遺物実測図

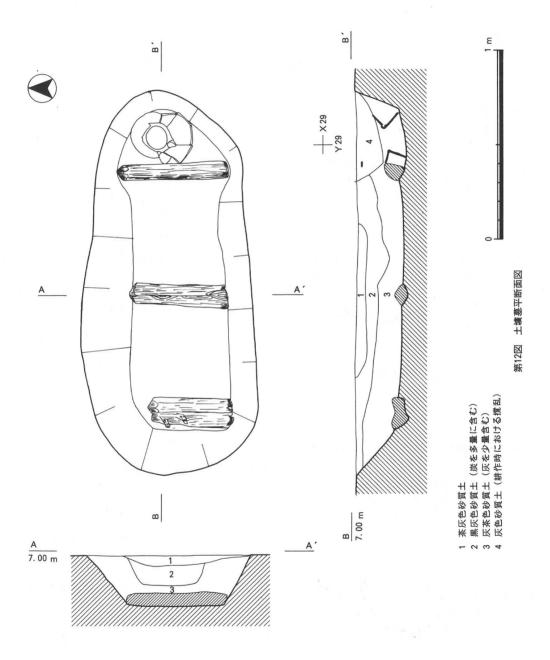
土壙墓

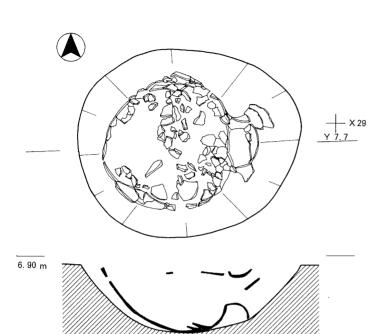


第11図 土壙墓出土遺物実測図

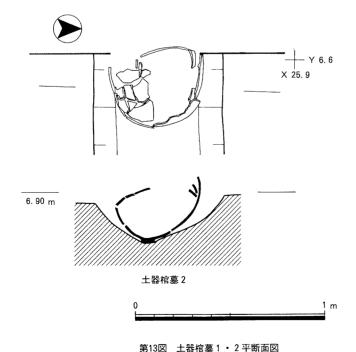
中でレベル高を異にし、形状が枕状を呈する K 3 に注目すれば、頭位を東に持つ埋葬形態が考えられなくもないが、いずれも積極的に検証する資料に乏しい。

内部堆積土は、第1層茶灰 色砂質土・第2層黒灰色砂質土・第 3層灰茶色砂質土・ 4層灰色砂質土が堆積しており、なかでも第2層には多量 の炭を含んでいることが指積 する第4層は中世末期の耕作 土と同質の土層である。した がって、復元した大型直口た がって、復元した大型直した できる。遺物は、中世末期の耕作に伴う開墾によるものと理解できる。遺物は、東隅で検出したこの壷以外に、土師器





土器棺墓1



の細片がごく少量出土したの みである。

なお、大型直口壷(18)を 復元したところ、器高は0.4 mを超えることが判明した。 したがって、埋置当時が完形 であったと考えた場合、土壙 の検出深度は0.25 m前後であ ることから、さらに埋土を含 めて考えれば、少くとも検出 面より0.15 m以上の位置が構 築面であったと考えられる。

十器棺墓1

A-3地区で検出した。方形周溝墓SX-4の北周溝西端の南側に位置する。掘形の上面形状は、東西方向に長い楕円形を呈する。東西幅0.59m・南北幅0.5m・深さ0.17mを測る。この掘形内に、器高0.37mを測る大型広口・電(19)の口縁を東にして横向きにして埋置している。大型広口・電(19)は、検出時点では体部下半の一部が欠損していたが、他は比較的遺存状態が良好であった。

なお、口縁部の一部は三日 月状に割れており、埋置時に 意識的に打ち欠いたようであ る。壷内部から遺物は出土し なかった。

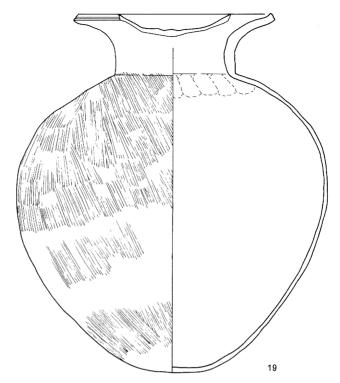
土器棺墓2

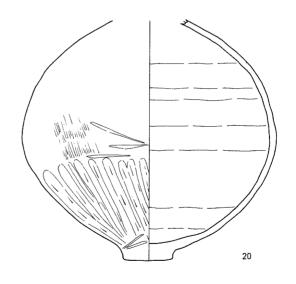
A3地区で検出した。方形 周溝墓SX-4の北周溝西端 の北西側に位置する。底部が 突出する壺(20)を正立させ て土器棺としているが、検出 した位置が調査地西壁部分と 重複する為、詳細は不明瞭で ある。したがって、掘形の規 模や東側に広がる溝状遺構と の関係は判然としない。壺 (20) についても上部が削平 を受けており、全体の形態は 不明である。内部から遺物は 出土しなかった。なお、土器 棺墓としたが、性格について は再考が必要であろう。

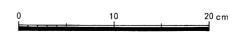
土坑 (SK)

SK-1

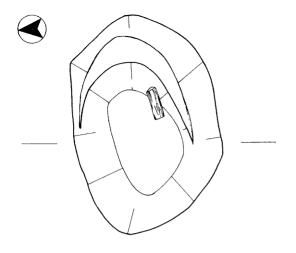
方形周溝墓SX-2の南周 溝内の南東部で検出した。東 西方向に長い楕円形を呈し、 東西1.14m・南北0.74m・深 さ0.3mを測る。内部には、 上層より第1層茶灰色砂質土・ 第2層黒灰色シルト・第3層 灰黒色シルト・第4層灰色粘 質土(炭を含む)・第5層灰 色粗砂・第6層灰色粘土が堆 積している。遺物は、最上層 の茶灰色砂質土から庄内甕の 細片が少量出土している。な

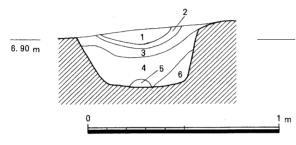






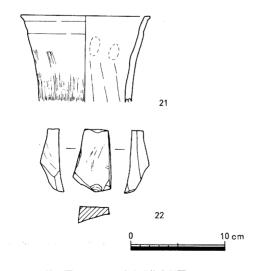
第14図 土器棺1・2実測図





- 1 茶灰色砂質土 (遺物を若干含む)
- 2 黒灰色シルト
- 3 灰黒色シルト
- 4 灰色粘質土 (灰を含む)
- 5 灰色粗砂
- 6 灰色粘土

第15図 SK-1平断面図



第16図 SK-4出土遺物実測図

お、周溝内の土坑であることから、土 壙墓であった可能性も考えられようが、 調査では確認し得なかった。遺物は出 土しなかった。

SK-2

B6地区で検出した。方形周溝墓S X-5の北周溝に近接している。上面 は南北に長い楕円形を呈し、東西0.72 m・南北0.96 m・深さ0.1mを測る。 内部堆積土は、茶褐色粗砂の一層であ る。層中から土師器の細片が出土した が、器種は不明であった。

SK-3

B6地区で検出した。方形周溝墓S X-5の北周溝に近接している。上面 は東西に長い楕円形を呈し、東西0.69 m・南北0.6mを測る。断面は浅い逆 台形状で、深さ0.05m前後を測る。内 部には、方形周溝墓SX-5の周溝最 上層の土層と同質の茶灰色シルトが堆 積している。遺物は出土しなかった。

SK-4

方形周溝墓SX-6の西部で検出した。上面は南北に長い溝状を呈する土坑で、南端はコンクリート基礎・西側は測溝部分にあたるため全容は不明である。検出部で東西1.3m・南北6.3mを測る。坑底はほぼ平坦で、深さは0.07mを測る。内部堆積土は、上層から黒灰色粘土・灰黄色粘土である。遺物は、灰黄色粘土層から直口壺(21)・庄内甕・砥石(22)等が出土している。

井戸(SE)

7基検出した。井戸**SE**-1を除いては、すべて第4C層を構築面とするもので、機能的には灌溉用井戸であったことが窺える。井戸の時期は、出土遺物が少量のため明確にしがたいが、他資料からみて、およそ近世末期~近代初頭に比定されよう。

SE-1

調査区北東部で検出した。木枠+瓦枠井戸で、第4C層上面を構築面としている。掘形の上面は不定形を呈し、東西3.45 m・南北3.9 mを測るが、下部は粗砂でしかも湧水が著しいため、掘形の形状や深さ等は明確でない。掘形の中央部よりやや北側に桶を2段に重ねた後、最上段に瓦枠を1段置き、井戸側としている。下段の桶は径0.64 m・高さ0.9 m、上段の桶は径0.7 m・高さ0.9 mを測る。瓦枠は1段9枚で一周しており、径は0.75 mを測る。瓦枠用の瓦は、厚さ3 cm・幅25 cm・高さ25 cmで、凸面には一単位が楔形を呈する叩き目を1段ごとに角度を変え、4段施文している。なお、井戸内部から瓦枠用の瓦が出土していることから、瓦枠は2段以上存在した可能性が高い。遺物は瓦枠用瓦の他、磁器碗の細片が少量出土した。

SE-2

B5地区で検出した井戸で、西側は井戸SE-3を切っている。掘形の上面は円形状を呈し、 東西3.8m、南北4.1mを測る。なお、掘形中央部付近からは瓦枠用の瓦が数点出土している ことから、井戸SE-1と同様、木枠+瓦枠井戸であったと考えられる。

SE-3

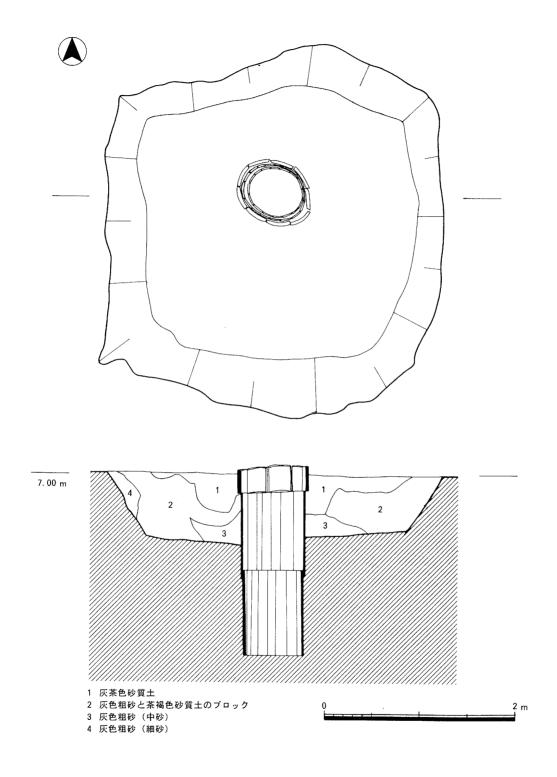
B5地区で検出した井戸で、東部は井戸SE-2によって切られている。掘形の上面は東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西4.2m(推定)・南北3.4mを測る。調査では1m程度掘り下げたが、井戸側等を検出するには至らなかった。

SE-4

B5・B6地区で検出した。掘形の上面は三角形を呈し、東西3.0 m・南北3.5 mを測る。掘形の北隅に桶を3段重ねた井戸側を構築している。最下段の桶は径0.56 m・高さ0.59 mで、その上に径0.58 m・高さ0.59 mを測る桶を重ねている。さらに最上段には上径0.57 m・下径0.64 m・高さ0.37 mを測る桶が重ねられており、井戸側の深さは1.4 mを測る。井戸内部から、陶器の細片が少量出土した。

SE-5

B6地区で検出した。掘形の上面は楕円形を呈しており、東西3.1m・南北3.6mを測る。 ただ、深さは0.6mと浅く、しかも井戸側の施設を伴わないことから、土坑と考えるのが正し いかもしれない。遺物は出土しなかった。



第17図 SE一1平断面図

SE-6

B7・B8地区で検出した井戸で、西肩は井戸SE-7の構築の際に切られており、明確でない。掘形の上面は不定形を呈し、南北4.2mを測る。調査では1.2mまで掘削を実施したが、井戸側等は検出できなかった。

SE-7

B7・B8地区で検出した木枠+瓦枠井戸で、東部は井戸SE-6を切る関係にある。掘形の上面は楕円形を呈し、東西3.8m(推定)・南北3.9mを測る。掘形のほぼ中央部に桶を2段に重ねた後、最上段に瓦枠を2段置き、井戸側としている。下段の桶は径0.68m・高さ0.9m、上段は径0.71m・高さ0.9mを測る。瓦枠は1段9枚で一周しており、径は0.74mを測る。2段めの瓦枠構築に際しては、1段めの瓦枠のつなぎ目に2段の瓦枠を重ねることで、瓦枠の強度を高めている。瓦枠用の瓦は、厚さ3cm・幅25cm・高さ30cmである。

溝(SD)

8条を検出した。すべて東西方向に走る溝である。溝SD-1・SD-2以外は、幅0.1 m 前後・深さ0.03 mと平均しており、しかも断面の形状がU字形を呈することから、犂による痕跡と推定される。構築時期は、出土遺物が少量でしかも細片であるため明確でないが、包含層中に瓦器椀が含まれていないことから、中世末期以降と推定される。

SD-1

調査区の北部で検出した。東西方向に直線的に伸びる構で、方形周溝墓SX-1の東周溝と 方形周溝墓SX-2の南周溝を切る関係にある。幅0.4~0.5 m・深さ00.2~00.9 mを測るが、 流路方向は明確でない。内部堆積土は茶褐色砂質土1層で、内部から土師器羽釜・屋瓦・陶磁 器の細片が少量出土している。

SD-2

A7・B7・C7地区で検出した溝で、東西方向に伸びる。断面の形状は逆台形状を呈し、幅1.4~1.9m・深さ0.04m前後を測る。内部堆積土は茶褐色砂質土1層で、内部から土師器羽釜・須恵質鉢等の細片が少量出土している。

SD-3

A7・B7・C7地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、一部は土坑**SK**-**3**を切っている。断面の形状は浅いV字形を呈し、幅0.2 m・深さ0.03 m前後を測る。内部堆積土は黒灰色シルト1層で、内部から土師質小皿等の細片が少量出土している。

SD-4

 $A7 \cdot B7 \cdot C7$ 地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、土坑SK-3の一部を切り、井戸SE-6 に切られる関係にあたる。断面の形状はU字形を呈し、幅 $0.2\sim0.3$ m・深さ0.07

m前後を測る。内部堆積土は黒灰色シルト1層である。遺物は出土しなかった。

SD-5

 $A8 \cdot B8$ 地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、東端は井戸SE-7によって切られている。幅 $0.15\sim0.2$ m・深さ0.05 m前後を測る。内部堆積土は黒灰色シルト 1 層である。遺物は出土しなかった。

SD-6

 $A8 \cdot B8 \cdot C8$ 地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、4 箇所はコンクリートの基礎によって切られている。幅 $0.2\sim0.8\,\mathrm{m}$ ・深さ $0.1\,\mathrm{m}$ を測る。内部堆積土は黒灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD-7

 $A8 \cdot B8 \cdot C8$ 地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、一部は方形周溝墓SX - 6を切っている。幅0.2 m・深さ $0.01 \sim 0.04$ mを測る。内部堆積土は黒灰色シルト1層である。遺物は出土しなかった。

SD-8

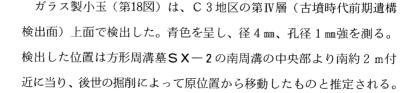
 $A8 \cdot B8 \cdot C8$ 地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、溝SD-7 同様、方形周溝墓 X-6 を切っている。幅 $0.1\sim0.3$ m・深さ0.03 mを測る。内部堆積土は黒灰色シルト1 層である。遺物は出土しなかった。

2) 出土遺物

調査の結果、当調査地では古墳時代前期の墓域と、中世から近世に至る水田を検出した。したがって、方形周溝墓の周溝から出土した遺物以外は、細片が多く量も少ない。方形周溝墓の周溝内から出土した遺物は、概ね庄内式新相に位置付けられよう。一方、包含層出土の遺物には古墳時代後期から近世に至る雑多な遺物があるが、全て細片で、ローリングを受けたものが大半を占めた。遺物の時期別では、古墳時代後期に比定されるものが僅かに含まれる程度で他は中世以降に比定されるものが多い。





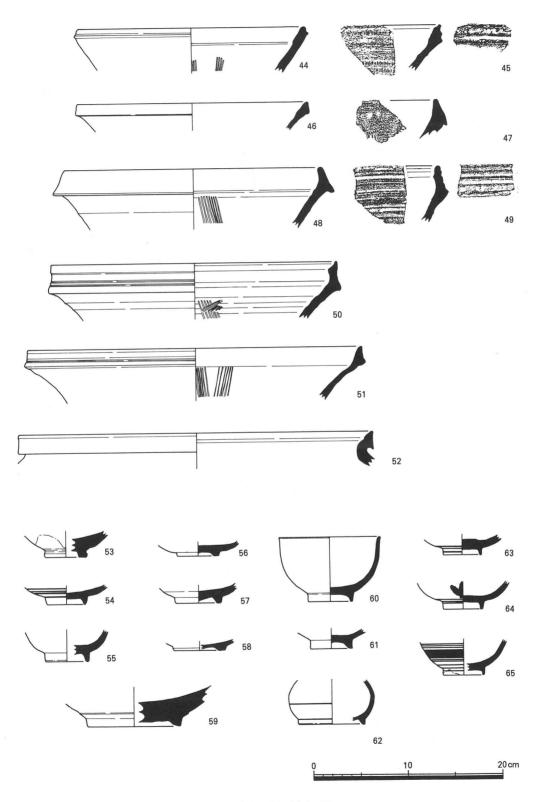




第18図 包含層出土 遺物実測図1

第19図 包含層出土遺物実測図2

10 cm



第20図 包含層出土遺物実測図3

第4章 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・	調整	等 σ) 特	徴	色	調	胎	±.	焼 成	備	考
1	直口壺	18.4	体部から「く 直線的に伸びる みとなり、端部 ョコナデ。	口縁部。	端部近			茶褐色		長石・ 角閃石 む		良好		
-Ξ	SX-1													
2	獲	14.1 15.6	やや上方で張 持って屈曲し、 伸びる口縁部に 外面体部ハケ コナデ。内面体	斜上方へ 至る。端 ナデ(9	内湾し 部は内 本/1	た後直 へ巻き cm)、口	線的に 込む。 縁部ョ	淡赤褐	色	0.5~ 程度の を多量 む	長石	良好	表皮录	離
− Ξ	SX-1		ズリ、口縁部ヨ	コナデ。										
3	直口壺	12.7	上外方へ直線 肉を減じて尖り 外面密なヘラ	ぎみに終	わる。			淡赤褐	色	1 m程 長石が される	散見	良好	表皮剥	離
-=	SX-2													
4	甕 SX-2	16.0	上方で張る体 た後直立する口 口縁側面には7 外面体部板状 ナデ。内面体部 縁部ョコナデ。	縁部に至 条の疑凹 工具によ	る。端 線が廻 るナデ、	部は丸 る。 、口縁	く終る。 部ヨコ	外面黑色内面乳		0.1~0 程度の を多量 む	長石	良好	外面煤	付着
5	甕 SX-2	14.5 18.9	張りの少い丸 屈曲し、外反ぎ 部は外に面を持 外面肩部右上 ケナデ(9本/c 部ヘラケズリ、	みに伸び ち、つま りタタキ m)、口縁	る口縁 み上げ (7本/ 部ョコ:	部に至 られる。 'cm)、! ナデ。	る。端 。 以下ハ	茶灰色		長石・ 石を大 含む		良好		
6	甕	14.8	体部から「く を減じて直立す ぎみに終わる。 外面ヨコナデ	」の字形 る口縁部	に屈曲に至る。	した後、端部	は尖り	淡橙色		長石を	含む	良好	表皮剥	離
	SX-3													
7 一三	甕 SX-3	14.1 19.6	体部中位に最 「く」の字形に る。端部は丸み 外面肩部右上 位ハケナデ(82 面体部ヘラケズ	屈曲し、 を持って りタタキ レ/cm)、	外反する つまみ_ (7本/ 口縁部:	る口縁を 上げらる cm)、J ョコナ	部に至 れる。 以下縦	茶灰色		角閃石量に含		良好	外面下 煤付着	
8	甕	13.2	***************************************				3 415 3		z.	ET.	64. BB	⇔ 47	田市上	h
_		17.5	球形に近い体 外反ぎみに伸び み上げられる。 外面肩部右上 ケナデ(11エ)	る口縁部 りタタキ m)、口縁	に至る。 (8本/ 部ョコ _フ	端部(cm)、↓ トデ。F	はつま	淡黒灰色	2	長石・注 石を含		良好	黒斑あ	יי
-=	SX-3		部ヘラケズリ、											
9	甕	13.5	体部から「く 外反ぎみに伸び 面を持ち、つま ョコナデ。	る口縁部に	に至る。	端部は		茶褐色		長石・1 石を含む		不良	煤付着 表皮剥	睢
	SX-4													

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	Jets ++	/# #F
図版番号	出土地点 広口壺	法量 器高 14.8		+	胎 長石を含む	焼成良	備 考 風化著しい
	72A 3E		上外方へ伸び、端部近くで斜上方へ外反する 口縁部。端部は外に面を持ち、つまみ上げる。		長石を召む	R	歴(化者しい
_=	SX-4						
11	二重口縁壺	22.7	直立する頸部から水平近くに屈曲した後、外に稜を持ち、内傾ぎみに直立する口縁部に至る。端部近くでは外反ぎみとなり、端部は丸みのある面を持つ。 ョコナデ。		0.1~1 mm 程度の長石 を大量に含 む	良	表皮剥離
<u>−≡</u>	SX-4						
12	二重口縁壺	17.5 19.3		橙色	精良	良好	
四	SX-4		他はナデ。				
13	小型壺	(9.2)	半球形を呈する体部から内に鈍い稜を持ち 斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部 は欠損する。 外面体部ヘラケズリ後上位ヘラミガキ、口 縁部ョコナデ。内面体部ナデ、口縁部ョコナ		0.1㎜程度 の長石を含 む	良好	黒斑あり
	\$X-5		デ。				
14	小型壺	11.5 6.8	深めの半球形を呈する体部から内に稜を持ち、上外方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終る。 外面体部へラケズリ後へラミガキ?体部上半~口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ、口縁部	淡茶色	精良	良好	
	SX-5		ョコナデ。				
15	壺	3.1	体部からわずかに突出する平底の底部。 ナデ。外面底部周縁に工具痕あり。	外面淡橙色 内面乳灰色	精良	良好	
	SX-6	PARAMETER AND					
16	二重口縁壺	21.6 37.1	強く張った肩部から上外方へ直立した後、強く外反し明瞭な段を有し、さらに上外方へ外反して口縁部に至る。口縁部内外面ヨコナデ。外面肩部ハケナデ。	淡灰黄色	0.1~1 mm 程度の長石 を含む		一個体分を 検出したが 体部以下は 風化が顕著 で復元が不
	SX-5						可能であった
18	直口壺土壙墓	20.8 42.3	長円形の体部から「く」の字形に屈曲し、外に突帯を廻らせた後上外方へ直線的に伸びる 口縁部に至る。端部はわずかにつまみ上げる。 外面ハケナデ(4本/cm)後口縁部・突帯周 囲ョコナデ。内面体部へラケズリ後ナデ、口 縁部ハケナデ後ョコナデ。	淡茶色	0.1~1 mm 程度の長石 を散見する		外面体部煤 付着
19 — <u>ლ</u>	広口壺 土器棺1	19.8 37.4	張りの強い倒卵形の体部から屈曲し、外傾して直立した後外上方へ外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げられ、外に凹線が廻る。外面体部ハケナデ(5本/cm)口縁部ョコナデ、内面体部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ョコナデ。	乳灰色~赤 灰色	精良		口縁部打ち欠き
20	壺	底径 5.1	球形の体部に突出する平底が付く。 外面体部下半板状工具によるナデ、上半ハケナデ。内面体部下半にハケナデ?上半は粘 土接合痕顕著に残る。		長石・雲母角閃石を含む	良好	
—四	土器棺 2						

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
21	直口壺 SK-3	13.2	上外方へ直線的に伸びる口縁部。上方では 凹線状の鈍い段が2条廻り、端部は外へ丸く 上面は平担に終る。 外面ハケナデ(5本/cm)の後ョコナデ。内 面シボリ・指おさえ後ョコナデ。	乳白色	0.1~0.5mm 程度の長石 を多量に含 む	良好	
23	須恵器 杯蓋	12.7	水平に伸びる天井部から屈曲し、斜下方へ伸びる短い口縁部に至る。口縁部側面には凹線状の窪みが一周する。 外面回転ナデ。内面天井部静止ナデ、口縁	淡灰色	精良	堅緻	口縁部上面灰かぶり
	B 3 地区 第Ⅲ層		部ヨコナデ。		manufacture de la constante de		
24	須恵器 杯身		斜上方へ直線的に伸びる底部から斜上方へ伸びる受部に至る。立ち上がりは斜内方へ伸びるが上部を欠損する。	灰色	精良	堅緻	
	B 4 地区 第Ⅲ層		外面受部端1.5cm以下回転ケズリ、以上回転 ナデ。内面回転ナデ。				
25	須恵器 杯身	<u></u>	斜上方へ内湾して伸びる底部から外上方へ 短くつまみ出される受部に至る。立ち上がり は上内方へ伸びるが上部を欠損する。 外面受部端1.6cm以下回転ケズリ、以上回転	灰色	精良	堅緻	
	B 4 地区 第Ⅲ層		ナデ。内面回転ナデ。	8			
26	白磁碗	14.2	玉緑状の口縁部のみ遺存。	淡灰青色	精良	堅緻	
	C8地区 第Ⅱ層						
27	白磁 碗	15.2	玉縁状の口縁部のみ遺存。口縁部下位に凹 線状の窪みが廻る。	淡灰青色	精良	堅緻	
	C 3地区 第I層						
29	土師器 高杯		八角形に面取りされた脚柱状部上方のみ遺存する。 外面へラ状工具による面取り後ナデ。内面 しばり目遺存。	淡赤灰色	精良	良好	
	D2地区 第I層						
30	須恵質土器 擂鉢		斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部はつまみ上げられ、外傾する面を持つ。 外面回転ナデ。内面静止ナデ、回転ナデ。	灰青色 口縁部外面 暗青灰色	精良	堅緻	重ね焼痕
any succession	D 2 地区 第 I 層	, company					
31	須恵質土器 擂鉢	28.9	斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。強いナデによって外面には凹凸が認められる。端部は外傾する丸みのある面を持つ。 回転ナデ。	淡灰色 口縁部外面 暗青灰色	精良	堅緻	重ね焼痕
	B 4 地区 第Ⅲ層						
32	須恵質土器 擂鉢	23.0	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は上下に拡張し、外傾する面を持つ。 回転ナデ。	灰青色	精良	堅緻	
	B 8 地区 第Ⅲ層						

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
33	須恵質土器 擂鉢 B8地区 第Ⅲ層	26.9 —	斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部。端部は 上端つまみ上げ、下端は肥厚し、丸みのある 面を持つ。 回転ナデ。	淡灰色 口縁部外面 灰色	精良	堅緻	重ね焼痕 内面器表剥 離する
34	土師質土器 擂鉢	27.2	上外方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部は 下端肥厚し、外傾せる面を持つ。 外面ナデ、口縁端部ョコナデ、一部にハケ ナデ。内面ナデ。	淡灰色	精良	良	
	B 8 第Ⅲ層						
35	土師質土器 擂鉢	29.8 —	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は外傾する面を持つ。 外面へラケズリ後ヨコナデ。内面ヨコナデ。 擂目は14本/2.5 cm。	赤茶色	0.5~1 mm 程度の長石 を含む	良好	
	C 3 第Ⅲ層						
36	瓦質土器 擂鉢	23.9	斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部は 外傾する凹面を持つ。 外面ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。 擂目は7本/1.3 cm。	淡灰色~黒 灰色	精良	良好	
	B 8 地区 第Ⅲ層						
37	瓦質土器 擂鉢	27.9	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は器 肉を増し、外傾する面を持つ。 外面ナデ、口縁端部ョコナデ。内面ョコナ デ。	淡灰色	精良	良	表皮剥離 内面煤付着
	C 7地区 第Ⅲ層						
38	瓦質土器 擂鉢	30.0	斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部下方は肥厚し、垂直な凹面を持つ。 外面ナデ、口縁端部ョコナデ。内面ナデ。 擂目は8本/1.8cm。	淡灰色	精良	良好	内面煤付着
	B 3 第Ⅲ層					1	
39	瓦質土器	22.5	体部から「く」の字形に屈曲し、強く折り 返す口縁部に至る。 ナデ。	乳灰色	1~2 m程 度の長石を 散見する	良	
	C 8 地区 第Ⅲ層						
40	瓦質土器 獲	29.5	上内方に伸びる体部から丸く屈曲し、丸く 終る短い口縁部に至る。 外面体部タタキ、口縁部ヨコナデ。内面ナ デ。	白灰色~淡 灰黒色	1 ㎜程度の 長石を含む	良好	
	B3第Ⅱ層						
41	瓦質土器 甕		斜内方に伸びる体部から丸く屈曲し、丸く 終る短い口縁部に至る。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰黒色	1 m程度の 長石を含む	良好	
	B 1 第Ⅲ層						
42	瓦質土器 甕	With the second	上内方へ伸びる体部から角度を変えた後丸 く屈曲し、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部 に至る。端部は丸く終る。 外面体部横タタキ(3本/cm)、口縁部ョコ	淡灰色	0.1~0.5㎜ 程度の長石 を含む	良好	全体に風化
	B4第Ⅲ層		ナデ。内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。				

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎土	焼 成	備考
43	瓦質土器 火舎 C 2 地区		体部に2本の凸線が廻り、凸線間に文をス タンプしている。 内外面ナデ。	淡灰黒色	精良	良好	
	第[層						
44	丹波焼 擂鉢	23.5	斜上方へ直線的に伸び、内に段を持って端 部に至る。端物は外傾し、沈線状の窪みが一 周する。 外面静止ナデ後回転ナデ。内面回転ナデ。	茶褐色	精良	堅緻	
	D 3 地区 第Ⅲ層		擂目は4本/cm2単位。				
45	陶器 擂鉢	_	斜上方へ直線的に伸び、器肉を増して直立 する口縁部は至る。上端部は斜上方へつまみ 出され、側面に2条の凹線が廻る。 回転ナデ。擂目9本/2.2cm2単位遺存。	淡茶色	精良	堅緻	産地不明
	D 3 地区 第Ⅲ層		EITAY 7 6 IN CI VAY 2.200 0 TELASTIO				
46	陶器 擂鉢	24.1	斜上方へ外反ぎみに伸び、口縁部に至る。 端部は下部が肥厚し、外傾する面を持つ。 回転ナデ。	淡茶色	精良	堅緻	産地不明
	B 4 地区 第Ⅲ層						
47	備前焼 擂鉢		斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部は 上部は拡張し、下部が肥厚し、外傾する広い 面を持つ。	赤茶色	1 m程度の 長石を含む	堅緻	
	C7·C8 地区 第Ⅱ・Ⅲ層		ョコナデ。擂目は5本/1.2 ㎝。			and desired and de	
48	備前焼 擂鉢	26.9	斜上方へ直線的に伸びる体部〜口縁部。端 部は上内方へ伸び、上端は丸く、下端は面を 持ち、内傾する広い面を持つ。 回転ナデ。すり目は8本/2.1cm。	灰色~赤茶 色	精良	堅緻	
	B 4 地区 第Ⅲ層						
49	備前焼擂鉢		斜上方へ外反ぎみに伸びた後上方へ拡張する口縁部。上端は段を有し、側面には3条の 凹線状の段を持つ。 回転ナデ。擂目は4本1cm。	赤茶色	精良	堅緻	
	C 4 地区 第Ⅲ層		四転グラ。抽日は4本1㎝。				
50	備前焼 擂鉢	29.9	斜上方へ外反ぎみに伸びた後上方へ拡張する口縁部。上端はつまみ上げられ、側面には2~3条の凹線状の窪みを有する。	赤茶色	精良	堅緻	
	D 3地区 第 I 層		回転ナデ。擂目は6本/1.5cm3単位遺存。				
51	信楽焼 擂鉢	34.8	斜上方へ外反して伸びた後上方へ拡張する 口縁部。端部ト、2条の沈線状の弾みを有する。 は凹面となり、2条の沈線状の弾みを有する。	黄茶色	0.2~1 mm 程度の長石 を多量に含	堅緻	
	D 3地区 第Ⅲ層		回転ナデ。福目は6本/1.5cm2単位遺存。		t		
52	常滑焼甕	37.1	体部から丸みのある「く」の字形に屈曲し、 口縁部に至る。端部は上下を拡張し、広い外 傾する面を持つ。口縁上面には沈線が廻る。	茶色	1 mm程度の 石粒を散見 する	堅緻	内面自然釉
	B3地区 第I層		回転ナデ。				

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) [法量 器]径 器高	形	態・	調	整	等(の 特	徴		色	調	胎	±	焼成	備	考
53	唐津焼 碗? C 8 地区 第Ⅲ層	高台径高台高		は幅広で カンナ	と近い値 で低く、 ・削り。 いら高さ	竹の	節状を	を呈す	`る。	、高 τ	台灣	 「灰色		精良		堅緻	細かし	貫入
54	刷毛目唐津 碗 C8地区 第Ⅲ層	高台径高台高		体部に	に下る高 こカンナ 民部にト	削り	の段列	桟る。				音茶色		精良		堅緻	畳付ね 2個死	
55	伊万里焼系 椀 C 4 地区 第Ⅲ層	高台径高台高		水平だ 高台は関 畳付置							, P	L白色		精良		堅緻	二次烤	越
56	唐津焼 Ⅲ? A 2 地区 第Ⅲ層	高台径		は幅広て 分が認め カンナ		て低。						.白色		精良		堅緻	見込み 付に隆 個残有	枕 3
57	唐津焼 皿 C 5 地区 第Ⅲ層	- 高台径。 高台高(4.7	垂直に付 に稜を持 カンナ		台内(畳付置	は突出	出する				色		精良		堅緻		
58	唐津焼 Ⅲ C 4 地区 第Ⅲ層	- - 高台径: 高台高(5.4	が垂直に カンナ	で浅い で浅く。 ・削り。 個残存	高台F 畳付~	内はオ	つずか	に突出			.白色		精良		堅緻		
59	唐津焼 大皿 (絵唐津) C7地区 第Ⅲ層	- 高台径 ⁽ 高台高(9.7	高台の削	削り。			アに外	上方~	伸びる	。暗	灰青色	£.	精良		堅緻		
60	京焼 碗 B 4 地区 第Ⅲ層		4.7	わずかに 肉を減じ 体部中		みの[みに* にカン	コ縁部 冬る。	『に至 高台	る。端 は垂直	部は器 に下る	ş .	灰色		精良	de autoritation	堅緻	畳付に 2個残 細かい	存
61	京焼 碗 B 4 地区 第Ⅲ層	- 高台径 4 高台高 (4.3	部わずか	下る高 に突出 み露胎	する。		·幅広、	、高台	·内中央	黄	灰色	and the second s	精良		堅緻	細かい	貫入
62	伊万里焼系 油壺 B8地区 第Ⅲ層	最大径 9 高台径 6 高台高 0	9.0 6.9	断面U字 畳付・	ら上外 形で低 内面露 文様あ	く垂直 胎	重に付	tく。				青色		精良		堅緻		

遺物番号 図版番号	器 種 出土地点	(cm) 口径 法量 器高	形	態	• 誹	整	等	の特	徴	色	調	胎	土	焼 成	備	考
63	伊万里焼系 碗 A 2 地区 第Ⅲ層	— 高台径 4.0 高台高 0.7	る。高 畳付記	台は断 落胎、	面U字 見込み	形で にド	薄く 重		く。 のかき	白青色	Ļ	精良		堅緻		
64	伊万里焼系 碗 D3地区 第Ⅲ層	高台径 4.1 高台高 0.8	る。高音 畳付置	合は断 客胎。	面U字	形で	薄く国	、内湾し 重直に付 に2条の	<.	白青色	Ļ	精良		堅緻		
65	伊万里焼系 碗 B 8 地区 第Ⅲ層	高台径 4.4 高台高 0.8	方へ直線 畳付記	泉的に 8胎(i 本部 3:	伸びる 高台脇 条・幅	。 に釉 広1	なだれ 条・2	条、腰		白青色		精良		堅緻		

第5章 ま と め

今回の東郷遺跡第20次調査では、庄内式新相~布留式古相に比定される方形周溝墓7基・土壙墓1基・土器棺墓2基を検出し、当遺跡内で新たに墓域が存在することが確認できた。当遺跡内では、本調査以降も当調査研究会および八尾市教育委員会により発掘調査が行なわれており、昭和62年6月1日の時点で24次に亘る調査が実施されている。このように、当遺跡では、調査件数の増加に伴って弥生時代中期~鎌倉時代に至る数多くの資料が蓄積されており、八尾市域の遺跡のなかでも比較的実態が明らかな遺跡と言える。ここでは、今回の調査成果および既往調査成果をもとに、当遺跡内での各時期ごとの推移を考えてみたい。

弥生時代中期(畿内第Ⅲ様式~第Ⅳ様式)

この時期の遺構は、遺跡推定範囲の南西部に位置する第15次調査地で土坑2基が検出されている他、第10次・第11次・第14次・第20次調査地でこの時期に比定される土器片が少量出土している程度で、遺跡の詳細は不明である。

弥生時代後期(畿内第V様式)

第13次調査地で土坑、第24次調査地で遺物包含層を確認しており、遺跡推定範囲の北東部一帯にこの時期の集落が存在していたようである。また、今回の第20次調査地ではこの時期に埋没した自然河道を検出している。

古墳時代前期(庄内式古相)

この時期の集落の中心は、遺跡推定範囲の西部に集中する傾向を示している。居住域は、第 5 次・第 9 次・第 14次・第 19次調査地付近にあったようで、第 5 次・第 14次調査地では竪穴住居 4 棟・掘立柱建物 2 棟を検出している。墓域は、第 17次・第 21次調査地で方形周溝墓 2 基・土器棺墓 3 基が検出されており、居住域に近い位置に墓域を設定している。なお、第 3 次・第 4 次・第 5 次・第 18次調査地の南部付近より南側は沼沢地が広がっていたことが確認されている。以上のことから、この時期の集落の景観を復元すれば、沼沢地の周辺に居住域を設け、その北側に墓域を設定していたことが推定できる。ただ、生産域である水田は現時点では検出されていない。

古墳時代前期(庄内式新相~布留式古相)

この時期の集落は前代と同様遺跡推定範囲の西部にあったようで、第4次・第5次・第8次・第11次・第14次・第16次調査地で遺構・遺物を検出している。居住域の中心は第8次・第11次 調査地で、ここでは竪穴住居8棟・掘立柱建物12棟を検出している。居住域内の建物数の増加 が示すように、この時期は前代に比して集落規模を拡大しており、周辺に存在する同時期の集 落の推移と符合した結果を示している。この時期の墓域は、居住域の南東部に位置する今回の 第20次調査地で、方形周溝墓7基・土壙墓1基・土器棺墓1基を検出している。

古墳時代中期

この時期の集落の中心は遺跡推定範囲の東部に移動したようで、第1次・第2次・第13次調査地で土坑等が検出されている。なお、第21次・第24次調査地では、包含層から円筒埴輪が出土しており、付近一帯に古墳が存在した可能性が高いと考えられる。

古墳時代後期

この時期の遺構は、第1次・第6次・第7次調査地で検出されている。集落の中心は第6次 調査地一帯にあったようで、前代の集落よりやや南側へ移動したことが指摘できる。以後平安 時代に至るまでの遺構は検出されていない。

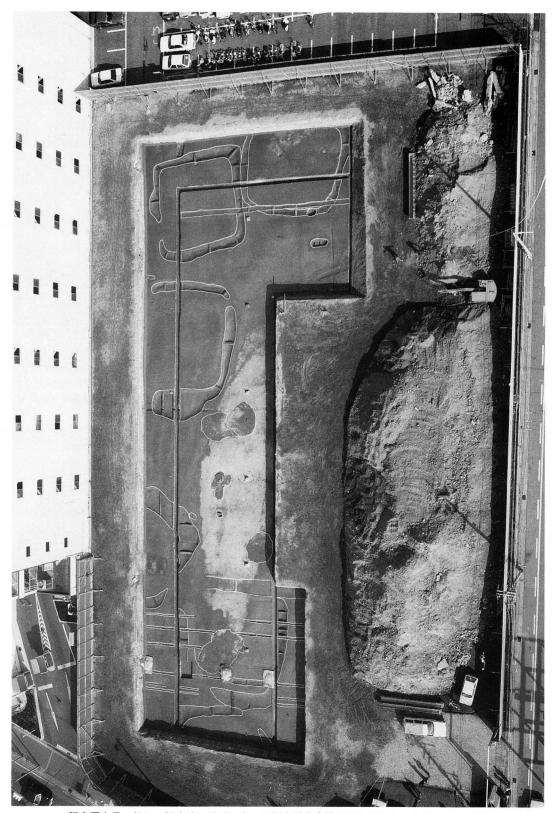
平安時代

鎌倉時代

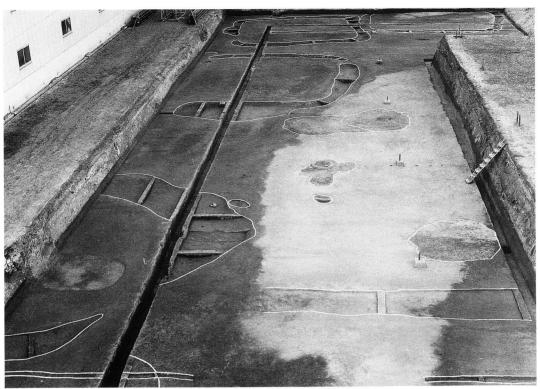
平安時代の遺構は、前期と後期に2分できる。前期の遺構は、遺跡推定範囲の東部に位置する第1次調査地で、掘立柱建物1棟と井戸1基を検出している。後期の遺構は、遺跡推定範囲の西部に集中する傾向で第14次・第21次調査地で、井戸・土坑・小穴・溝等が検出されている。

この時期の遺構は、第3次・第4次・第15次・第16次・第18次調査地で水田を検出している。 さらに、第5次・第8次・第9次・第10次・第20次調査地では、古墳時代前期の遺構を削平して東西・南北方向に延びる小溝を検出しており、この時期以降条里区割に規制された土地利用が実施されていたことが窺える。一方、遺跡推定範囲東部の第1次・第2次・第6次・第7次・第24次調査地では、厚さ30~60cmにわたる整地層の存在が認められ、この時期に大規模な開発が実施されていたことが推定される。

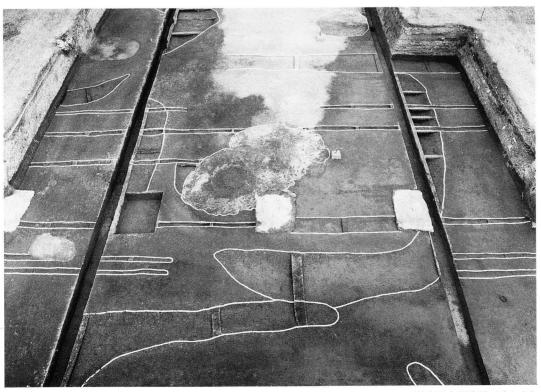
*				
,				



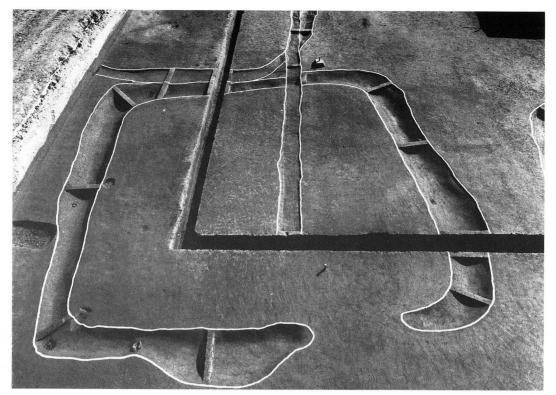
調査区全景 但し、調査地の拡張に際して調査区北東隅を埋め戻したためSX-3は写っていない。



調査区北部遺構(南から)



調査区南部遺構(南から)



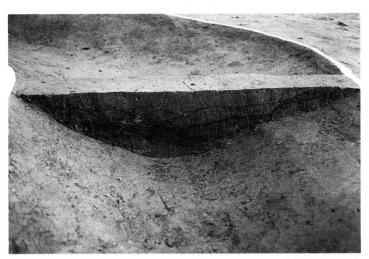
S X - 1 (西から)



SX—1南周溝内遺物出土状況 (東から)



東周溝 (南から)



南周溝(西から)



SX一1周溝内土層堆積状況 南周溝 (東から)